

茨城県教育財団文化財調査報告第34集

研究学園都市計画手生子工業団地  
造成事業地内埋蔵文化財調査報告書

大 境 遺 跡

昭和 61 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団

正 誤 表

頁	行	誤	正
25	第31図	SD7 <sup>●</sup>	SD35 <sup>○</sup>
◆	◆	SD17 <sup>●</sup>	SD35 <sup>○</sup>
84	1	建物 <sup>●</sup>	遺物 <sup>○</sup>
238	2	水海道市大谷津A <sup>●●●●</sup>	谷和原村大谷津A <sup>○<sub>1</sub>○<sub>2</sub>○<sub>3</sub>○<sub>4</sub></sup>

茨城県教育財団文化財調査報告第34集

研究学園都市計画手生子工業団地  
造成事業地内埋蔵文化財調査報告書

おた ぞかい 遺 跡  
大 境

昭和 61 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団

# 序

茨城県筑波郡豊里町は、筑波研究学園都市の一画をなしているところで、豊里町の手子生地区には、緑豊かな工業団地を目的とする「研究学園都市計画手子生工業団地造成事業」が、住宅・都市整備公団によって進められております。その事業地内には、埋蔵文化財包蔵地である大境遺跡が所在しております。

これに伴い、財団法人茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団と埋蔵文化財発掘調査事業についての委託契約を結び、昭和59年4月から昭和60年7月まで大境遺跡の発掘調査を実施いたしました。その後、出土品等の整理を実施し、この度、「研究学園都市計画手子生工業団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書」として刊行の運びとなりました。

本書が記録保存としての役割だけでなく、教育及び研究の資料として、また、郷土の歴史の理解を深めるために、広く活用されますことを希望いたします。

最後に、発掘調査及び整理作業に当たり、住宅・都市整備公団、茨城県教育委員会、豊里町教育委員会をはじめ、関係諸機関並びに関係各位の御指導・ご協力に対しまして、衷心より感謝の意を表します。

昭和61年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 竹内藤男

# 例 言

- 1 本書は、住宅・都市整備公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が、昭和59年4月1日から昭和60年7月31日まで調査を実施した。茨城県筑波郡豊里町大字手子生字大境に所在する大境遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 大境遺跡の発掘調査及び整理に関する組織は、次のとおりである。

理 事 長	竹 内 藤 男	～昭和56年11月、昭和58年12月～	
副 理 事 長	川 又 友 三 郎	昭和58年7月～	
常 務 理 事	綿 引 一 夫 萩 原 藤 之 助	～昭和60年3月 昭和60年4月～	
事 務 局 長	小 林 洋 堀 井 昭 生	～昭和60年3月 昭和60年4月～	
調 査 課 長	青 木 義 夫	昭和59年4月～	
企 画 管 理 班	班 長	市 毛 洋 一	～昭和60年3月
	◇	北 島 博	昭和60年4月～
	上 任 調 査 員	加 藤 雅 美	昭和57年4月～
	上 事	鈴 木 三 郎	～昭和60年3月
	◇	田 所 多 佳 男	昭和60年4月～
	◇	海 老 沢 一 夫	～昭和60年3月
調 査 及 び 整 理 担 当 者	◇	大 曾 根 徹	昭和58年4月～
	◇	山 崎 初 雄	昭和60年4月～
	班 長	石 井 毅	昭和59年度
	◇	安 蔵 幸 重	昭和60年度
	主 任 調 査 員	久 野 俊 彦	昭和59年度調査
	◇	柴 正 一	昭和59・60年度調査
◇	山 本 静 男	昭和59年度調査	
◇	川 井 正 一	昭和59年度調査・昭和60年度整理・執筆	
◇	人 見 暁 朗	昭和60年度調査	
調 査 員	高 村 勇	昭和60年度調査	
整 理 班 長	石 井 毅	昭和60年度	

- 3 本書は、発掘担当者の協力を得て、川井正一が執筆・編集を行った。
- 4 発掘調査に当っては、堀越正行氏（千葉県市川考古博物館主任）の御指導を得た。
- 5 本書の作成にあたり、石質鑑定は、蜂須紀夫氏（上郷高等学校教頭）に依頼した。
- 6 発掘調査及び出土遺物の整理に当って、御指導、御協力を賜った関係諸機関、各位に深く謝意を表します。

# 目 次

序	
例 言	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法	2
1 地区設定	2
2 基本層序	2
3 遺構確認	3
4 遺構調査	3
第3節 調査経過	4
第2章 位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	9
第3章 遺構と遺物	12
第1節 遺跡の概要と記載方法	12
1 遺跡の概要	12
2 記載方法	12
第2節 縄文時代の遺構と遺物	17
1 竪穴住居跡	17
2 土坑	89
3 埋裏	131
4 集石	132
5 焼土遺構	136
6 包含層出土の土器	139
7 土製品	153
8 石器	156
第3節 平安時代の遺構と遺物	176
1 竪穴住居跡	176
2 土坑	180

第4節	その他の遺構と遺物	191
1	先土器時代の遺物	191
2	中・近世の遺物	194
3	時期不明の遺構	195
第4章	まとめ	231
第1節	縄文時代について	231
1	遺構群について	231
2	石器の石材選択について	238
第2節	平安時代について	241
終章	むすび	244
写真図版		

# 挿 図 目 次

<p>第 1 図 調査区呼称方法概念図…………… 2</p> <p>第 2 図 基本土層図…………… 2</p> <p>第 3 図 遺跡全体図……………5</p> <p>第 4 図 遺跡地形図…………… 8</p> <p>第 5 図 遺跡位置図と周辺の遺跡…………… 10</p> <p>第 6 図 2号竪穴住居跡実測図…………… 17</p> <p>第 7 図 2号竪穴住居跡 出土土器接合関係図…………… 18</p> <p>第 8 図 2号竪穴住居跡 出土土器拓影図…………… 19</p> <p>第 9 図 3号竪穴住居跡実測図…………… 29</p> <p>第 10 図 3号竪穴住居跡 出土土器接合関係図…………… 21</p> <p>第 11 図 3号竪穴住居跡 出土土器実測図・拓影図…………… 22</p> <p>第 12 図 4号竪穴住居跡実測図・ 出土土器実測図…………… 24</p> <p>第 13 図 5号竪穴住居跡実測図・ 出土土器拓影図…………… 25</p> <p>第 14 図 6号竪穴住居跡実測図・ 出土土器拓影図…………… 26</p> <p>第 15 図 7号竪穴住居跡実測図…………… 27</p> <p>第 16 図 7号竪穴住居跡 出土土器接合関係図…………… 28</p> <p>第 17 図 7号竪穴住居跡 出土土器拓影図…………… 29</p> <p>第 18 図 8号竪穴住居跡実測図…………… 30</p> <p>第 19 図 9号竪穴住居跡実測図・ 出土土器接合関係図…………… 31</p> <p>第 20 図 9号竪穴住居跡 出土土器拓影図…………… 32</p>	<p>第 21 図 10号竪穴住居跡実測図・ 出土土器拓影図…………… 33</p> <p>第 22 図 11号竪穴住居跡実測図・ 出土土器接合関係図…………… 34</p> <p>第 23 図 11号竪穴住居跡 出土土器実測図・拓影図1)…………… 36</p> <p>第 24 図 11号竪穴住居跡 出土土器実測図・拓影図2)…………… 37</p> <p>第 25 図 11号竪穴住居跡 出土土器実測図・拓影図3)…………… 38</p> <p>第 26 図 12号竪穴住居跡実測図・ 出土土器拓影図…………… 40</p> <p>第 27 図 13号竪穴住居跡実測図・ 出土土器接合関係図…………… 40</p> <p>第 28 図 13号竪穴住居跡 出土土器拓影図1)…………… 42</p> <p>第 29 図 13号竪穴住居跡 出土土器拓影図2)…………… 43</p> <p>第 30 図 14号竪穴住居跡実測図・ 出土土器接合関係図…………… 44</p> <p>第 31 図 14号竪穴住居跡 出土土器実測図・拓影図…………… 45</p> <p>第 32 図 15号竪穴住居跡実測図・ 出土土器接合関係図…………… 46</p> <p>第 33 図 15号竪穴住居跡 出土土器実測図・拓影図1)…………… 48</p> <p>第 34 図 15号竪穴住居跡 出土土器実測図・拓影図2)…………… 49</p> <p>第 35 図 16号竪穴住居跡実測図・ 掘り方実測図…………… 50</p> <p>第 36 図 16号竪穴住居跡</p>
--	--



	出土土器接合關係圖·····	51	第 53 圖	21 号竪穴住居跡 出土土器拓影圖 1)·····	74
第 37 圖	16 号竪穴住居跡 出土土器拓影圖 1)·····	52	第 54 圖	21 号竪穴住居跡 出土土器實測圖·拓影圖 2)·····	76
第 38 圖	16 号竪穴住居跡 出土土器拓影圖 2)·····	53	第 55 圖	22 号竪穴住居跡實測圖·····	77
第 39 圖	16 号竪穴住居跡 出土土器拓影圖 3)·····	54	第 56 圖	22 号竪穴住居跡 出土土器接合關係圖·····	78
第 40 圖	16 号竪穴住居跡 出土土器實測圖·拓影圖 4)·····	55	第 57 圖	22 号竪穴住居跡 出土土器拓影圖·····	79
第 41 圖	17 号竪穴住居跡實測圖· 出土土器接合關係圖·····	58	第 58 圖	23 号竪穴住居跡實測圖· 出土土器接合關係圖·····	80
第 42 圖	17 号竪穴住居跡 出土土器實測圖·拓影圖 1)·····	60	第 59 圖	23 号竪穴住居跡 出土土器實測圖·拓影圖·····	81
第 43 圖	17 号竪穴住居跡 出土土器實測圖·拓影圖 2)·····	61	第 60 圖	24 号竪穴住居跡實測圖·····	82
第 44 圖	17 号竪穴住居跡 出土土器實測圖·拓影圖 3)·····	63	第 61 圖	24 号竪穴住居跡 出土土器接合關係圖·····	83
第 45 圖	18 号竪穴住居跡實測圖· 出土土器接合關係圖·····	64	第 62 圖	24 号竪穴住居跡 出土土器拓影圖 1)·····	85
第 46 圖	18 号竪穴住居跡 出土土器拓影圖·····	65	第 63 圖	24 号竪穴住居跡 出土土器實測圖·拓影圖 2)·····	86
第 47 圖	19 号竪穴住居跡實測圖· 出土土器接合關係圖·····	67	第 64 圖	26 号竪穴住居跡實測圖· 出土土器接合關係圖·····	88
第 48 圖	19 号竪穴住居跡 出土土器實測圖·拓影圖·····	67	第 65 圖	26 号竪穴住居跡 出土土器拓影圖·····	89
第 49 圖	20 号竪穴住居跡實測圖· 出土土器接合關係圖·····	69	第 66 圖	112 号土坑出土土器拓影圖·····	90
第 50 圖	20 号竪穴住居跡 出土土器拓影圖 1)·····	70	第 67 圖	207 号土坑出土土器實測圖·拓影圖·····	90
第 51 圖	20 号竪穴住居跡 出土土器實測圖·拓影圖 2)·····	71	第 68 圖	210 号土坑出土土器拓影圖·····	91
第 52 圖	21 号竪穴住居跡實測圖· 出土土器接合關係圖·····	73	第 69 圖	235 号土坑出土土器拓影圖·····	92
			第 70 圖	236 号土坑出土土器實測圖· 拓影圖·····	93
			第 71 圖	284 号土坑出土土器實測圖· 拓影圖·····	93
			第 72 圖	285 号土坑出土土器拓影圖·····	94

第73图	306号土坑出土土器拓影图	95	第105图	1号埋甕(土器)实测图	131
第74图	314号土坑出土土器实测图	95	第106图	1号集石出土土器拓影图	132
第75图	315号土坑出土土器实测图· 拓影图	96	第107图	2号集石出土土器拓影图	133
第76图	343号土坑出土土器拓影图	97	第108图	4号集石出土土器拓影图	134
第77图	353号土坑出土土器拓影图	98	第109图	5号集石出土土器拓影图	134
第78图	365号土坑出土土器拓影图	98	第110图	集石实测图	135
第79图	366号土坑出土土器拓影图	99	第111图	1号烧土遗構出土土器拓影图	136
第80图	367号土坑出土土器拓影图	101	第112图	2号烧土遺構出土土器拓影图	137
第81图	369号土坑出土土器拓影图	102	第113图	烧土遺構实测图	138
第82图	403号土坑出土土器拓影图	103	第114图	包含層出土土器拓影图(1)	146
第83图	422号土坑出土土器拓影图	105	第115图	包含層出土土器拓影图(2)	147
第84图	431号土坑出土土器拓影图	106	第116图	包含層出土土器拓影图(3)	148
第85图	土坑实测图(1)	112	第117图	包含層出土土器拓影图(4)	149
第86图	土坑实测图(2)	113	第118图	包含層出土土器拓影图(5)	150
第87图	土坑实测图(3)	114	第119图	包含層出土土器拓影图(6)	151
第88图	土坑实测图(4)	115	第120图	包含層出土土器拓影图(7)	152
第89图	土坑实测图(5)	116	第121图	土製丹板・土器片種の法量・ 重量分布	153
第90图	土坑实测图(6)	117	第122图	土製品实测图	155
第91图	土坑实测图(7)	118	第123图	石器实测图(1)	165
第92图	土坑实测图(8)	119	第124图	石器实测图(2)	166
第93图	土坑实测图(9)	120	第125图	石器实测图(3)	167
第94图	土坑实测图(10)	121	第126图	石器实测图(4)	168
第95图	土坑实测图(11)	122	第127图	石器实测图(5)	169
第96图	土坑实测图(12)	123	第128图	石器实测图(6)	170
第97图	土坑实测图(13)	124	第129图	石器实测图(7)	171
第98图	土坑实测图(14)	125	第130图	石器实测图(8)	172
第99图	土坑实测图(15)	126	第131图	石器实测图(9)	173
第100图	土坑出土土器拓影图(1)	127	第132图	石器实测图(10)	174
第101图	土坑出土土器拓影图(2)	128	第133图	石器实测图(11)	175
第102图	土坑出土土器拓影图(3)	129	第134图	1号竪穴住居跡实测图	176
第103图	土坑出土土器拓影图(4)	130	第135图	1号竪穴住居跡カマド实测图· 出土土器实测图	177
第104图	1号埋甕(遺構)实测图	131			

第136図	25号竪穴住居跡実測図	178	第155図	土坑実測図 29	209
第137図	25号竪穴住居跡 出土遺物実測図	179	第156図	土坑実測図 30	210
第138図	土坑出土土器実測図	181	第157図	土坑実測図 31	211
第139図	土坑実測図 06	185	第158図	土坑実測図 32	212
第140図	土坑実測図 07	186	第159図	土坑実測図 33	213
第141図	土坑実測図 08	187	第160図	土坑実測図 34	214
第142図	土坑実測図 09	188	第161図	土坑実測図 35	215
第143図	土坑実測図 20	189	第162図	土坑実測図 36	216
第144図	土坑実測図 21	190	第163図	溝実測図 (1)	219
第145図	石器実測図 02	192	第164図	溝実測図 (2)	220
第146図	石器実測図 03	193	第165図	溝実測図 (3)	221・222
第147図	包含層出土遺物実測図	194	第166図	溝実測図 (4)	223
第148図	土坑実測図 22	202	第167図	溝実測図 (5)	224
第149図	土坑実測図 23	203	第168図	溝実測図 (6)	225・226
第150図	土坑実測図 24	204	第169図	溝実測図 (7)	227・228
第151図	土坑実測図 25	205	第170図	溝実測図 (8)	229・230
第152図	土坑実測図 26	206	第171図	石器の石材使用率	239
第153図	土坑実測図 27	207	第172図	円形土坑法量分布	242
第154図	土坑実測図 28	208	第173図	大塚遺跡遺構配置図	付図

## 表 目 次

表 1	縄文時代土坑一覽表	106	表 10	石錘一覽表	163
表 2	土製品一覽表	154	表 11	石鏃一覽表	163
表 3	石斧一覽表	157	表 12	スクレーパー一覽表	164
表 4	磨石一覽表	158	表 13	石製品一覽表	164
表 5	敲石一覽表	160	表 14	平安時代土坑一覽表	182
表 6	石皿一覽表	161	表 15	先土器時代石器一覽表	191
表 7	凹石一覽表	162	表 16	時期不明土坑一覽表	195
表 8	台石一覽表	162	表 17	溝一覽表	217
表 9	スタンプ形石器・ 凡字形石器一覽表	162	表 18	縄文時代竪穴住居跡一覽表	234

## 写真図版目次

<p>PL 1 大境遺跡全景 (航空写真) 調査終了時全景 (第1次調査区)</p>	<p>PI. 17 18号竪穴住居跡 18号竪穴住居跡遺物出土状況</p>
<p>PL 2 調査終了時全景 (第3次調査区) 調査終了時全景 (第2次調査区)</p>	<p>PI. 18 19号竪穴住居跡 20号竪穴住居跡</p>
<p>PL 3 調査前途景 (東方より) 調査前途景</p>	<p>PI. 19 21号竪穴住居跡 21号竪穴住居跡遺物出土状況</p>
<p>PL 4 グリット発掘状況 基本土層</p>	<p>PI. 20 22号竪穴住居跡 23号竪穴住居跡</p>
<p>PL 5 2号竪穴住居跡 3号竪穴住居跡</p>	<p>PI. 21 23号竪穴住居跡遺物出土状況 24号竪穴住居跡</p>
<p>PL 6 4号竪穴住居跡 5号竪穴住居跡</p>	<p>PI. 22 24号竪穴住居跡遺物出土状況 PI. 23 26号竪穴住居跡</p>
<p>PL 7 6号竪穴住居跡 7号竪穴住居跡</p>	<p>26号竪穴住居跡遺物出土状況 PI. 24 67号土坑/112号土坑</p>
<p>PI. 8 8号竪穴住居跡 9号竪穴住居跡</p>	<p>207号土坑/208号土坑 235・236号土坑・遺物出土状況</p>
<p>PI. 9 9号竪穴住居跡遺物出土状況 10号竪穴住居跡</p>	<p>284号土坑/311号土坑 PI. 25 315号土坑/322号土坑</p>
<p>PL 10 11号竪穴住居跡 11号竪穴住居跡遺物出土状況</p>	<p>325号土坑/332号土坑 343号土坑/345号土坑</p>
<p>PL 11 12号竪穴住居跡 13号竪穴住居跡</p>	<p>346号土坑/353号土坑 PI. 26 358号土坑/364号土坑</p>
<p>PL 12 13号竪穴住居跡遺物出土状況</p>	<p>365号土坑・遺物出土状況</p>
<p>PL 13 14号竪穴住居跡 15号竪穴住居跡</p>	<p>366号土坑・遺物出土状況 367号土坑・遺物出土状況</p>
<p>PL 14 15号竪穴住居跡遺物出土状況 16号竪穴住居跡</p>	<p>PI. 27 369号土坑/372号土坑 383号土坑/403号土坑</p>
<p>PL 15 16号竪穴住居跡遺物出土状況</p>	<p>422号土坑/431号土坑</p>
<p>PI. 16 17号竪穴住居跡・ 遺物出土状況</p>	<p>1号埋塞/1号埋塞</p>

- PL 28 1号集石·完掘状况  
2号集石·完掘状况  
3号集石·完掘状况  
4号集石/5号集石
- PL 29 1号整穴住居跡·遺物出土状况
- PL 30 25号整穴住居跡·遺物出土状况
- PL 31 46号土坑/195号土坑  
262号土坑/263号土坑  
264号土坑/267号土坑  
269号土坑/276号土坑
- PL 32 44号土坑/147号土坑  
5·6号溝/7·8号溝  
20·21号溝/44号溝  
25·26号溝
- PI. 33 G7区付近完掘状况  
15区付近完掘状况
- PL 34 2号整穴住居跡出土土器  
3号整穴住居跡出土土器  
6号整穴住居跡出土土器
- PI. 35 7号整穴住居跡出土土器  
9·10号整穴住居跡出土土器
- PL 36 11号整穴住居跡出土土器
- PL 37 12·13号整穴住居跡出土土器  
14号整穴住居跡出土土器
- PL 38 15号整穴住居跡出土土器
- PL 39 16号整穴住居跡出土土器
- PI. 40 17号整穴住居跡出土土器(1)
- PL 41 17号整穴住居跡出土土器(2)  
18号整穴住居跡出土土器
- PI. 42 19号整穴住居跡出土土器  
20号整穴住居跡出土土器
- PL 43 21号整穴住居跡出土土器
- PI. 44 22号整穴住居跡出土土器  
23号整穴住居跡出土土器  
24号整穴住居跡出土土器(1)
- PI. 45 24号整穴住居跡出土土器(2)  
26号整穴住居跡出土土器
- PI. 46 土坑出土土器
- PI. 47 第Ⅰ・Ⅱ群土器  
第Ⅲ群土器
- PL 48 第Ⅳ群土器
- PL 49 第Ⅴ群土器(1)
- PI. 50 第Ⅴ群土器(2)  
第Ⅵ・Ⅶ群土器
- PI. 51 第Ⅷ群土器  
第Ⅸ群土器
- PI. 52 第Ⅹ群土器  
第Ⅺ群土器
- PI. 53 第Ⅻ群土器  
第Ⅼ群土器
- PI. 54 石器(1)
- PI. 55 石器(2)
- PL 56 石器(3)
- PL 57 石器(4)
- PI. 58 石器(5)
- PL 59 石器(6)
- PI. 60 石器(7)
- PL 61 石器(8)
- PI. 62 石器(9)
- PI. 63 1·25号整穴住居跡·  
46号土坑出土遺物

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経過

住宅・都市整備公団は、筑波研究学園都市周辺開発地区整備計画に基づき、研究学園都市にふさわしい産業の導入を行うことにより、人口の定着と雇用機会の創出及び町財政基盤の強化等を図り、研究学園都市の自立的、一体的都市づくりを進めるため、昭和57年、筑波郡豊里町に「研究学園都市計画手生子工業団地造成事業」を計画した。

これにより、昭和57年12月、茨城県地域整備第二課を通し、住宅・都市整備公団から茨城県教育委員会に対し埋蔵文化財の有無についての照会、及び埋蔵文化財が存在する場合はその範囲確認調査の実施について申し入れがあった。このため茨城県教育委員会は豊里町教育委員会と協議を行い、豊里町教育委員会内に手生子地区遺跡調査会を発足させた。手生子地区遺跡調査会は、昭和58年2月22日から25日にかけて、茨城県教育委員会の立ち合いのもとで調査を実施し、造成予定地内の東端部において86,620㎡におよぶ縄文時代の遺構及び遺物を確認した。茨城県教育委員会は、大境遺跡と命名し、手生子地区遺跡調査会から提出された遺跡調査報告書を基に、公団あて埋蔵文化財の存在とその範囲について回答した。その取り扱いについて住宅・都市整備公団、茨城県地域整備第二課、茨城県教育委員会が協議を行った結果、埋蔵文化財の存在する86,620㎡のうち周辺部の緑地帯にかかる21,755㎡については現状保存を図り、残りの64,865㎡について発掘調査による記録保存の措置が講じられることになった。

そこで茨城県教育委員会は、発掘調査機関として財団法人茨城県教育財団を住宅・都市整備公団に紹介した。これにより当財団が2か年にわたり大境遺跡の発掘調査を行うこととなり、住宅・都市整備公団と詳細な調整を行い、業務委託契約を締結した。

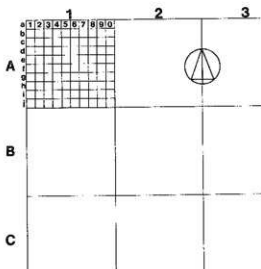
当財団は、住宅・都市整備公団との委託契約に基づき、茨城県教育委員会の指導のもとに昭和59年4月1日から昭和60年7月30日までの期間を要して発掘調査を実施した。さらに、昭和60年4月1日から1年間にわたって出土遺物等の整理を実施し、ここに本報告書を刊行する運びとなったのである。

## 第2節 調査方法

### 1 地区設定

本遺跡の地区設定は、住宅・都市整備公団により既に設置されている多角点を利用して、日本平面直角座標・第Ⅸ座標系、X軸(南北)+18,100m、Y軸(東西)+12,200mを基準線として、40m四方の大調査区に分割し、さらに大調査区内を4m四方の小調査区に細分割した。

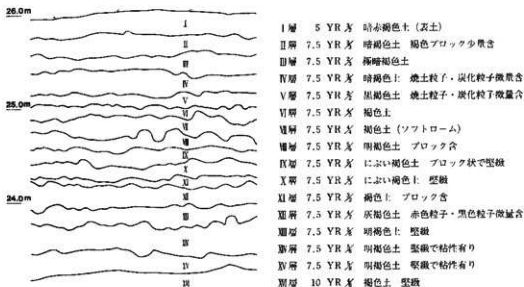
調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、大調査区においては北から南へA、B、C……N、西から東へ1、2、3……7とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は北から南へa、b、c……j、西から東へ1、2、3……0とし、小調査区の名称は大調査区の名称を冠し「A1b2」、「B2j0」のように呼称した。



第1図 調査区呼称方法概念図

### 2 基本層序

調査区内の地形は、ゆるやかな起伏をもった緩斜面であり、必ずしも層序や層厚が一定しているわけではないが、調査区内を縦・横断するように東西方向及び南北方向の上層を観察した結果



第2図 基本土層図

ほぼ妥当なものとできるD4i6区をモデルとしての基本層序とした。

なお、土層名は、上位からローマ数字でⅠ層、Ⅱ層、Ⅲ層……とし、算用数字で表した遺構内の埋土とは区別した。

### 3 遺構確認

当遺跡は、調査対称面積が64,865㎡と広大なため、便宜上、北側部を1次調査区(32,000㎡)、南側を2次調査区(12,000㎡)、1次調査区と2次調査区の間を3次調査区(20,865㎡)と分割し、それぞれ個別に遺構確認調査を実施した。なお、1、2次調査区は、公団によって立木を全て伐採できる菅伐区と、立木の伐採を必要最少限に留める間伐区とに分けられていた。

遺構確認調査は、16分の1、8分の1、4分の1とグリット発掘を進め、遺構が存在する範囲について重機による表土除去を実施し、ローマ層上面で遺構確認を実施した。

1次調査区は、昭和59年5月から8月にかけて遺構確認調査を実施し、調査区の東側を中心として竪穴住居跡5軒、土坑205基、溝36条を検出した。

2次調査区は、昭和59年11月から昭和60年2月にかけて遺構確認調査を実施し、竪穴住居跡11軒、土坑160基、溝2条等を検出した。

3次調査区は、一部2次調査区と合せて実施したのち、昭和60年4月から5月にかけて再度実施し、竪穴住居跡12軒、土坑100基、溝14条等を検出した。

### 4 遺構調査

当遺跡における遺構の調査方法は、次のように実施した。

竪穴住居跡は、平面プラン確認後、円形または方形のものについては、南北方向と東西方向の十字に、楕円形または隅丸長方形のものについては、直径方向とそれに直交する方向の十字に土層観察用ベルトを設定し、ベルトによって区画された四つの区画を床面まで掘り下げることを原則とした。区画の名称は、北東部を始まりに1～4区と時計回りに呼称した。

土坑は、平面プラン確認後、長径方向で二分して、先ず南または東側を掘り込み、土層観察の後、残りの2分の1を掘り込むことを原則とした。

溝は、適宜な位置に土層観察用のベルトを残し、底面まで掘り込んだ。

土層観察は、色相、含有物の種類と量、粘性等を観察した。色相の判定は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著、日本色研事業株式会社)を使用した。

遺物は、柱状に出土位置を残し、遺構の掘り下げ終了後、遺構平面と共に位置を図化し、レベルを測定後取り上げた。

遺構平面図は、水系の地張り方眼によって、20分の1の縮尺で図化した。

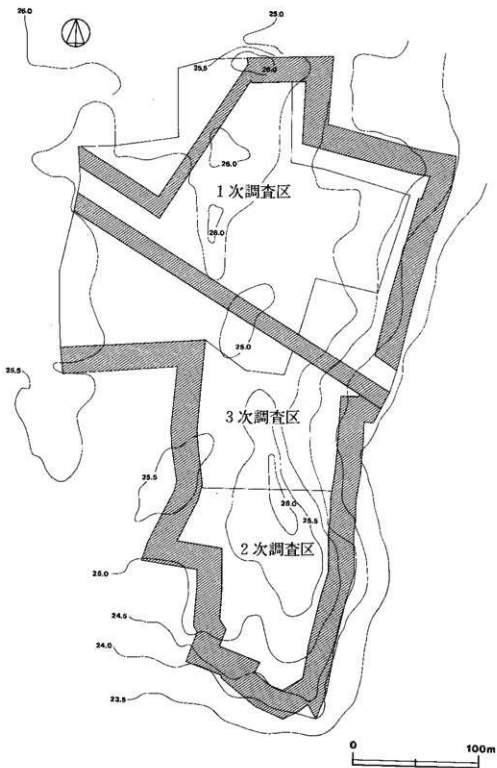


### 第3節 調査経過

大境遺跡は、昭和59年4月1日から2か年度の子定で発掘調査を開始したが、遺構が比較的希薄であったことから昭和60年7月31日をもってすべての調査を完了した。以下、1年4か月にわたる発掘調査の経過について、月ごとに記述する。

#### 昭和59年度

- 4 月 発掘調査に必要な、現場倉庫設置、調査器材類の搬入などを行なう。
- 5 月 1次調査区のうち、皆伐区の雑木の伐採を行い、調査区を設定した。間伐区については、トレンチ及びグリット設定に必要な部分だけの樹木を伐採し、試掘を開始した。B3, B4, C2, C3, D3, F1, E2, F2, F3, G3～G5区について16分の1のグリット発掘を実施したが、遺構は皆無で、遺物も極少量しか検出されなかった。
- 6 月 皆伐区のうち、C4, C5, D4～D7, E4～E7, F4～F6区について16分の1のグリット発掘を実施した。この結果、土坑20基、溝22条を確認したので、さらに8分の1のグリット発掘を実施した。
- 7 月 先月に引き続き皆伐区の8分の1のグリット発掘を実施した。主に阿玉台式の占手に属する土器片が、D6, D7, E6, E7区を中心に出土した。また、間伐区について4分の1のグリット発掘を実施したが、遺構は皆無であった。
- 8 月 皆伐区のうち、E7, F7区について手掘りによるグリット拡張と平行して、E7, F7区以外の皆伐区について重機による表土除去を実施し、住居跡5軒、土坑90基、溝45条を確認した。
- 9 月 先月に引き続き手掘りによるグリット拡張を実施するかわら、D6, D7, E6区内の遺構調査を開始する。土坑は31号土坑まで調査を進めるが、多くは、時期不明の土坑である。
- 10 月 B5, C5, D5, E5, F5区の遺構調査を進め、住居跡5軒、土坑220基、溝36条の調査を実施し、第1次調査区についての調査を終了する。遺構の大半は、台地東側寄りのD6, E7区に集中していることが明らかになる。
- 11 月 11月1日から第2次調査区及び、第3次調査区の8分の1のグリット発掘を開始する。H5～H7, I5, I6, J5, J6, K5, K6, L5, L6, M5, M6, N5, N6区についてグリット発掘を実施したところ、調査区の西側部においては遺構、遺物ともに希薄であるが、東側部から阿玉台式土器を主体とし、早期、前期などの土器が少量出土し、竪穴住居跡、土坑などが検出された。
- 12 月 8分の1のグリット発掘で遺構、遺物が存在することを確認したので、遺構の分布



第3図 遺跡全体図

を把握するため更に、K5, K6, L5, L6, M5, M6, N5, N6区について4分の1のグリット発掘を実施した。

- 1 月 先月に引き続き、L5, M5, N5区などについて4分の1のグリット発掘を実施する。その結果、JラインからNラインにかけて阿玉台式期の竪穴住居跡が10数軒、土坑150基ほどが存在することが明らかになったので、Jラインから南側について重機によって表土除去を実施する。また、重機によって表土除去した部分の遺構確認調査を行い221～262号土坑の調査を開始する。
- 2 月 遺構確認調査をあわせて、6～16号住居跡及び、337号土坑の調査を実施する。竪穴住居跡は、11号住居跡が平安時代のものである以外は、縄文時代中期の阿玉台式期に伴うものであることが明らかになる。また土坑については、ほとんどが阿玉台式期のものであることが明らかになる。
- 3 月 1～16号住居跡、308号までの土坑、37, 38号溝の実測及び写真撮影を実施し、3月22日をもって第2次調査区についての調査を終了する。  
なお、3月16日には、第1, 2次調査区についての現地説明会を実施した。

#### 昭和60年度

- 4 月 第3次調査区の調査を開始し、B6, C6区のグリット発掘及び、D7, D8, F6, F7, H6, H7区について重機による表土除去を実施する。また、381～389号土坑、39～41号溝の発掘調査を実施する。
- 5 月 先月に引き続き、G6, H6, I5, I6区について重機によって表土除去を実施する。すでに表土除去を実施したD7, D8, F6, F7区について遺構確認調査を実施し、あわせて17～21号竪穴住居跡、389～430号土坑、42号溝の調査を実施する。18号竪穴住居跡は、縄文時代前期に属するものであることが明らかになる。第3次調査区のうち北側部（F6, F7区より北側）については調査を終了したので、5月28日、航空写真撮影を実施する。
- 6 月 第3次調査区の南側部について調査を開始する。H5, H6区について遺構確認調査を実施し、竪穴住居跡6軒、土坑21基、溝7条を確認する。確認した遺構のうち、20～24号竪穴住居跡、44, 45号溝の調査を実施する。
- 7 月 先月に引き続き、20～24号竪穴住居跡の調査を実施する一方、新たに、25, 26号竪穴住居跡、431～451号土坑、46～49号溝の調査を実施する。7月20日には第1次～3次調査区の現地説明会、22日には第3次調査区南側の航空写真撮影を実施し、7月29日をもって大境遺跡について全ての調査を終了する。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

大境遺跡は、筑波・稲敷台地の一画、茨城県筑波郡豊里町大字手子生字大境1,532番地ほか66筆に所在する。

当遺跡の所在する豊里町は、茨城県の南西部に位置し、都心から北東約55km、常磐自動車道谷田部インターチェンジから北約13km、筑波研究学園都市の中心市街地から北西約9kmの位置にある。町域は、東西6.3km、南北9.7km、面積約33km<sup>2</sup>で、東は新治郡桜村、南は筑波郡谷田部町、西は水海道市、結城郡石下町、北は筑波郡大穂町にそれぞれ接している。町の主たる産業は農業で、特に芝づくりが盛んであるが、筑波郡筑波町、大穂町、谷田部町、新治郡桜村、稲敷郡某崎町の5か町村と共に筑波研究学園都市に指定されて以来、その様相も次第に変わりつつある。町の大部分は標高20～25mの洪積台地で、西側に小貝川低地を控えている。

町の大部分を占める洪積台地は、常総台地の南西部にあたる筑波・稲敷台地で、東側を桜川、西側を小貝川によって限られ、南東方に延びている。台地面は、東谷田川、西谷田川や、その支流によって開析され、いくつかの浸食谷が南北に形成されている。台地上は比較的平州で広く、集落や畑地のほか平地林として利用されている。

地質的には、常総台地の主体をなす成田層の上位に、龍ヶ崎砂礫層・常総粘土層・関東ローム層が堆積している。成田層は約16mに及び堆積し、主に中砂・細砂からなる地層である。龍ヶ崎砂礫層は、豊里町においては部分的にしかみられないようである。常総粘土層は乳濁灰色の粘土層で、厚さ約1mに及んでいる。関東ローム層は約3mの厚さで、武蔵野ローム層・立川ローム層に対比されるものとみられる。

当遺跡は、豊里町のほぼ中央部、豊里町役場の北西方1.1kmに位置し、遺跡の西方2.7kmには小貝川が南流している。遺跡は、ほぼ南流する西谷田川の本流と支流に挟まれた、台地の東縁部に立地している。台地は幅0.5～1.3km、標高20～25mで、沖積面との比高は約2mである。遺跡が所在する付近は、沖積面から緩やかに高さを増し、遺跡の中央部で最も高くなり、西側へ向かってやや低くなっている。遺跡の北側及び中央部には東から浅い谷が入り、また、南側には東から北西方へ谷が入り込み、舌状台地の様相をみせている。

遺跡の調査前の状況は、松・杉や楡・桐などの平地林が大部分を占め、一部は畑として利用されていた。



第4圖 遺跡地形図

## 第2節 歴史的環境

大境遺跡が所在する豊里町の洪積台地上には、「茨城県遺跡地区」<sup>33</sup>を見る限り遺跡数は決して多くなく、県下でも遺跡が比較的希薄な地域とみられる。しかし、いまだ地中にうずもれ未確認の遺跡も少なくないと思われる。ここでは、既に確認されている遺跡と若下の現地踏査によって確認した遺跡をもとに、豊里町周辺の遺跡について概観してみたい。

先土器時代の遺跡は、県内において80遺跡ほど報じられ、近接する大穂町から前野遺跡、大砂遺跡<sup>44</sup>、水海道市から1か所が確認されている<sup>45</sup>。豊里町からは、今回調査した大境遺跡から先土器時代終末期に比定される石器が、数点出土しているだけである。

縄文時代の遺跡は、現在までに早期から晩期にかけて19の遺跡が確認されている。早期の遺跡は今回調査した大境遺跡と、大山遺跡の2か所で、大山遺跡からは茅山式の土器が確認されている。前期の遺跡は、諸磯式土器を出土する版山遺跡、黒浜、諸磯式土器を出土する能田山遺跡、関山式土器を出土する権上遺跡〈8〉と大境遺跡がある。中期の遺跡は比較的增加し、15か所ほどみられる。小貝川左岸に位置する遺跡としては、大穂町吉沼大六天遺跡〈2〉、田倉遺跡〈4〉上郷北遺跡〈6〉、赤ぼつけ遺跡〈21〉、院内山遺跡〈26〉、神谷森遺跡〈25〉などが確認されている。西谷田川流域には、稻荷前遺跡〈11〉、大境遺跡など、東谷田川流域には、前木遺跡〈14〉、ハヶ代遺跡〈19〉、洒丸遺跡〈20〉、高野遺跡〈17〉、などの遺跡が確認されている。これらの遺跡は、いずれも未調査で遺跡の詳細については明らかでないが、阿玉台式、加曾利F式の土器を出土している。これらの遺跡の中で、田倉遺跡と吉沼大六天遺跡は古くから知られている遺跡である。田倉遺跡は、200×250m程の広大な遺跡の一部に3地点からなる貝塚が存在していたようである。時期的には中期から晩期にかけての遺跡とみられ、阿玉台式、加曾利F式、称名寺式、加曾利B式、安行Ⅰ・Ⅱ式などの土器と共に、ニホンシジミを主体としカクタンシ、ハマグリ、オオタニシなどの貝類がみられる<sup>16</sup>。吉沼大六天遺跡は田倉遺跡の北方数百mにあり、広大な遺跡の一部に小規模な貝塚を伴う遺跡である。縄文時代後期（加曾利B式、安行Ⅰ式）を主体とし、阿玉台式、加曾利E式、堀之内式、安行Ⅱ式、安行Ⅲ式などの土器がみられる。貝類は、オオタニシ、ヤマトシジミが主体で、他にサルボウ、マツカサガイ等がみられる。この貝塚は小貝川流域において現存する上限の貝塚で、小貝川流域における縄文時代の研究には不可欠の遺跡である。

後期の遺跡は、前述した中期の遺跡から継続するもので、田倉遺跡、吉沼大六天遺跡、上郷北遺跡、神谷森遺跡、稻荷前遺跡など13か所ほど確認されている。晩期の遺跡は激減し、前述した田倉遺跡、吉沼大六天遺跡が確認できるだけである。

弥生時代の遺跡は、現在までのところ確認されておらず、さらに古墳時代の遺跡も、上郷古墳



国中 番号	遺跡名	遺跡の時代					国中 番号	遺跡名	遺跡の時代				
		先土器	縄文	古墳	律令	中近世			先土器	縄文	古墳	律令	中近世
1	大堤遺跡	○	○				14	前木通跡					
2	大谷沼大天遺跡		○				15	沼崎北遺跡	○				
3	田舎日塚遺跡		○				16	手子生城跡					○
4	田舎時遺跡		○				17	高野遺跡	○				
5	長上郷北遺跡		○			○	18	高野古墳群	○		○		
6	上郷北遺跡		○				19	八代遺跡	○		○		
7	上郷橋町遺跡		○		○		20	八ッ丸遺跡	○		○		
8	横上遺跡		○				21	赤ぼけ遺跡	○				
9	上郷古墳群		○	○			22	野手内遺跡				○	
10	上郷塚古墳群		○				23	角内遺跡	○				
11	荷前古墳群		○				24	野畑遺跡	○				
12	今鹿島遺跡		○				25	神台森遺跡	○				
13	沼崎城跡					○	26	院内山遺跡	○				

第5図 遺跡位置図と周辺の遺跡 (国土地理院発行2万5千分の1地形図「上郷」「谷田部」)

(9)、高野古墳群(18)と、土師器を出土する今鹿島遺跡(12)、ハッ代遺跡が挙げられる程度で、縄文時代の遺跡に比べて著しく少ないことがわかる。なお、沼崎、今鹿島地内から子持勾玉と石製模造品を出土した記録があるが、明確な出土地点は明らかではない。<sup>(7)</sup>

律令制の施行された奈良・平安時代の豊里町は、筑波郡方穂郷、水守郷、河内郡鳴名郷に所属していたようである<sup>(8)</sup>。この頃は、常総の地に馬牧が多くみられ、豊里付近も馬牧として使用されていたようである。この時代の遺跡は、古墳時代と同じように数が少なく、小貝川に面した上郷横町遺跡(7)、野手遺跡(22)および大境遺跡が確認されているだけである。

古代から中世にかけての豊里地方は、大部分が筑波郡と河内郡の領域に属していたが、承平・天慶の乱以降、上郷は台豊田とか上豊田郷と呼ばれ、平氏の一族である豊田氏の勢力下にあり下総国豊田郷に属していた。中世の遺跡としては、鎌倉時代に築造されたといわれる子生成跡を始めとして、長峰城跡、沼崎城跡などがある。

以上のように、豊里町周辺には、小貝川や西谷田川などの流域に各時代の人々の足跡がしるさされている。しかし、調査例も少なく不明な点も多く、今後の調査・研究が待たれる。

#### 注

(1) 居留川正平 青野壽郎『日本地誌』5 二宮書店 1975

(2) 豊里町 『豊里の歴史』 1985

(3) 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地名表』 1974

(4) 茨城県 『茨城県史料 考古資料編』先土器・縄文時代 1979

(5) (2)によるが、出土地点は明らかでない。

(6) 齊藤弘道 『學術調査概報1 県内日塚における動物遺存体の研究1』茨城県歴史館 1978

中村盛吉 藤田 清 『常総古文化研究』 1972

(7) (5)と同じ。

(8) (2)と同じ。



# 第3章 遺構と遺物

## 第1節 遺跡の概要と記載方法

### 1 遺跡の概要

大境遺跡は、南流する西谷田川の支流に面する標高20～25mの台地東縁部に立地し、調査の結果、竪穴住居跡26軒、土坑448基、埋壘1基、集石5基、溝52条、竃土遺構4基が、台地沿辺にブロック状に点在する状況で検出できた。これらの遺構は、時期不明のものを除けば縄文時代と平安時代とに大別できる。縄文時代の遺構は、竪穴住居跡24軒、土坑169基、埋壘1基、集石5基である。このうち竪穴住居跡は、前期の槇房式期に位置づけられるものが1軒、中期の阿玉台～加曾利E式期に位置づけられるものが23軒、土坑は、早期、前期及び後期とみられるものも若干存在するものの、大部分は中期に位置づけられよう。埋壘は中期、集石は前期に位置づけられるものが3基で、他は時期が明らかでない。平安時代の遺構は、竪穴住居跡2軒、土坑73基であるが、土坑については出土遺物が皆無に近い状態で、他遺跡等における類例から平安時代とした。縄文時代及び平安時代の遺構以外に、時期不明遺構として、土坑206基、溝52条がある。

これらの遺構の覆土中や包含層から出土している遺物は、土器・土製品・石器等があり、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)で124箱程出土している。縄文時代の遺物は、中期の阿玉台式の土器が大部分を占め、他に縄文時代早期、前期、後期の土器も少量ではあるが認められ、極めて稀薄ではあるが生活の痕跡が認められる。土製品としては、土器片鎌1点、土製円板33点がある。石器としては、磨石62点、石斧24点、凹石12点、石鏃18点、石皿18点などで、石製品とて塊状耳飾、垂れ飾などがある。石器以外に、黒曜石やチャートの剥片や、熱を受けた際、破砕礫などの自然礫が多量に出土していることは特徴的である。平安時代の遺物は、土師器、須恵器が若干出土しているだけである。それ以外に先土器時代に位置づけられる尖頭器、ナイフ形石器、近世とみられる土師質土器なども若干認められる。

以上が当遺跡の概要であり、遺構・遺物の事実記載については次節以降にゆずるが、当遺跡は、台地沿辺部に展開する縄文時代中期の阿玉台式期の集落を主体とする遺跡である。

### 2 記載方法

本書における遺構・遺物の記載及び掲載挿図の作成にあたっては、下記のとおりで行った。

#### (1) 使用記号

遺構	名称	住居跡	土坑	埋壘	集石	溝	その他	遺物	名称	土製品	石器
	記号	S1	SK	M	SS	SD	SX		記号	DP	Q

## (2) 遺構番号

遺構番号については、遺構の種類毎に調査順に付したが、整理にあたり遺構の種類毎に、調査区の北から南に向かって新たに付り直した。このため、整理時の番号の後に、旧番号を記載した。

## (3) 土層の分類

各遺構内の堆積土については、調査時に観察した結果をもとにして、土色名と含有物を下記のように整理し、記号化した。含有物については、含有量の多いものをアルファベットの大字、少ないものを小文字で表示した。なお、色調は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用して観察した。

番号	土色名	色相 明度/彩度	記号	含有物
1	明 褐色	Hue 7.5YR 5/5	A	ローム粒子
2	にぶい褐色	Hue 7.5YR 5/5	B	ロームブロック
3	褐色	Hue 7.5YR 5/5	C	焼上粒子
4	暗 褐色	Hue 7.5YR 5/5	D	焼土粒子・ロームブロック
5	極 暗 褐色	Hue 7.5YR 5	E	焼上ブロック
6	灰 褐色	Hue 7.5YR 5/5	F	焼土粒子・焼上ブロック
7	黒 褐色	Hue 7.5YR 5/5	G	焼上ブロック・ロームブロック
8	黒 色	Hue 7.5YR 1/5	H	焼土粒子・焼上ブロック・ロームブロック
9	明 黄 褐色	Hue 10YR 5/5	I	炭化粒子
10	黄 褐色	Hue 10YR 5/5	J	炭化粒子・焼上粒子
11	褐色	Hue 10YR 5/5	K	炭化粒子・ロームブロック
12	暗 褐色	Hue 10YR 5/5	L	炭化粒子・焼上ブロック
13	黒 褐色	Hue 10YR 5/5	M	炭化粒子・焼土粒子・ロームブロック
14	黒 色	Hue 10YR 1/5	N	炭化粒子・焼上粒子・焼上ブロック
15	橙 色	Hue 5YR 5/5	O	焼土
16	明 赤 褐色	Hue 5YR 5/5	P	暗褐色土ブロック
17	赤 褐色	Hue 5YR 5/5	Q	暗褐色土ブロック・ロームブロック
18	にぶい赤褐色	Hue 5YR 5/5	R	暗褐色土ブロック・焼土粒子
19	暗 赤 褐色	Hue 5YR 5/5	S	暗褐色土ブロック・炭化粒子
20	極 暗 赤 褐色	Hue 5YR 5/5	T	粘土
21	赤 褐色	Hue 2.5YR 5/5	U	粘土ブロック
22	暗 赤 褐色	Hue 2.5YR 5/5	V	粘土粒子・ロームブロック
23	極 暗 赤 褐色	Hue 2.5YR 5/5	W	攪乱
24	オリーブ褐色	Hue 2.5YR 5		
25	黄 褐色	Hue 2.5YR 5		

#### (4) 遺構実測図の作成と掲載方法

○各遺構の実測図は、縮尺20分の1の原図を浄書、版組し、それを3分の1（実質60分の1）に縮尺して掲載することを原則とした。

○実測図中におけるレベルは、標高であり、m単位で表示した。

○遺構からの出土遺物は、遺構平面図及び断面図に出土位置を下記のドットで表示し、接合してきた土器は実線で結んだ。出土遺物に付した数字は、遺物実測図及び拓影図の番号を指す。0は、拓影図等を本報告書に掲載していないものである。

●一括土器 ■土器片 ▲土製品 □石器 ☆剥片・礫

○遺構実測図中の焼土は、のスクリーン・トーンで示した。

○集石の実測図中における礫は、白ヌキで輪郭のみを表し、土器片は黒ヌリで表した。

#### (5) 遺物実測図及び拓影図の作成と掲載方法

○土器の実測は、四分判法を用い、中心線の左側に外面、右側に内面及び断面を表した。

○石器の拓影図は、右側に断面を表し、表裏2面を掲載したものは、断面を狭んで左側に外面、右側に内面を掲載した。

○胎土に繊維が含まれている土器については、断面図中にドットを落して示した。

○土器の実測図及び拓影図は、1分の1の原図を浄書、版組し、それを3分の1に縮尺して掲載することを原則としたが、大型の土器は、6分の1に縮尺して掲載し、遺物番号に( )を付した。

○石器の実測図は、1分の1の原図を浄書、版組し、それを3分の1に縮尺して掲載することを原則としたが、大型の石器は6分の1に縮尺して掲載し、遺物番号に( )を付した。また小型の石器は、1分の1で掲載することを原則とし、2分の1で掲載したものについては、遺物番号[ ]を付した。

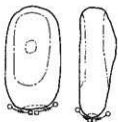
○石器実測図中における使用痕は下記のように表した。

敲きの範囲は、 および  で表した。

磨りの範囲は、 および  で表した。

凹みの範囲は、2点破線で  のように表した。

実測図中においては、右の様に表した。



○遺物に付した番号は、土器、土製品、石器・石製品毎に通し番号を付し、実測図、拓影図、写真図版及び遺構実測図中に付した。なお、土製品についてはDP、石器・石製品についてはQを遺物番号の頭に冠した。

(6) 表の見方

・土坑一覧表

土坑 番号	旧 番号	位置	平面形	規模 (m)		方位	断面	覆土	出土 遺物	形態分類	備考	遺物番号
				長さ	幅							

- ①土坑番号は、整理の過程で調査区の北から南へ向けて1から449まで付し、調査時に付した番号を旧番号として掲載した。
- ②規模の欄において、( )を付した数値は、重複等によって一部を欠くもので、確認できる長さである。
- ③覆土は、自然堆積をN、人為的堆積をMとし、両者が認められる場合をMNとした。
- ④遺物番号の欄において、ゴシック体で記した数字は、挿図に掲載した遺物番号である。
- ④形態分類は次のようにした。

平面形

- I 円形      III 方形、隅丸方形      V 不定形  
II 楕円形    IV 長方形、隅丸長方形    VI 重複によって形状不明のもの

断面形

- A 円筒状    B 皿状    C V字状    D 袋状    E T字状

規模 (長さ・長軸長)

- 1 1m未満    2 1m以上2m未満    3 2m以上3m未満    4 3m以上

深さ (確認面から底面までの長さ)

- a 0.5m未満    b 0.5m以上1m未満    c 1m以上

以上の記号を組み合わせて「IB3c」のように表示した。

・住居跡一覧表

住居跡 番号	旧番号	位置	平面形	規模 (m)		方位	炉	柱穴 (本)	覆土	出土 遺物	時期	備考
				長さ	幅							

- ①平面形の欄において、( )を付したものは、想定形態である。
- ②規模の欄において、( )を付した数値は、推定値である。
- ③覆土は、土坑一覧表の項を参照されたい。

・溝一覧表

溝番号	旧番号	位置	規模 (m)			方位	断面形	比高	覆土	出土 遺物	図版番号
			長さ	幅	深さ						

- ①方位は、溝が屈曲する場合は、全ての方位を表示した。
- ②規模の欄において、長さは総延長、幅は最小幅から最大幅、深さは最浅部から最深部の深さ

を表示した。

②比高は、標高が最も高い底面と最も低い底面との差を表示した。

・石器一覧表

遺物番号	名 称	出土地点	法 量 (cm)			重量 (g)	石 質	遺存状態	備 考
			最大長	最大幅	最大厚				

①法量及び重量の欄において、( )を付した数値は、一部を欠損しているものの現存値である。

②器種によって、石質覧の後に形状や使用状況を加えた。

・土製品一覧表

遺物番号	名 称	出土地点	法 量 (cm)			重量 (g)	使用部位	備 考
			最大長	最大幅	最大厚			

①使用部位の欄においては、使用している土器の部位を記載した。

・出土遺物観察表

番号	器 種	法 量 (cm)	器 形 の 特 徴	下 法 の 特 徴	胎土焼成・色調	備 考
----	-----	----------	-----------	-----------	---------	-----

①法量は、A-口径、B-器高、C-底径、D-高台径、E-高台高を示し、現存値は[ ]、復元推定値は( )を付して示した。

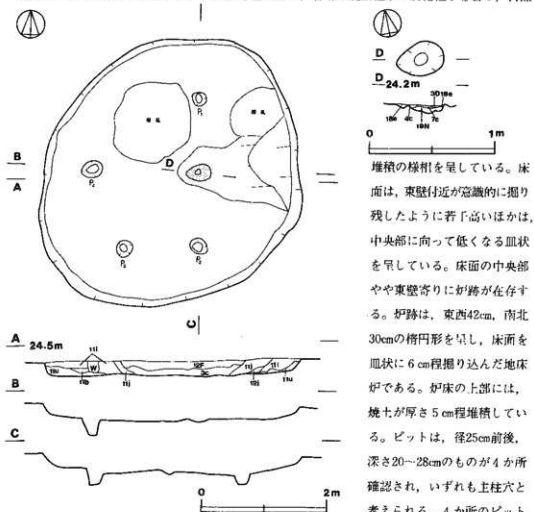
## 第2節 縄文時代の遺構と遺物

### 1 竪穴住居跡

#### 2号竪穴住居跡 (IF18号) (第6・7図 PI.5)

本跡は、D8c2区を中心に確認され、標高24.2m程の台地縁辺部に近い緩斜面上に立地している。平面形は、長径方向N-39°Eを指す楕円形を呈し、規模は、長径4.7m、短径4.0mを測る。住居跡内には後世の土坑が5か所程みられ、そのうち中央部北壁寄りの土坑と、北西壁付近の上坑は本跡の床面を掘り込んでいる。

覆土は、おおむね6層にわかれ、褐色土を主体とし、各層に焼土粒子・炭化粒子を含み、自然



堆積の様相を呈している。床面は、東壁付近が窓識的に掘り残したように若干高いほかは、中央部に向けて低くなる皿状を呈している。床面の中央部やや東壁寄りにが跡が在存する。炉跡は、東西42cm、南北30cmの楕円形を呈し、床面を皿状に6cm程掘り込んだ地床炉である。炉床の上部には、焼土が厚さ5cm程堆積している。ピットは、径25cm前後、深さ20~28cmのものが4か所確認され、いずれも主柱穴と考えられる。4か所のピットの配置をみると、東側にピツ

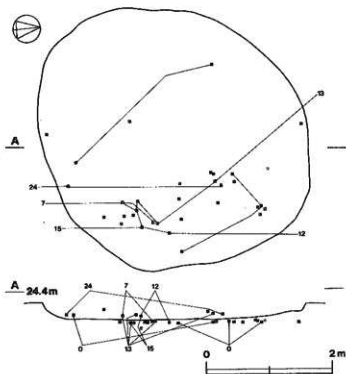
第6図 2号竪穴住居跡実測図

トが無く、床面が若干高いことや、炉跡がやや東側に寄っていることから、東壁部が出入口であった可能性が考えられる。

壁は、15～20cmの高さで、床面からなだらかに立ちあがる。

遺物は、縄文式土器片95片、  
 玦状耳飾片1点、磨石1点、礫  
 3点で、住居跡内の東半部に集  
 中している。遺物の大部分は、  
 覆土中層以下からの出土である  
 が、玦状耳飾片は東壁寄りの覆  
 土上層から出土している。

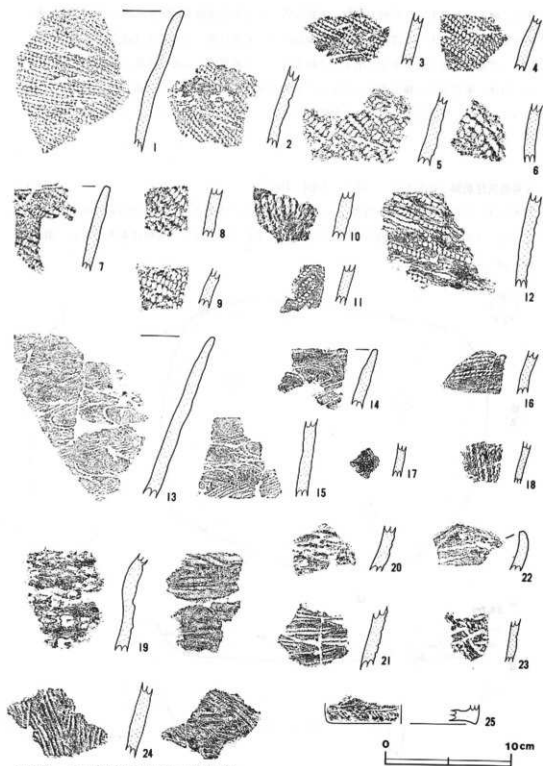
土器片の接合関係は、層位的  
 には近接したものに多いが、位  
 置的には2m以上離れたもの間  
 にも認められ、投棄されたもの  
 であることが窺える。



第7図 2号竪穴住居跡出土土器接合関係図

#### 出土土器 (第8図 PL34)

1は、中央部北壁寄りの覆土中から出土した2片が接合した口縁部片で、RLの縄文が施されている。2～4は、中央部の覆土中から出土した同一個体とみられる胴部片で、RLの縄文が施されている。5～9は、中央部付近の覆土中から出土した胴部片で、いずれもRLの縄文が施されている。10は、中央部北東寄りの覆土中から出土した胴部片で、Rの縄文が施されている。11は、南壁付近の覆土中から出土した胴部片で、RIの縄文が施されている。12は、東壁寄りの覆土中から出土した2片が接合した胴部片で、LRの縄文が施されている。13は、東壁寄りの覆土中から出土した7片が接合した口縁部片で、RIの縄文を粗い木目状に押圧している。14、15は、中央部東壁寄りの覆土中から出土した口縁部片と胴部片で、13と同一個体とみられる。16、17は、東壁付近の床面及び覆土中から出土した胴部片で、RIの縄文を押圧している。18は、南東壁付近の覆土中から出土した胴部片で、燃糸が施されている。19、20は、東壁付近の覆土中から出土した胴部片で、半截竹管による連続刺突文が施されたもので、20は、連続刺突文をやや長めに施している。



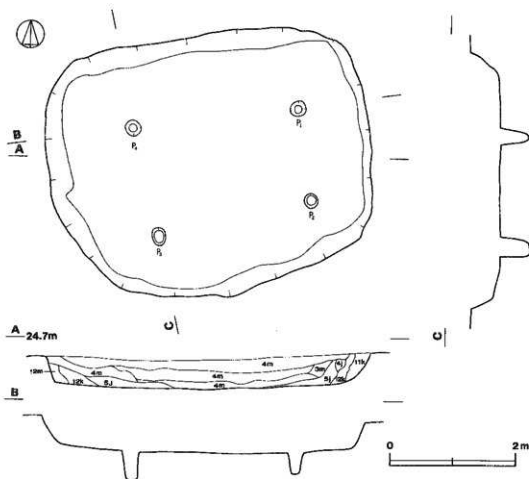
第8图 2号竖穴住居跡出土土器拓影图



21は、覆土中から出土した胴部片で、半截竹管による平行沈線文が施されている。22は、東壁寄りの覆土中から出土した波状を呈する口縁部片で、半截竹管による波状沈線文が施されている。23は、北東壁付近の覆土中から出土した胴部片で、半截竹管による格子状の沈線文が施されている。24は、東壁寄りの覆土中から出土した2片が接合した胴部片で、表裏に貝殻条痕文が施されている。25は、竈跡内から出土した底部片である。なお、1～25は、すべて胎土中に繊維が含まれている。

### 3号竪穴住居跡 (旧17号) (第9・10図 PL5)

本跡は、2号竪穴住居跡の南西11m、D7a区を中心に確認され、標高24.4mの緩斜面に立地している。平面形は、長軸方向N-82°-Eを指す隅丸長方形を呈し、規模は東西5.15m、南北4.20mを測る。

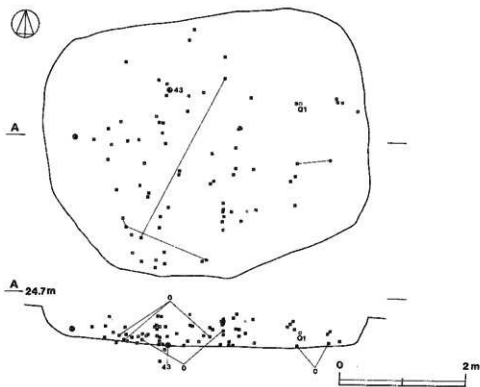


第9図 3号竪穴住居跡実測図

覆土は、暗褐色土を主体とし、おおむね4層に分けられる。各層ともに焼土粒子、炭化粒子及びロームブロックを含み、自然堆積の様相を呈している。床面は、ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。ピットは、径25cm、深さ30～50cm程のものが4か所確認され、いずれも上柱穴とみられる。壁は40～45cmの高さで、外傾しながら立ち上がる。炉跡は、確認できなかった。

遺物は、小型の深鉢形土器1個のほか、縄文式土器片105片、打製石斧1点で、小型の深鉢形土器は中央部やや北壁寄りの床面から横転した状態で、打製石斧は東壁寄りの覆土中層からそれぞれ出土している。他の土器片は、北壁付近を除く覆土から出土しているものが多い。

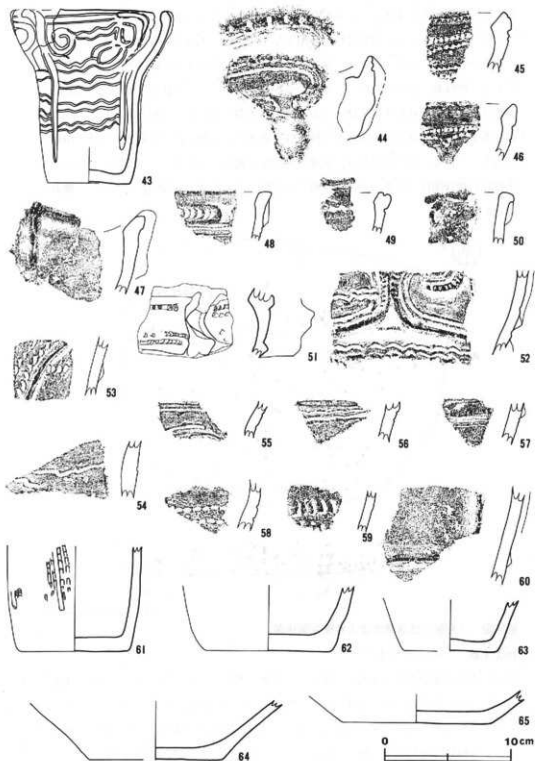
土器片の接合関係は少ないが、層位的には近接したもので、位置的には1m以上離れたもの間にも認められる。



第10図 3号竪穴住居跡出土土器接合関係図

出土土器 (第11図 PL34)

43は、中央部北壁寄りの床面から横転した状態で出土したほぼ完形の小型深鉢形土器で、法尺は口径12.4cm、器高13.9cm、底径6.5cmである。器形は、底部からほぼ垂直に立ち上がり、頸部から緩やかに内彎しながら開き口縁部に至る。文様は、隆帯を四方に垂下させ、口縁部は、半截竹筥による横位渦巻楕円文を施し、胴部にはヘラ状工具による波状沈線文を施している。焼成は、やや不良である。44は、覆土中から出土した、いわゆる扇状把手である。45・46は、中央部の覆



第11图 3号竖穴住居跡出土土器実測図・拓影图

七中から出土した口縁部破片で、半截竹管による2列の結節沈線文を施している。なお、45の口縁部には、半截竹管による刺突文が施されている。47は覆上から出土した口縁部破片で、波頂下に棒状の隆帯を貼付したものである。48は、中央部床面から出土した口縁部破片で、口縁部を区画する隆帯に沿って幅広の爪形文が施されている。49・50は、覆土中から出土した口縁部破片で、49は、口縁部に沿って連続刺突文が施され、50は、隆帯によって口縁部を区画している。51は、中央部覆土下層から出土した口縁部破片で、断面三角形の隆帯と、突起が貼付されて、隆帯に沿って竹管による2列の連続刺突文を施している。52は、覆七中から出土した破片で、隆帯によって横位の楕円形に区画され、その内側に隆帯に沿って沈線が施され、その内側には波状沈線文が施されている。隆帯による区画の下位には、波状沈線文が施されている。53は、覆上中から出土した胴部破片で、断面三角形の隆帯に沿って、半截竹管による連続刺突文が施されている。54は、中央部西壁寄りの床面から出土した胴部破片で、半截竹管による波状沈線文が施されている。55~57は、いずれも覆土中からの出土で、55は、半截竹管による平行沈線文が、56は、断面三角形の隆帯に沿って波状沈線文が、57は、隆帯に沿って波状沈線文がそれぞれ施されている。58は、中央部西壁寄りの床面から出土した胴部破片で、半截竹管による2列の連続刺突文が施されている。59は、中央部西壁寄りの床面から出土した胴部破片で、ヒダ状の指圧痕がみられる。60は、覆土中から出土した胴部破片で、断面三角形の隆帯によって区画されている。61~63は、深鉢形土器の底部で、61、62は、中央部の底面から、63は、西壁付近の覆七中から出土している。61は、垂下する隆帯に沿って半截竹管による2列の連続刺突文が施されている。62・63は、無文である。64・65は、深鉢形土器の底部で、64は、東壁寄りの床面から、65は、北壁寄りの覆七中から出土している。いずれも文様は認められない。

#### 4号壜穴住居跡 (H2号) (第12図 PI.6)

本跡は、E7es区を中心に確認され、標高24.3m程の緩斜面に立地する。平面形は、ローム層をほとんど掘り込んでいないことと、ローム層の上部を承機によって削っていることなどによって、壁の立ち上がりを確認することができず不明である。確認できたものは、炉跡とピットだけで、炉跡を中心に規模を推定すれば、直径あるいは一辺が4.5m内外と考えられる。

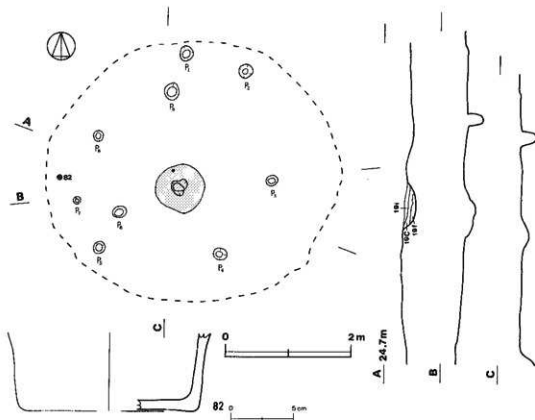
炉跡は、径約79cmのほぼ円形で、深さ20cm程皿状に掘りくぼめられた地床炉である。焼成面は焼石化したロームブロックがゴツゴツした状態である。上部には焼七粒子や炭化粒子を含む暗赤褐色土の堆積がみられた。ピットは9か所確認でき、いずれも径23cm、深さ20~28cm程で、支柱穴は、P3~P5、P8、P9の5か所と考えられる。床面は明らかにできなかったが、西側のローム面から深鉢形土器の底部が1点出土していることから、確認面がほぼ床面と考えられる。

遺物は、炉跡の西方1.9mから深鉢形土器の底部が1点、炉跡内覆土中から前述したものと同一

個体の破片が出土しているだけである。

#### 出土土器 (第12図)

82は、西側の床面から出土した深鉢形土器の底部で、文様は認められない。底径は14.5cmである。



第12図 4号竪穴住居跡実測図・出土土器実測図

#### 5号竪穴住居跡 (旧5号) (第13図 PI.6)

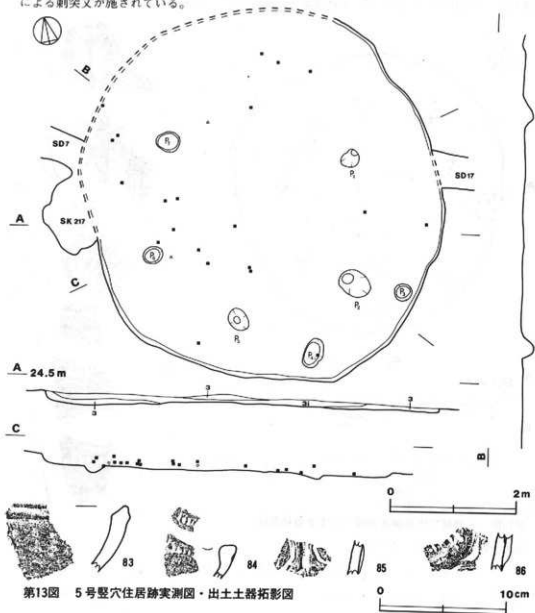
本跡は、F718区を中心に確認され、標高24.2m程の緩斜面に位置する。平面形は、径5.93m程のほぼ円形を呈している。北西側から東側にかけて35分溝、西隣部で217号土坑が重複し、いずれも本跡より新しいものである。

覆土は、暗褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。床面は、西側から東側へ向かい若干低くなるほかはほぼ平坦で、やや軟弱である。ピットは7か所確認でき、主柱穴は、P1、P2、P5～P7の5か所と考えられる。径は35cm、深さ10～17cmと浅いものである。壁は高さ20cm程でほぼ垂直に立ちあがる。炉跡は確認できなかった。

遺物は、土器片22片、石鏃1点、礫2点で、大部分が西半部の床面および覆土下層から出土している。

### 出土土器 (第13図)

83は、北壁寄りの覆土中から出土した口縁部片で、口縁部に断面三角形の隆帯を貼付している。84は、床面から出土した口縁部片で、口縁部及び口唇部に半截竹管による連続刺突文を施している。85は、西壁寄りの床面から出土した胴部片で、垂下させた隆帯の両側に曲線的な沈線を施している。86は、南西壁寄りの覆土中から出土した胴部片で、断面三角形の隆帯に沿って半截竹管による刺突文が施されている。



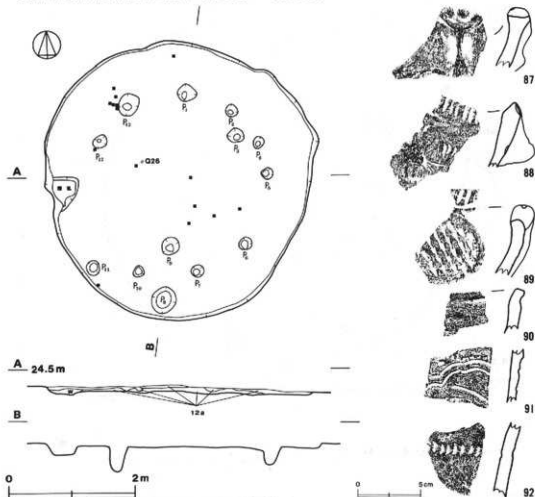
第13図 5号竪穴住居跡実測図・出土土器拓影図

6号竪穴住居跡 (旧3号) (第14図 PL.7)

本跡は、F7a7区を中心に確認され、標高24.4m程の緩斜面に位置する。平面形は、南北4.45m、東西4.25mのほぼ円形を呈している。

覆土は、暗褐色を主体とし、自然堆積の様相を呈している。床面は平坦で、やや軟弱である。ピットは13か所確認でき、主柱穴は、P1、P3、P6、P9、P12の5か所と考えられる。いずれも径25cm、深さ30~40cmのものである。壁は、高さ10cm程でゆるやかに立ち上がる。炉跡は、確認できなかった。

遺物は、土器片27点と礫1点で、北西壁寄りと南西壁寄りの床面及び覆土中から出土している。



第14図 6号竪穴住居跡実測図・出土土器拓影図

出土土器 (第14図 PL.34)

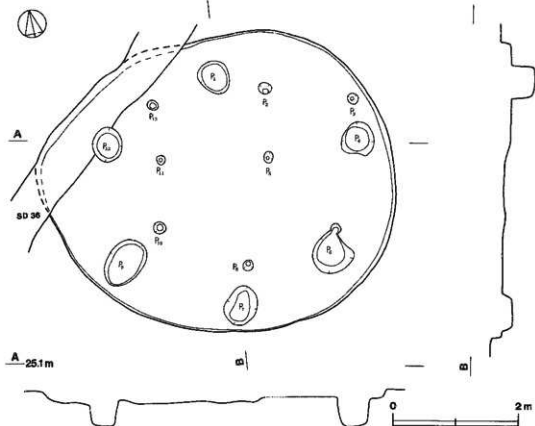
87は、中央部床面から出土した口縁部片で、波頂下に波状の突起が貼付されている。88は、北西壁付近の床面から出土した口縁部片で、口縁部に沿って半截竹管による連続刺突文が施され

波頂下には突起が貼付されている。89は、覆土中から出土した口縁部片で、隆帯で区画した内側に、半截竹管による連続刺突文を斜位に施している。口唇部には丸棒状工具による押圧が加えられている。90は、覆土中から出土した口縁部片で、口縁部に沿って隆帯を貼付している。91・92は、覆土中から出土した胴部片で、91は、断面三角形の隆帯の下位に、2列の沈線を曲線的に施している。92は、半截竹管による爪形文を横位に施している。

#### 7号竪穴住居跡 (旧4号) (第15・16図 PI.7)

本跡は、F6b区を中心に確認され、標高24.7m程の平坦面に位置する。平面形は、長径方向N-81°-Wを指す楕円形を呈し、規模は東西5.72m、南北4.76mを測る。北西壁付近に後世の36号溝が走り、本跡の床面を掘り込んでいる。

覆土は、褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。中央部には、径1.4mで床面まで達する攪乱が認められる。床面は、北西側へ向ってやや低くなるほかは、ほぼ平坦で、やや軟弱である。ピットは6か所確認され、いずれも主柱穴とみられる。ピットは、径約50cmで、深さはP7の16cm以外は、約40cmである。壁は10~20cmの高さで、やや外傾して立ち上がる。なお、炉跡



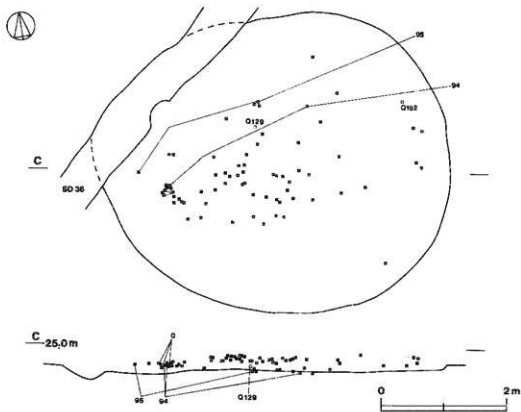
第15図 7号竪穴住居跡実測図



は確認できなかったが、中央部攪乱坑内の土層中に焼土粒子が比較的多く含まれていることから、住居跡のほぼ中央部に灰跡が存在していた可能性が考えられる。

遺物は、縄文土器片40片、垂れ節1点、石鏃1点、フレイク1点で、南及び北壁寄りを除いた部分の覆土中から多く出土している。床面上のものは、中央部付近から土器片数点がみられるだけである。

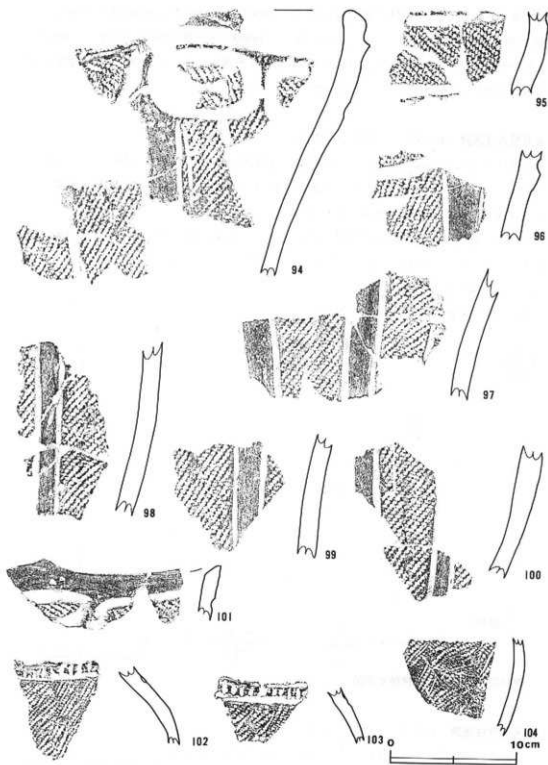
土器片の接合関係は、層位的には近接したもの間に多いが、覆土土層と床面の例も認められ、位置的には2m以上離れたもの間にも認められる。



第16図 7号竪穴住居跡出土土器接合関係図

#### 出土土器 (第17図 Pl.35)

94～100は、中央部の床面及び覆土中から出土した、同一個体とみられる破片である。94は、口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部は降沈文によって楕円形に区画され、区画内には単節RIの横位回転縄文が施されている。胴部には地文に単節RIの縦位回転縄文を施し、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。また磨消帯と磨消帯の間にも1本の沈線が垂下している。95は、降沈文によって楕円形に区画され、区画内には縄文が施されている。96～100は、地文に縄文を施し、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している胴部破片である。101



第17图 7号竖穴住居出土土器拓影图

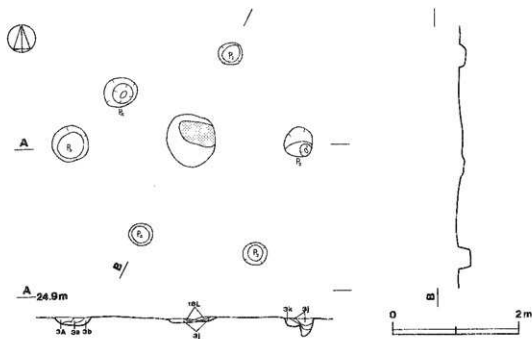
は、覆土中から出土した波状を呈す口縁部片で、沈線によって楕円形に区画された部分に、単筋RLの横位回転縄文が施されている。102・103は、南西壁付近の覆土下層から出土した胴部片で、1列の列点文をめぐらした下位に、RLの縦位回転縄文が施されている。104も南西壁付近の覆土下層から出土した胴部片で、102と同一個体とみられる。

### 8号竪穴住居跡 (旧19号) (第18図 PI.8)

本跡は、F716区を中心に確認され、標高24.6m程の緩斜面に位置する。本跡は、ローム層を掘り込んでいないことから、炉跡と柱穴を確認し得ただけである。炉跡と柱穴をもとに規模を推定すれば径あるいは一辺が5m内外と考えられる。

炉跡は、南北84cm、東西75cmの楕円形を呈し、ロームを7cm程、皿状に掘りくぼめた地床伊である。ピットは6か所確認でき、いずれも土柱穴と考えられる、ピットの規模は、径40～57cm、深さ13～25cmである。

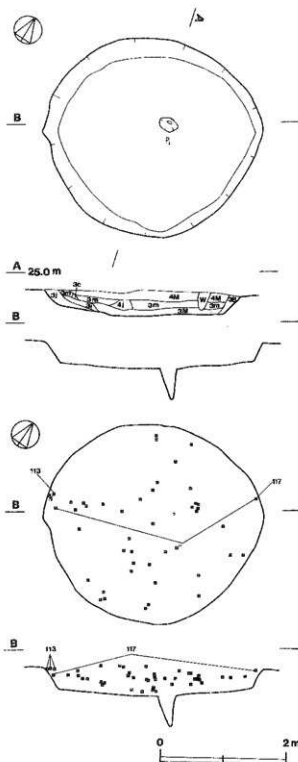
本跡に伴う遺物は確認できなかった。



第18図 8号竪穴住居跡実測図

### 9号竪穴住居跡 (旧21号) (第19図 PL.8・9)

本跡は、G716区を中心に確認され、標高24.6m程の緩斜面に位置している。平面形は、径3.2m程の規模を有するほぼ円形を呈している。東壁寄りに後世の溝が南北に走り、本跡の壁及び床



第19図 9号竪穴住居跡実測図・出土土器接合関係図

面の一部を掘り込んでいる。

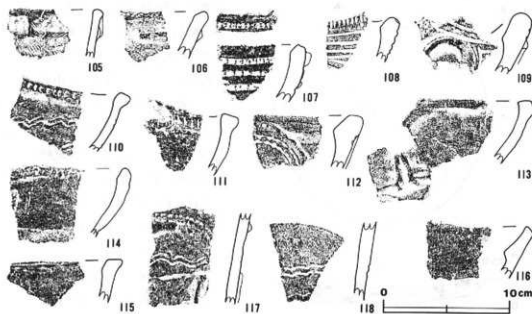
覆土は、焼土粒子や炭化粒子を少量含む褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。床面は、中央部に向かって若干低くなり、皿状を呈しているほかは平坦で、比較的踏み固められている。ピットは中央部やや北壁寄りに径25cm、深さ53cmのものが1か所確認され、上柱穴と考えられる。壁は、30～35cmの高さで、床面からゆるやかに外傾して立ち上がる。

遺物は、縄文式土器片64片、礫3点で、住居跡内のほぼ全域にわたっているが、床面からのものは少なく、大部分が覆土中からの出土である。

土器片で接合できたものは少ないが、接合関係は層位的にはほぼ同レベル間であるのに対して、位置的には北東壁と南西壁に離れて出土しているものもみられる。

#### 出土土器 (第20図 PL.35)

105, 106は、覆土中から出土した口縁部片で、肥厚させた口縁部と平行に降帯を設け、口唇部及び降帯上に1.Rの平節縄文を施し、全体に1.Rの縦位回転縄文を施している。なお105には、S字結節文がみられる。107は、覆土中から出土した口縁部片で、降沈線によって区画され、沈線内に円形竹管による連続刺突文が施されている。108は、柱穴内から出土した口縁部片で、平行沈線が施され、口唇部には、丸棒



第20図 9号竪穴住居跡出土土器拓影図

状工具による押圧がみられる。109は、覆土中から出土した波状口縁部片で、隆帯と沈線によって区画している。110、111は、覆土中から出土した波状を呈する口縁部片で、110は、口縁部に隆帯を貼付し、連続爪形文を施し、口縁部下に半截竹管による波状沈線文を施している。111は、口唇部を肥厚させ、連続刺突文を施している。112、113は、覆土中から出土した口縁部片で、112は、隆帯によって区画した内側に、隆帯に沿って2列に連続刺突文を施している。113は、口縁部を隆帯によって区画している。114、115は、覆土中から出土した、無文の口縁部片である。116は、北壁上部から出土した浅鉢形土器の口縁部片で、口縁部を肥厚させただけで、無文である。117、118は覆土中から出土した胴部片で、いずれも半截竹管による波状沈線文が施されている。117には、断面三角形の隆帯が貼付され隆帯に沿って連続刺突文が施されている。

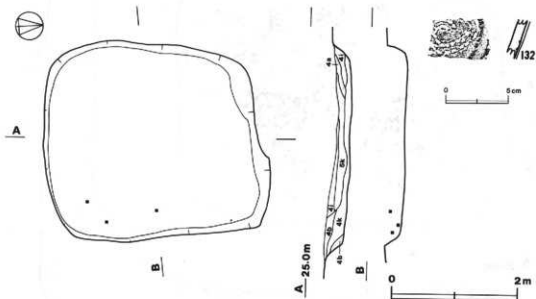
#### 10号竪穴住居跡 (旧24号) (第21図 PL 9)

本跡は、I5a<sub>9</sub>区を中心に確認され、標高24.7m程の浅い谷に近い緩斜面に位置している。平面形は、長軸方向N-3°-Eを指す隅九方形を呈し、規模は長軸3.4m、短軸3.2mを測る。

覆土は、暗褐色土を主体とし、おおむね3層に分けられる。各層ともロームブロックを比較的多く含み、レンズ状堆積をしているものの、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。床面は、西壁寄りがやや低くなるほかは、ほぼ平坦で、やや軟弱である。壁は25~37cmの高さで、床面との境は明瞭でないが、約25度の傾斜をもって立ち上がる。

ピット、炉跡は確認できなかった。

遺物は、縄文土器片3片が、住居跡南東部の覆土上・中層から出土しただけである。



第21図 10号竪穴住居跡実測図・出土土器拓影図

#### 出土土器 (第21図 PL35)

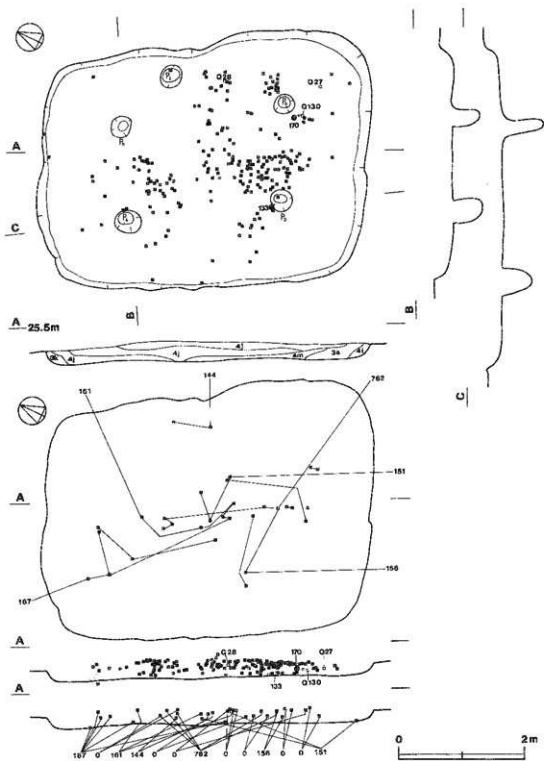
132 は、覆土中から出土した破片で、低い断面三角形の隆帯によって区画した内側に、渦巻状に結節沈線文を施している。

#### 11号竪穴住居跡 (旧23号) (第22図 PL10)

本跡は、15f<sub>7</sub>区を中心に確認され、標高25.2m程の台地平坦面に位置している。平面形は、長軸方向N-25°-Wを指す、やや北側が幅狭になる隅丸長方形を呈し、規模は長軸5.25m、短軸3.15~4.02mを測る。

覆土は、暗褐色土を主体とし、おおよそ3層に分けられる。各層ともに炭化粒子を少量含んでいるが、自然堆積の様相を呈している。床面はほぼ平坦で、中央部の径2.5m程の範囲は、十分踏み固められ、また、北、東、南壁下を除いては、比較的踏み固められている。

ピットは、径35cm内外、深さ35~68cmのものが5か所確認され、そのうち北東壁下のP2を除いた4か所が支柱穴と考えられる。炉跡は確認できなかった。壁は、20~25cmの高さで、床面から25~30度の傾斜をもって立ち上がる。



第22图 11号竖穴住居跡実測区・出土土器接合関係図

遺物は、完形の深鉢形土器2個のほか土器片569片、石鐵木製品1点、黒曜石フレイク5点、礫7点などが出土している。これらは、住居跡の南半部に3か所、北半部に1か所と集中して出土している。そのほとんどが、覆土上・下層から出土し、床面上のものは、極わずかで、いずれも投棄されたものとみられる。

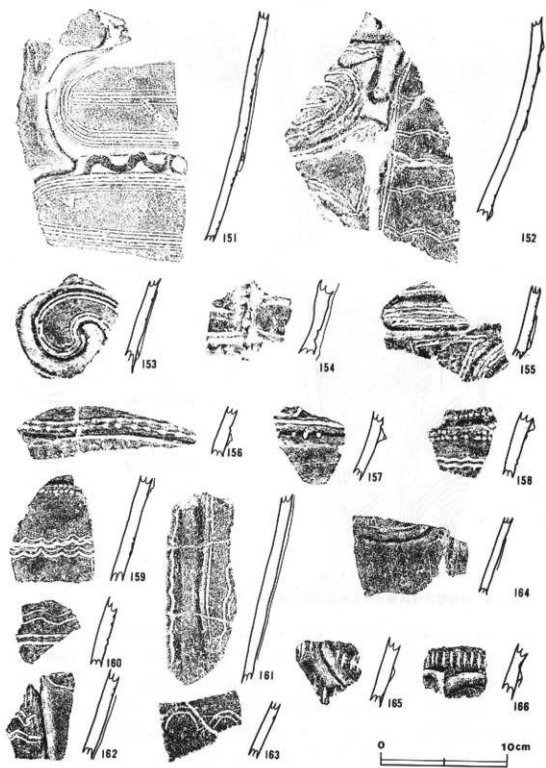
土器片の接合関係は、層位的には近接したものが多いが、位置的には2m以上も離れたもの間にも多くみられる。

#### 出土土器 (第23～25図 PI.36)

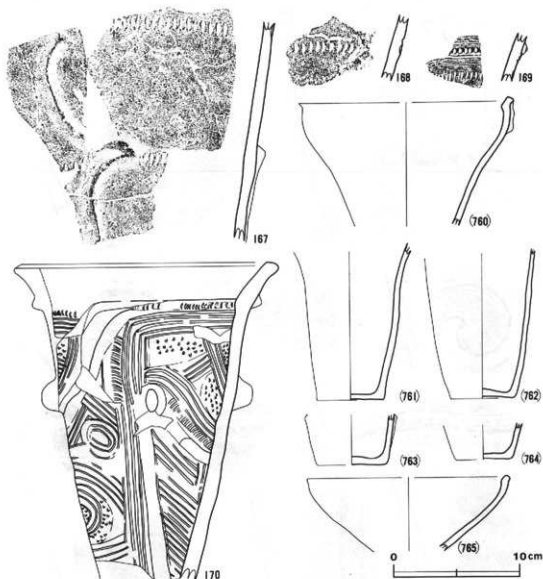
133は、南西コーナー付近の覆土下層から横転した状態で出土した、完形の小型深鉢形土器である。口径16cm、器高17.6cm、底径7cmで、底部から若干開き気味に立ち上がり、口縁部で軽く内彎する。器表面は無文で、口唇部に丸棒状工具により抑圧のキザミが施されている。134は、覆土中から出土した口縁部片で、口縁部には双頭状把手を有している。口縁部は、断面三角形の隆帯によって楕円形に区画し、区画の接点はつまみ出された小突起となっている。区画内は、隆帯に沿って2列の結節沈線文を施し、内部には斜位に結節沈線文が施されている。区画の下位には、半截竹筥による波状沈線文が施されている。135～141は、覆土中から出土した口縁部片で、いずれもへら状工具によって連続刺突文が施されている。142は、覆土中から出土した口縁部片で、断面三角形の隆帯に沿って連続刺突文が施されている。143は、覆土中から出土した口縁部片で、口縁部を断面三角形の隆帯によって区画している。144は、東壁寄りの覆土中から出土した2片が接合した波状の口縁部片で、波頂下につまみ出した小突起を有する。145は、覆土中から出土した波状を呈する口縁部片で、口縁部を断面三角形の隆帯によって区画し、隆帯に沿って二本の沈線をめぐらし、内部に波状沈線を施している。区画の接点には、突起を有している。146は、覆土中から出土した口縁部付近の破片で、隆帯に沿って半截竹筥による沈線をめぐらし、内部に波状沈線を施している。147、148は、覆土中及び床面から出土した口縁部付近の破片で、隆帯に沿って、半截竹筥による連続刺突文が施されている。隆帯による区画の接点には、粘土を貼付した突起を有している。148の突起の上部には、2列の刺突文が施されている。149、150は、覆土中から出土した胴部片で、149は、楕円形状の突起が貼付され、突起の上部はキザミが施されている。150は、渦巻状の突起で、突起の上部に半截竹筥による2条の沈線が施されている。151は、南西コーナー付近と、中央部東壁寄りの覆土下層から出土した3片が接合した胴部片で、隆帯によって楕円形に区画し、区画内の隆帯に沿って半截竹筥による3条の沈線が施され、区画内の中央に横位の沈線を施している。隆帯と隆帯の間には、粘土紐を波状に貼付している。152は、中央部の覆土中から出土した胴部片で、粘土紐によって楕円形や三角形に区画し、隆帯に沿ってへら状工具による沈線をめぐらしている。153は覆土中から出土した胴部片で、隆帯によって渦巻状の文様が表出され、隆帯に沿って半截竹筥による2条の沈線が施されている。154は、覆土







第24图 11号竖穴住居跡出土土器実測図・拓影图(2)



第25図 11号竪穴住居跡出土土器実測図・拓影図(3)

中から出土した口縁部付近の破片で、断面三角形の隆帯によって区画された内部に、ヘラ状工具による結節沈線文が施されている。155は、覆土中から出土した胴部片で、指でつまみ出した細く低い隆帯で長楕円形に区画し、隆帯に沿って沈線を施している。156は、中央部やや南壁寄りの覆土中から出土した2片が接合した胴部片で、隆帯を横位に貼付し、隆帯に沿って半截竹管による連続刺突文を施している。157は、覆土中から出土した胴部片で、隆帯に沿ってヘラ状工具による連続刺突文を施し、隆帯の上部にはキザミを施している。158、159は、覆土中から出土した胴部片で、横位の隆帯に沿って半截竹管による連続刺突文を、その下位に波状沈線文を施して

いる。160は、覆土中から出土した胴部片で、半截竹管による波状沈線文と平行沈線文が施されている。161, 162は、覆土中から出土した胴部片で、隆帯を垂下させ、半截竹管による波状沈線文、平行沈線文を施している。163は、覆土中から出土した2片が接合した胴部片で、半截竹管による連続山形状の沈線文が施されている。164は、覆土中から出土した胴部片で、低い隆帯によって曲線的に区画している。165, 166は、覆土中から出土した胴部片で、断面三角形の隆帯を貼付し、連続爪形文を施している。167は、北平部の覆土中から出土した5片が接合した胴部片で、断面三角形の隆帯を蛇行させながら垂下させ、連続爪形文を施している。168は、波状沈線文の下位に爪形文を施している。169は、カマボコ形の隆帯に沿って二本の平行沈線を、その下位に爪形文を施している。170は、南壁寄りの覆土中から一括して出土した深鉢形土器の大破片で、20片が接合している。推定口径は19.5cmで、胴部は若干開きながら立ち上がり、口縁部で軽く外反する。口縁部は無文で、胴部は小突起を有する太い隆帯によって区画し、半截竹管による平行沈線文、同心円文、円形竹管による刺突文を施している。なお、胎土中に雲母末は含まれていない。760は、中央部南壁寄りの覆土中から出土した8片が接合した口縁部から胴部かけての破片で、肥厚させた口縁から隆帯を短く垂下させただけで、他は無文である。761は、中央部南西寄りの覆土中から出土した胴部から底部にかけての無文の大破片で、底部から開きながら立ち上がる。762は、中央部北壁寄りと南壁寄りの覆土中から出土した40片が接合した胴部から底部にかけての大破片で、器面はヘラ削りが施されただけで無文である。763, 764は、覆土中から出土した底部片で、763は隆帯を垂下させ爪形文が施されているが、764は無文である。765は、中央部の覆土中から出土した14片が接合した浅鉢形土器の口縁部片で、無文である。

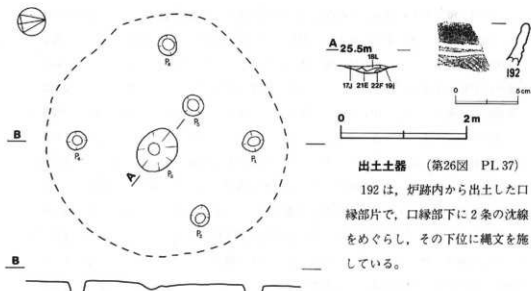
## 12号竪穴住居跡 (旧26号) (第26図 PI, 11)

本跡は、F5g区を中心に確認され、標高25.3m程の台地平坦面に位置している。本跡は、ローム層をほとんど掘り込んでいないことと、ローム層の上部を重機によって削っていることなどによって、壁の立ち上がりを確認することができなかった。

確認できたものは、か跡とピットだけで、か跡とピットをもとに規模を推定すれば、径あるいは一辺が3.7m内外と考えられる。か跡は、長径方向N-44°-Wを指す長径72cm、短径60cmの楕円形の地床炉で、皿状に深さ14cm程掘り囲めている。焼土は、厚い部分が10cm程で、レンズ状に堆積している。ピットは、5か所確認でき、いずれも径32cm、深さ23~34cmで、支柱穴と考えられる。床面は確認できなかった。

遺物は、炉跡内から縄文土器片1片と、黒曜石フレイク1点、礫2点、P1とP2の間付近のローム面からやや浮いて縄文土器片3片が検出されただけである。

土器片で接合関係にあるものは、1例だけで、位置的には近接し、層位的にも同一層のものである。

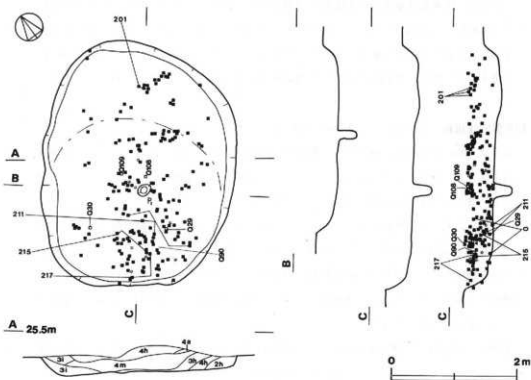


出土土器 (第26図 PL.37)

192は、炉跡内から出土した口縁部片で、口縁部下に2条の沈線をめぐらし、その下位に縄文を施している。

第26図 12号竪穴住居跡実測図・出土土器拓影図

13号竪穴住居跡 (旧22号) (第27図 PL.11・12)



第27図 13号竪穴住居跡実測図・出土土器接合関係図

本跡は、I5hr区を中心に確認され、標高25.3m程の緩斜面に位置している。平面形は、長径方向N-32°-Eを指す楕円形を呈し、規模は長径3.94m、短径3.1mを測る。

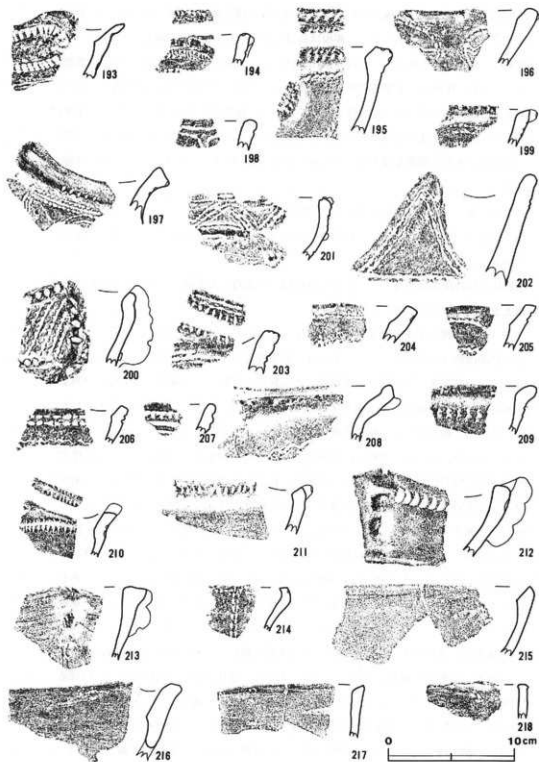
覆土は、褐色土を主体とし、ほぼ3層に分けられ、各層とも炭化粒子を含み、自然堆積の様相を示している。床面は、北壁寄り及び南壁寄りがやや低くなるほかは、全体的に平出である。中央部から南西部にかけては、踏み固められているが、他はやわらかい。ピットは、中央部やや南西寄りから径20cm、深さ32cmのものが1か所確認されただけで、支柱穴とみられる。壁は、高さ25~35cmで、床面と明瞭な境をもたず、30~40度の傾斜をもって立ち上がる。炉跡は確認できなかった。

遺物は、縄文土器片361片、凹石2点、磨石2点、石皿1点、チャートと黒曜石のフレイク各1点、礫15点が出土している。これらは、南半部に集中し、床面上からの出土もあるが、大半は、覆土中層から出土している。

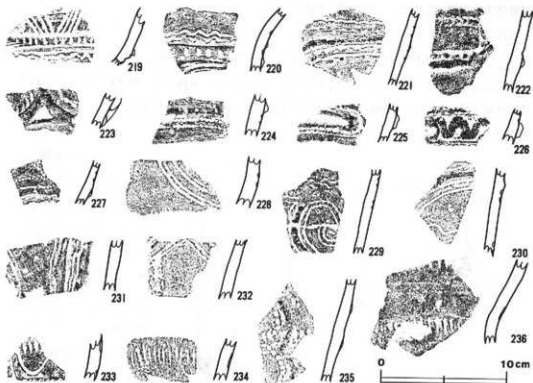
土器片の接合関係は少なく、いずれも層位的、位置的にも近接したものの間の接合である。

#### 出土土器 (第28・29図 PI.37)

193, 194は、覆土中から出土した口縁部片で、楕円形に区画した隆帯の内側に、隆帯に沿って幅広い結節沈線文が施されている。195は、南壁付近の床面から出土した口縁部片で、口唇部は肥厚させ、口唇部及び口縁部に半截竹管による刺突文を施し、口縁部下に中央部を囲ませた粘土板を貼付させ、半截竹管による刺突文を施している。196~199は、覆土中から出土した口縁部片で、いずれも半截竹管による結節沈線文を施している。197は、波状を呈し、肥厚させた口唇部にキザミ目を施している。200は、中央部やや南壁寄りの床面から出土した口縁部片で、断面三角形の隆帯で横長の長方形に区画し、区画内に斜位の連続刺突文を施している。区画と区画の境には小突起を設け、突起の上部及び隆帯上には丸棒状工具による押圧文が施されている。201は、北壁付近の覆土中から出土した4片が接合した口縁部片で、隆帯によって楕円形に区画した内部に、半截竹管による鋸歯状の連続刺突文を3ないし4列施している。また、口唇部にも、2列の連続刺突文を施している。202は、山形把手の破片で、2列の連続刺突文によって三角形に区画している。203~207は、覆土中から出土した口縁部片で、いずれも、半截竹管による連続刺突文を施している。203は、波状を呈し、口唇部にも2列の連続刺突文を施している。208は、口縁部片で、口縁直下に隆帯をめぐらし、下位に波状沈線文を施している。209は、口縁部片で、肥厚させた口縁直下に爪形文の刺突文を施している。210は、波状を呈する口縁部片で、口縁直下に幅広い刺突文を施している。211は、中央部南壁寄りの床面及び覆土中から出土した2片が接合した口縁部片で、肥厚させた口唇部に爪形文を施している。212は、波状を呈する口縁部片で、波頂下に3個の粘土塊を貼付させた小突起を有し、口縁直下に幅広い爪形文を施している。213は、口縁部片で、2個の粘土塊を貼付させた小突起を有している。214は、受け口を呈する口縁部片



第28图 13号竖穴住居跡出土土器拓影图(1)



第29図 13号竪穴住居跡出土土器拓影図(2)

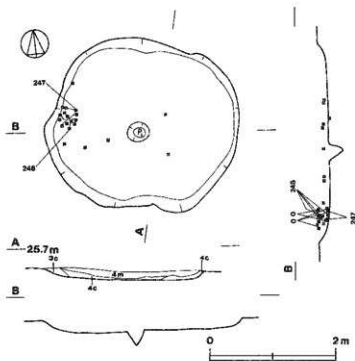
で、円形竹管による刺突文を口縁部と口縁から垂下させている。215、216は、覆土中から出土した2片が接合した浅鉢形土器の口縁部片で、両者共に無文である。なお、216には補修孔が認められる。217、218は、小型深鉢形土器の口縁部片で、両者共に無文である。219は胴部片で、上部にキザミ目を施した隆帯を貼付させ、結節沈線文を施している。220、221は胴部片で、隆帯を貼付させ、連続刺突文や波状沈線文を施している。222は胴部片で、半截竹管による連続刺突文を長楕円形に施している。223は胴部片で、断面三角形の隆帯に沿って連続刺突文を施している。224は、南西壁付近の床面から出土した胴部片で、断面三角形の隆帯に沿って2列の連続刺突文が施されている。225は胴部片で、隆帯に沿って半截竹管による連続刺突文が施されている。226は胴部片で、低い隆帯と隆帯の間に、粘土紐を波状に貼付している。227、228は胴部片で、前者には2列の連続刺突文、後者には4列の結節沈線文が施されている。229は、2片が接合した胴部片で、隆帯と結節沈線文が渦巻状に施され、その上位に波状沈線文が施されている。230～232は胴部片で、隆帯に沿って平行沈線文や波状沈線文が施されている。233～236は胴部片で、いずれも幅広い爪形文が施されている。233は、キザミ目を有する低い隆帯が貼付され、235は、蛇行しながら垂下する隆帯に沿って結節沈線文が施されている。



14号竪穴住居跡 (旧25号) (第30図 PL13)

本跡は、I5jal区を中心に確認され、標高25.4m程の緩斜面に立地している。平面形は、長径方向N-72-Wを指す楕円形を呈し、規模は長径3.0、短径2.65mを測る。

覆土は、褐色土を主体とし、おおむね2層に分けられる。各層ともに焼土粒子を含み、自然堆積の様相を呈している。床面は、西側がやや低くなるが、断面はほぼ皿状を呈し、北西部がやや踏み固められているほかは、軟らかい。



第30図 14号竪穴住居跡実測図・出土土器接合関係図

ピットは、中央部から径30cm、深さ23cmのものが1か所だけ確認でき、主柱穴とみられる。壁は、15~20cmの高さで、床面と明瞭な境をなさずに35度前後の傾斜をもって立ち上がる。炉跡は確認できなかった。

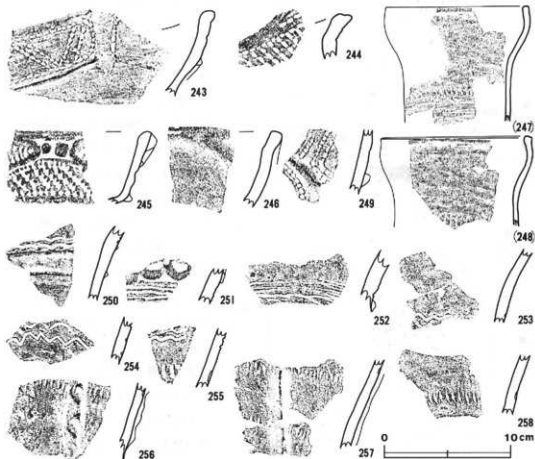
遺物は、深鉢形土器の大破片2点のほか土器片46片で、西壁直下の覆土中に集中して出土している。

土器片の接合関係は、西壁直下の集中しているもの間に多いが、1.5m以上離れた東壁寄りの土器片と接合するものもみられる。

出土土器 (第31図 PL37)

243 は、西壁直下の床面から出土したI1縁部片で、口縁部を断面三角形の隆帯で長方形に区画し、区画内の隆帯に沿って1列の連続刺突文をめぐらし、その内側に2列の連続刺突文を鋸歯状に施している。区画の端には小突起を貼付しているが欠損している。244 は、波状を呈するI1縁部片で、半截竹管による連続刺突文によって区画した内側に、同様の連続刺突文を斜位に施している。245 はI1縁部片で、断面三角形の隆帯によって楕円形状に区画し、区画内に爪形文と斜位の刺突文を施している。区画と区画の間には、ボタン状の粘土を貼付している。246 は、西壁付近の覆土中から出土したI1縁部片で、隆帯によって区画している。247、248 は、西壁付近の床面及び覆土中から出土した3片が接合した口縁部から胴部上半にかけての破片で、胴部にヒダ状

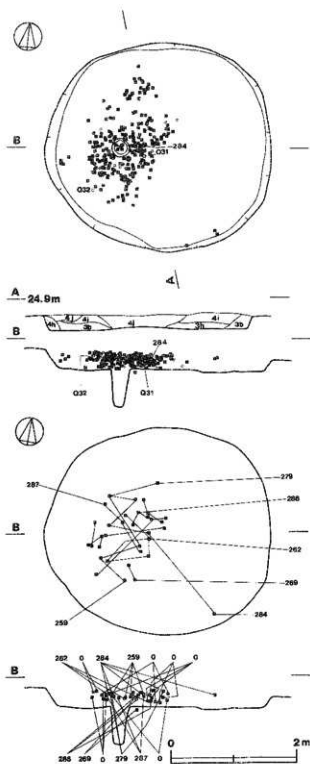
の指圧痕が1条みられる。249は、西壁付近の覆土中から出土した胴部片で、隆帯によって区画し、結節沈線文を施している。250は、中央部の覆土中から出土した胴部片で、断面三角形の隆帯に沿って波状沈線文が施されている。251～258は、西壁付近の覆土中から出土した胴部片である。251、252は、横位の平行沈線文、253、254は波状沈線文が施されている。251は、粘土紐が波状に貼付されている。255～258は、いずれも爪形文が施されている。255は、爪形文の上位に波状沈線文、256、257は、垂下する隆帯が貼付され、256の隆帯にはキザミ目状の押圧が加えられている。なお、257と258は、同一個体とみられる。



第31図 14号竪穴住居跡出土土器実測図・拓影図

#### 15号竪穴住居跡 (旧20号) (第32図 PL13・14)

本跡は、I6a区を中心に確認され、標高24.6m程の緩斜面上に立地している。平面形は、円形を呈し、規模は長径3.6m、短径3.3mである。北側から南東側にかけて45号溝が走り、本跡を65cm程の幅で掘り込んでいる。



第32図 15号竪穴住居跡実測図・出土土器接合関係図

覆土は、暗褐色土を主体とし、おおむね3層に分けられる。壁際から土が堆積し、中央部付近は、上層から床面まで1層で、自然堆積の様相を呈している。覆土上・中層には炭化粒子を多く含んでいる。床面は、平坦で、西半部の径1mの範囲は十分に踏み固められているが、東半部は軟らかい。

ピットは、西壁寄りの、床面が踏み固められた部分のほぼ中央部から径27cm、深さ61cmのものが1か所確認された。壁は、15~30cmの高さで、西側部が高く、やや傾斜をもって立ち上がる。炉跡は、確認できなかった。

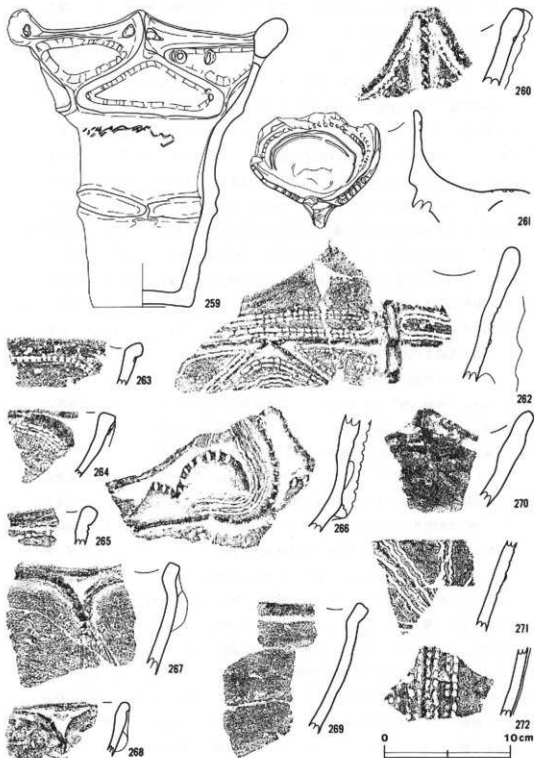
遺物は、ほぼ完形の深鉢形土器2点のほか土器片528片、磨石2点、黒曜石フレイク1点、礫6点で、踏み固められた床面の上部にあたる覆土上・中層から集中して出土している。

土器片の接合関係は、土器片が比較的集中して出土していることから、層的、位置的に近接したもの間に多い。

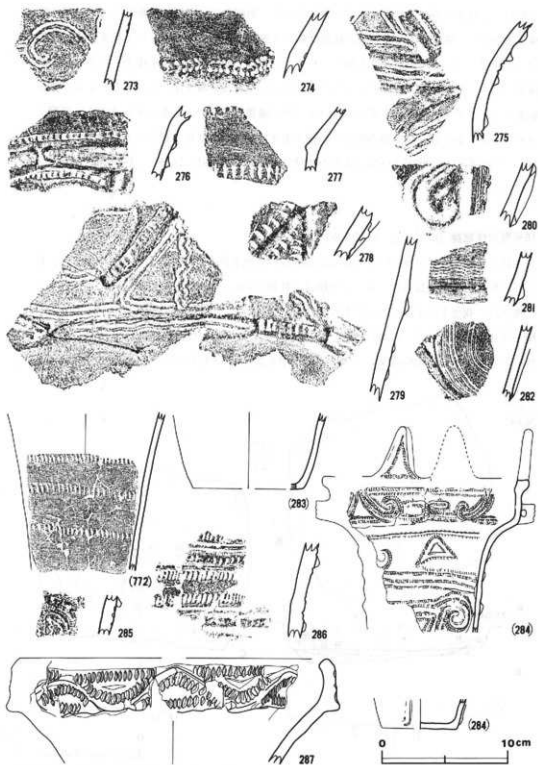
#### 出土土器 (第33・34図 P.L38)

259は、東半部の覆土中から出土した12片が接合し、ほぼ完形となった小型深鉢形土器で、法量は、口径17.4cm、器高23.8cm、底径7.8cmである。器形は、胴部がほぼ垂直に立ち上がり、頸部で外反し、口縁部は軽く内埒して立ち上がる。口縁部は波状を呈し、4単位の小突起を有している。口縁部文様帯は、波頂下を頂点とし、三角形に隆

帯が貼付され、また口縁に沿って貼付された隆帯と共に、逆三角形を形成している。隆帯に沿って幅広で浅い結節沈線文が施されている。胴部中位には、4単位の長楕円形状に隆帯が貼付されている。260は山形状の把手片で、肥厚された口縁部に沿って半截竹管による連続刺突文を施し、把手頂部からキザミ目を施した隆帯を垂下させている。261は、漏斗状の把手で、内側に半截竹管による結節沈線文と平行沈線文が、外縁部にはキザミ目が、それぞれ施されている。262は、西下部の覆土中から出土した5片が接合した波状を呈する口縁部片で、楕円形や三角形に区画した隆帯に沿って半截竹管による結節沈線文が施されている。波頂下には、浅い鋸歯状の突起が貼付されている。263～265は、覆土中から出土した口縁部片で、楕円形に区画したとみられる隆帯の内側に沿って結節沈線文が施されている。266は、中央部の覆土下層から出土した波状を呈する口縁部片で、波頂部から渦巻状の隆帯を貼付し、口縁部文様帯を区画している。隆帯の内側に沿って4条の平行沈線文が施され、区画内には半円形の粘土板を連続して貼付し、上部にキザミ目を施している。267、268は、覆土中から出土した口縁部片で、V字状の隆帯が貼付されている。269は、中央部南壁よりの床面と覆土中から出土したものが接合した、無文の口縁部片である。270は、波状を呈する浅鉢形土器の口縁部片で、無文である。271、272は胴部片で、低い隆帯に沿って結節沈線文や波状沈線文が施されている。273は胴部片で、渦巻状に結節沈線文が施されている。274は胴部片で、半截竹管による連続刺突文が施されている。275は胴部片で、三角形に区画した断面三角形の隆帯に沿って、結節沈線文が施されている。276は胴部片で、中央部を指頭によって凹ませた隆帯に沿って、幅広の結節沈線文が施されている。277、278は、爪形文が施された胴部片で、278は断面三角形の隆帯に沿って爪形文が施されている。279は、覆土中から出土した2片が接合した胴部片で、三角形に区画した低い隆帯に沿って結節沈線文や波状沈線文が施されている。また、中央部を指頭によって凹ませた隆帯に、幅広の爪形文が施されている。280は胴部片で、隆帯を垂下及び渦巻状に貼付させている。281、282は胴部片で、断面三角形の隆帯に沿って、平行沈線文や波状沈線文が施されている。772は、中央部の覆土中から出土した30片が接合した胴部片で、幅広の爪形文が3段施されている。283は、中央部の覆土中から出土した胴部下半から底部にかけての破片で、無文である。284は、中央部、北西壁寄り、及び南東壁寄りの覆土中から出土した17片が接合した口縁部から胴部にかけての大破片で、他に同一個体片が9片みられる。形態は、筒形の胴部から頸部で大きく外反し、口縁部はほぼ直立する。口縁には、2個で一対の山形突起を四対もっていたとみられ、突起には、結節沈線文が三角形に施されている。口縁部文様帯は、上下を隆帯によって区画し、内側には上部に結節沈線文を施した断面カマボコ状の隆帯を八の字状で先端を蕨手状にして貼付し、隆帯に沿って2列の結節沈線文を施している。突起下には、上部にキザミ目を施して横状突起を付している。頸部には2列の結節沈線文を施し、その下位に三角形と、対称的に配された半の角のような抽象文に隆帯



第33图 15号竖穴住居跡出土土器実測図・拓影图(1)



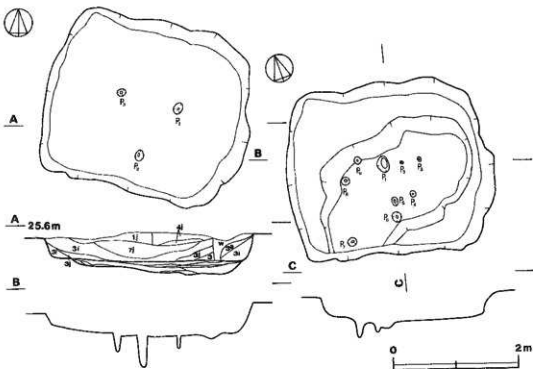
第34图 15号竖穴住居跡出土土器実測图·拓影图(2)

を貼付し、隆帯に沿って結節沈線文を施している。胴部中位には幅広で断面カマボコ形の隆帯を横位に貼付し、隆帯に沿って2列の結節沈線文を施している。その下位にも抽象的に隆帯を貼付し、隆帯に沿って結節沈線文を施している。285 は、西壁寄りの覆土中から出土した胴部片で、隆帯に沿って結節沈線文が施されている。286 は、中央部の覆土中から出土した7片が接合した胴部片で、キザミ目を施した横位のカマボコ状の隆帯に沿って、2条の平行沈線文と爪形文が施されている。287 は、中央部西壁寄りの覆土中から出土した9片が接合した口縁部から胴部にかけての大破片で、口縁部文様帯は隆帯を波状に貼付し三角形に区画し、区画内に爪形文を施している。

### 16号竪穴住居跡 (旧6号) (第35・36図 PL14・15)

本跡は、K5a4区から確認され、標高25.3m程の台地平坦面に立地している。平面形は、長軸N-75°-Wを指す隅丸長方形を呈し、規模は、長軸3.16m、短軸2.62mを測る。

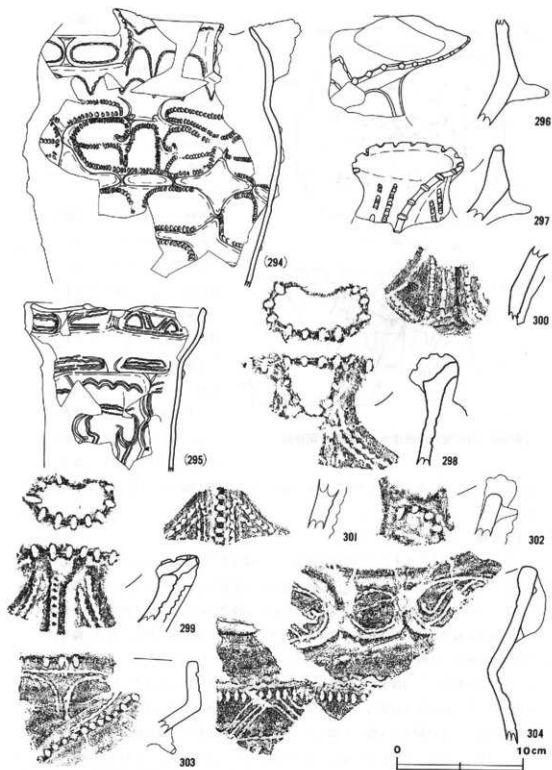
覆土は、褐色土を主体とし、おおむね3層に分けられ、ほとんどの層に炭化粒子を含み自然堆積の様相を呈している。床面は、東側へ向かって低くなるほかは、ほぼ平坦で、全体的に十分踏み固められている。床面の構築にあたっては、中央部を2.7×1.7mの不整楕円形に一段深く掘り込



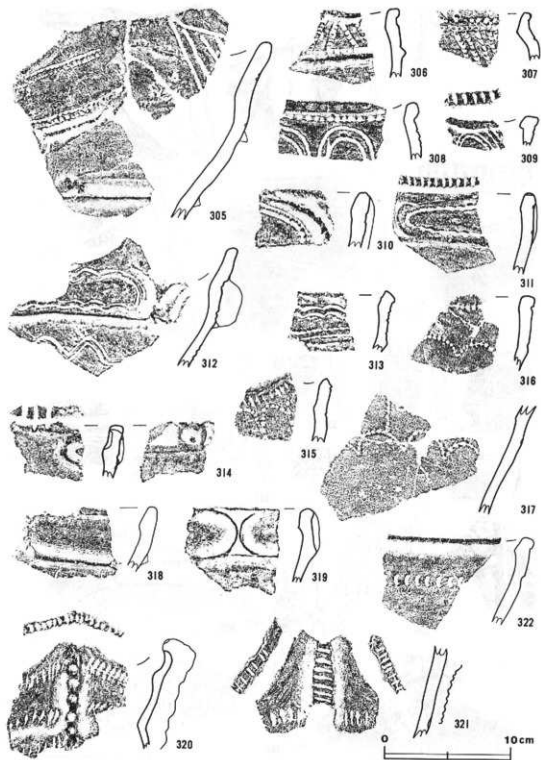
第35図 16号竪穴住居跡実測図・掘り方実測図



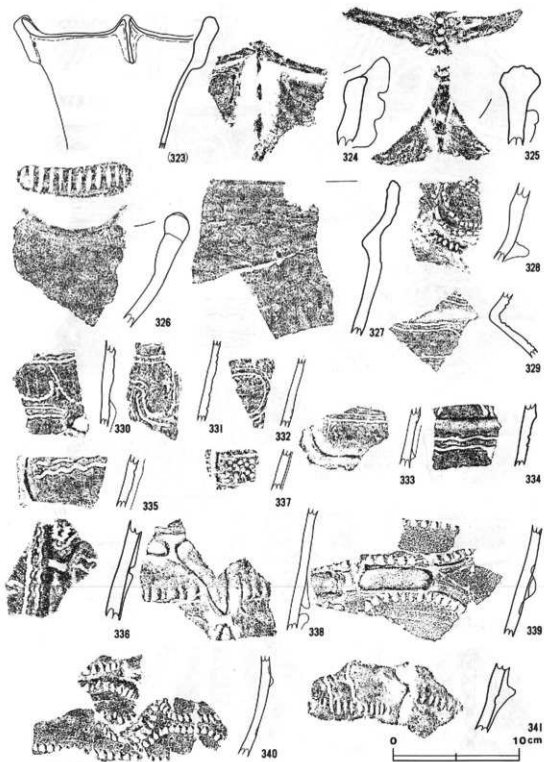




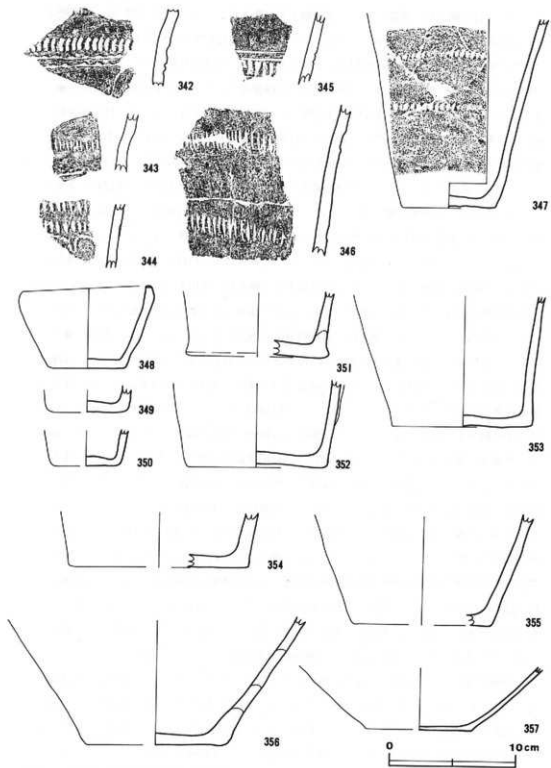
第37图 16号竖穴住居跡出土土器拓影图(1)



第38图 16号竖穴住居跡出土土器拓影图(2)



第39图 16号竖穴住居跡出土土器拓影图(3)



第40图 16号竖穴住居跡出土土器实测图·拓影图(4)

にはキザミ目が施され、隆帯に沿って連続刺突文が施されている。298、299 は、扇状把手片で、296 は頂部からY字状に貼付された隆帯、297 は上部に連続刺突文が施された隆帯で飾られ、いずれも口縁部に沿って2列の連続刺突文が施されている。頂きは耳状を呈し、外周にはキザミ目が施されている。300、301 は、波頂部に近い口縁部片で、いずれも波頂部から隆帯を垂下させ、隆帯に沿って半截竹管による連続刺突文が施され、301 の隆帯上部にはキザミ目が施されている。302 は、双頭状把手片で、頂部から高巻状の隆帯が貼付されている。303 は、中央部北東寄りの覆土中から出土した7片が接合した扇状把手片で、S字状に貼付されたキザミ目をもつ隆帯で飾られている。隆帯に沿って1列の連続刺突文が施され、その内側に半円状に連続刺突文が施されている。304 は、中央部の覆土中から出土した9片が接合した、口縁部から頸部にかけての大破片で、他に同一個体の破片が4点程みられる。また303 も同一個体とみられる。器形は、頸部がくの字状にくびれ、壺形に近い形態を呈するものとみられる。口縁部文様帯は、円形及び楕円形に区画した隆帯の内側に沿って1列の連続刺突文が施され、楕円形の区画内には、さらに戴手状に連続刺突文が施されている。頸部の最もくびれた部分には1条の波状沈線文をめぐらし、それに沿って爪形文、その下位に鋸歯状に連続刺突文が施されている。305 は、南東部の覆土中から出土した波状を呈する口縁部片であるが、波頂部及び波頂下の突起は欠損している。口縁部文様帯は、突起を境に左右異なり、一方は口縁部沿いと横位に貼付させた隆帯沿いに半截竹管による連続刺突文が施され、他方はヘラ状工具による連続刺突文によって三角形状に区画した内側に、同様の連続刺突文が斜位に施されている。頸部には断面三角形の隆帯が貼付されている。306、307 は、北東部の覆土中から出土した口縁部片で、結節沈線文が施されている。308 は、北西部の覆土中から出土した2片が接合した口縁部片で、肥厚させた口唇部直下に1列、その下位に2重の円弧状に結節沈線文が施されている。309 は口縁部片で、連続刺突文が施されている。301、311 は、南東部の覆土中から出土した口縁部片で、楕円形に区画した隆帯の内側に沿って結節沈線文、連続刺突文が施されている。312 は、中央部の覆土中から出土した波状を呈する口縁部片で、隆帯によって区画された口縁部文様の内側と頸部に、波状沈線文が施されている。口縁部文様帯の区画間には小突起を有し、突起の上位は円孔をなしている。313 は、295 と同一個体とみられる口縁部片である。314 は、北西部の覆土上層から出土した波状を呈する口縁部片で、楕円形状に区画された隆帯に沿って半截竹管による連続刺突文が施されている。波頂部にはキザミ目が施され、内面の波頂下には玉抱き三叉文が沈刻されている。315～317 は、山形状に結節沈線文が施されたもので、316 と317 は同一個体とみられる。315 は波状を呈する口縁部片で、口縁部に沿って爪形文が施されている。316 は、口唇部にキザミ目が施されている。318、319 は、中央部の覆土中から出土した口縁部片で、口縁部を隆帯によって楕円形に区画している。320、321 は、北東部の覆土中から出土した波状を呈する口縁部片で、幅広い爪形文が施されている。いずれも

波頂部から隆帯が垂下し、隆帯上部と口唇部にはキザミ目が施されている。322 は、西壁寄りの覆土中から出土した口縁部片で、爪形文が施されている。323 は、南東部の覆土中から一括して出土した無文の深鉢形土器で、底部は欠損している。胴部から外傾して立ち上がり、口縁部は4単位の波状を呈し、波頂下に突起を有している。324、325 は、中央部の覆土中から出土した波状を呈する口縁部片で、両者共に波頂下に小突起を有している。325 の波頂部は、鶏冠状を呈している。326 は、波状を呈する無文の口縁部片で、波頂部は双頭状を呈し、上部にはキザミ目が施されている。327 は、中央部やや西側の覆土中から出土した口縁部片で、頸部はくびれ、器面は無文である。328 は、口縁部付近の破片で、隆帯で区画した内側に2列の結節沈線文が施されている。329 は、くの字状にくびれた頸部片で、平截竹管による2列の結節沈線文が施されている。330～332は、覆土中から出土した胴部片で、結節沈線文や平行沈線文が施されている。333～336は、覆土中から出土した胴部片で、断面三角形の隆帯で区画し、波状沈線文や平行沈線文が施されている。337 は、中央部の床面から出土した胴部片で、隆帯によって区画し、円形竹管による刺突文が施されている。338 は、覆土中から出土した胴部片で、中央部を指頭で凹ませた隆帯で区画され、ヒダ状の指圧痕が施されている。339、340 は、中央部の覆土中から出土した6片が接合した胴部片で、同一個体とみられる。断面三角形の隆帯や、中央部を指頭によって凹ませた隆帯で区画し、爪形文を施している。341 は、覆土中から出土した胴部片で、断面三角形の隆帯を蛇行させながら垂下させ、爪形文を施している。342～345 は、覆土中から出土した胴部片で、いずれも爪形文が施され、それ以外に342～344は結節沈線文、345 は平行沈線文が施されている。346 は、南東部の覆土中から出土した5片が接合したもので、幅広い爪形文が施されている。347 は東半部の覆土中から出土した13片が接合した胴部下半から底部片で、爪形文が3段施されている。底径は7.4cmである。348 は、P1の底面付近から横転した状態で出土した完形の小型鉢形土器である。法量は、口径10.2cm、器高6.6cm、底径6cmで、底部から外傾して立ち上がり、口縁部で軽く内彎する。口唇部にキザミ目が施されている以外は、無文である。349、350 は、北西部の覆土中から出土した小型土器の底部片で、底径は、いずれも6cmである。351～356は、覆土中から出土した深鉢形土器の底部で、352に垂下する隆帯が貼付されている以外は、無文である。357 は、南東部の覆土中から出土した浅鉢形土器の底部大破片で、無文である。

#### 17号竪穴住居跡(旧7号) (第41図 PL16)

本跡は、L5a1区を中心に確認され、標高25.0m程の台地平坦面に立地している。平面形は、長軸方向N-43°Eを指す隅丸長方形で、規模は長軸3.15m、短軸2.6mを測る。

覆土は、暗褐色土を主体とし、細かく分けられる。覆土中・下層には、多量の土器と共に、径70～80cm程のブロック状に焼土が投棄された状態で堆積し、これらの投棄によって、本跡の大部



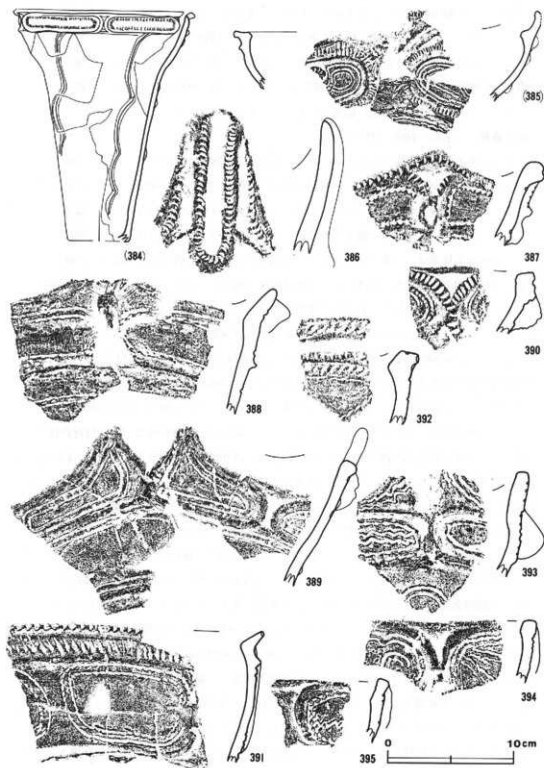
点、礫17点、土製円板2点で、ほぼ全域にわたって覆土中・上層から出土している。床面から出土しているものは少なく、本跡に伴う遺物は、皆無に近い状態である。

土器片の接合関係は、非常に多く、層位的、位置的に近接したものの間に多いが、覆土上層と下層間や、距離的に1.5m以上離れたもの間にもみられる。同一個体の土器片が、広範囲に散乱していることから、ほぼ一括に近い状態で投棄されたものと考えられる。

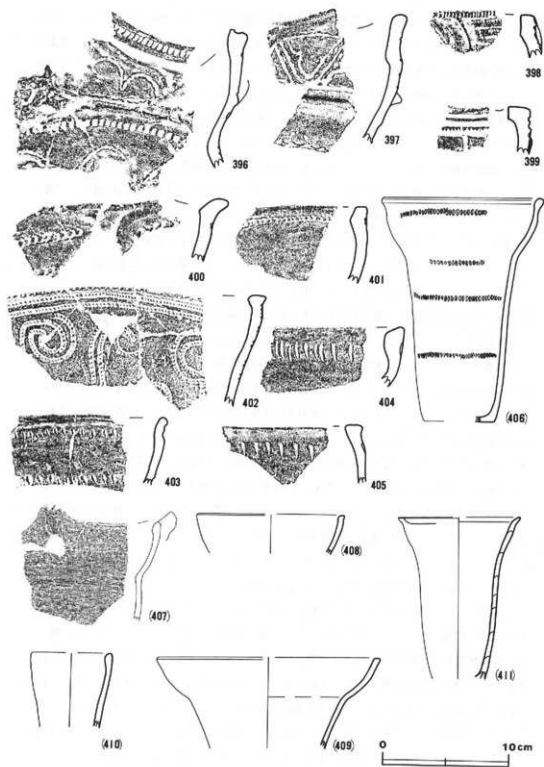
#### 出土遺物 (第42~44図 P140・41)

384 は、西半部の覆土中から出土した12片が接合した口縁部から底部にかけての大破片で、他に同一個体の破片が10片みられる。口縁部文様帯は、隆帯によって5単位の楕円形に区画し、隆帯に沿って結節沈線文が施されている。胴部には、区画の下位から蛇行させながら隆帯を垂下させている。385 は、北壁付近の覆土中から出土した波状を呈する口縁部片で、波頂部は欠損している。口縁部文様帯は、二重の隆帯によって楕円形状に区画し、隆帯間に爪形文、内側に結節沈線文、波状沈線文が施され、頸部には、波状沈線文が施されている。386 は、中央部の覆土中から出土した山形状の把手片で、U字状に隆帯を貼付させ、隆帯上と口縁部に沿って爪形文が施されている。387 は、覆土中から出土した波状を呈する口縁部片で、楕円形状に区画した隆帯の内側に沿って、1列の連続刺突文が施されている。区画の接点には小突起が貼付されている。388は、中央部覆土中から出土した5片が接合した波状を呈する口縁部片で、楕円形状に区画した隆帯の内側に沿って、半截竹管による連続刺突文が施されている。また、頸部にも連続刺突文が施されている。区画の接点には、小突起が貼付されている。389 は、西壁付近及び東壁付近の覆土中から出土した6片が接合した波状を呈する口縁部片で、波頂部は双頭状を呈している。口縁部文様帯は、隆帯によって楕円形状に区画し、区画内に半截竹管による、一部結節状をなす幅広い沈線文が施されている。390 は覆土中から出土した口縁部片で、隆帯によって口縁部を区画し、区画内に結節沈線文を施している。隆帯上には、爪形状のキザミ目が施されている。391 は、中央部の覆土中から出土した5片が接合した口縁部片で、口唇部と口縁直下の隆帯の間にヘラ状工具による爪形状の連続刺突文が施され、隆帯によって楕円形に区画された口縁部文様帯の内側には、2列の連続刺突文が施されている。392 は、中央部の覆土中から出土した口縁部片で、肥厚させた口唇部の下位にヘラ状工具による爪形状と、結節状の連続刺突文を楕円形状に施している。口唇部の上部と外側にキザミ目が施されている。393 は、南壁寄りの覆土中から出土した波状を呈する口縁部片で、波頂部は欠損している。口縁部文様帯は、隆帯によって楕円形に区画し、隆帯に沿って2列の連続刺突文が、また、区画内には横位に波状沈線文が施されている。区画の接点には小突起をなしている。394 は、西コーナー付近の床面から出土した口縁部片で、隆帯によって楕円形状に区画した内側に、半截竹管による渦巻状の結節沈線文や、平行沈線文が施されている。395 は、西コーナー付近の覆土中から出土した口縁部片で、楕円形状に区画した隆帯の内側に沿



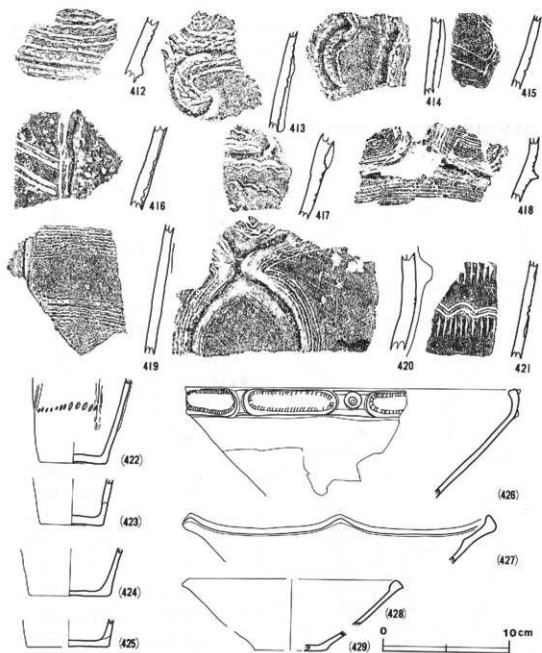


第42图 17号竖穴住居跡出土土器実測図・拓影図(1)



第43图 17号竖穴住居跡出土土器实测图·拓影图(2)

って連続刺突文が、区画内には横位に波状沈線文が施されている。396 は、北コーナー付近の覆土中から出土した波状を呈する口縁部片で、口縁部文様帯は、陰帯で区画し、内側に半截竹管による連続刺突文、区画の直下に爪形文が施されている。頸部には、山形状に連続刺突文が施されている。397 は、中央部の覆土中から出土した2片が接合した、波状を呈する口縁部片で、口縁部を陰帯によって区画し、陰帯の内側に沿って1列と、内側にV字状に連続刺突文が施されている。398、399 は、北コーナー付近の覆土中から出土した口縁部片で、398 は、陰帯で区画した内側に結節沈線文が施されている。399 は、口縁直下に半截竹管による2本の平行沈線を、その下位に爪形状の連続刺突文が施されている。400 は、覆土中から出土した口縁部片で、陰帯によって栴門形状に区画した内側に、爪形文が施されている。401 は、覆土中から出土した口縁部片で、肥厚させた口唇部直下に爪形文が施されている。402 は、中央部東壁寄りの覆土中から出土した7片が接合した口縁部片で、口縁直下に2列、その下位に渦巻状に結節沈線文が施されている。403～405 は、中央部の覆土中から出土した口縁部片で、いずれも爪形文が施されている。406 は、中央部南西寄りの覆土中から出土した21片が接合した深鉢形土器で、全体の3分の1程の遺存状態である。法量は、推定口径24.7cm、器高35.7cm、推定底径11.2cmで、形態は、底部からほぼ垂直に立ち上がり、頸部で軽くくびれ、口縁部は軽く内湾している。口縁部及び胴部に爪形文が4段施されている。407 は、中央部の覆土中から出土した3片が接合した波状を呈する口縁部から胴部にかけての破片である。波頂下に小突起が貼付されている以外は、無文である。408 は、南西壁付近の覆土中から出土した、無文の深鉢形土器口縁部片である。409 は、中央部北壁寄りの覆土中から出土した8片が接合した深鉢形土器の口縁部から胴部上半の大破片である。口径35.2cmで、形態は、頸部で軽くくびれ、口縁部は軽く内湾する。器面は無文である。410 は、中央部の覆土中から出土した2片が接合した、深鉢形土器の口縁部片で、無文である。411 は、南壁付近の床面及び、中央部付近の覆土中から出土した23片が接合した深鉢形土器の大破片で、底部は欠損している。推定口径は、18.4cmで、底部からゆるやかに開きながら立ち上がり、頸部で軽くくびれる。口縁部は軽く外反する。器面は無文である。412 は覆土中から出土した胴部片で、陰帯に沿って結節沈線文、波状沈線文が施されている。413、414 は、覆土中から出土した胴部片で、曲線的モチーフを描く陰帯に沿って連続刺突文が施されている。415 は、覆土中から出土した胴部片で、細い連続刺突文が施されている。416、417 は、中央部の床面から出土した胴部片で、416 は陰帯を垂下させ、半截竹管による平行沈線文が斜位に施されている。417 は、栴門形状に区画した陰帯に沿って波状沈線文が施されている。418～420 は、中央部の覆土中から出土した胴部片で、418 は、栴門形状に区画した陰帯に沿って4ないし5条の平行沈線文が施されている。419 は、断面三角形の陰帯を垂下させ、横位に波状沈線文が施されている。420 は、X字状に貼付させた陰帯に沿って、3列の連続刺突文、又は平行沈線文が施されている。

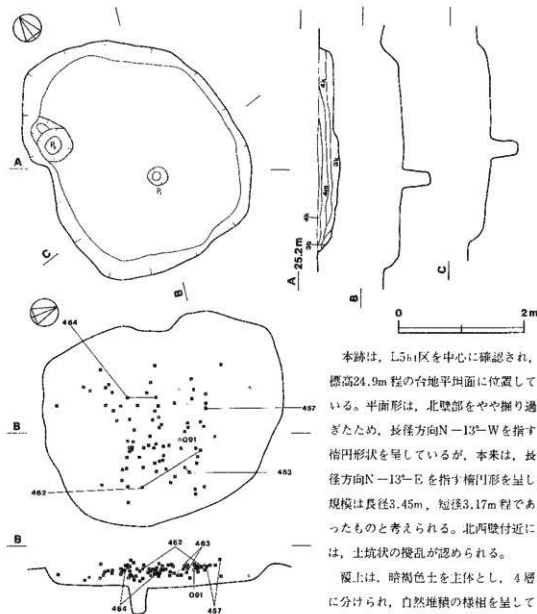


第44図 17号竪穴住居跡出土土器実測図・拓影図3)

421 は、南コーナー付近の覆土中から出土した胴部片で、幅広の爪形文と波状沈線文が施されている。422～425は、中央部の覆土中から出土した深鉢形土器の底部である。422 は、隆帯を6本垂下させ、隆帯間に雑な爪形文が施されている。424 の内面には、有機物が付着している。426 は、覆土中から出土した15片が接合した浅鉢形土器口縁部の大破片で、口縁部文様帯は、隆帯によって長楕円形状に区画し、隆帯に沿って幅広の連続刺突文が施されている。区画の間には、1

つおきに環状の粘土帯が貼付されている。推定口径は、58cmである。427、428は、覆土中から出土した浅鉢形土器の口縁部片で、427は、波状を呈し、内面上に段を有している。両者共に無文である。429は、浅鉢形土器の底部片で、428と同一個体とみられる。

18号竪穴住居跡 (旧8号) (第45図 PL17)



本跡は、L5m区を中心に確認され、標高24.9m程の台地平坦面に位置している。平面形は、北壁部をやや掘り過ぎたため、長径方向N-13°-Wを指す楕円形状を呈しているが、本来は、長径方向N-13°-Eを指す楕円形を呈し、規模は長径3.45m、短径3.17m程であったものと考えられる。北西壁付近には、土坑状の擾乱が認められる。

覆土は、暗褐色土を主体とし、4層に分けられ、自然堆積の様相を呈している。床面は、中央部に向かって低くなる

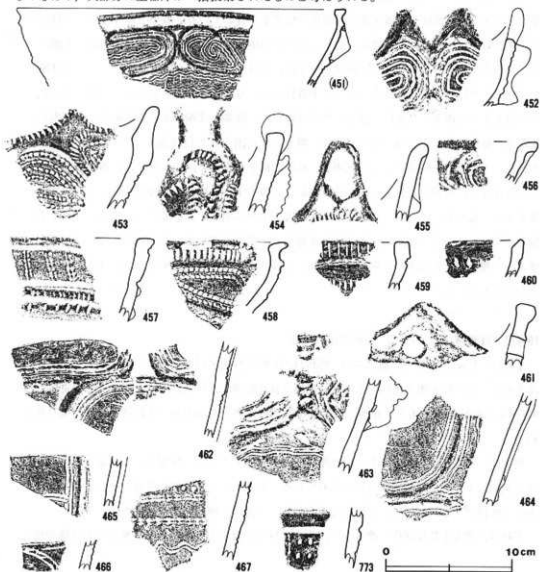
第45図 18号竪穴住居跡実測図・出土土器接合関係図

的に比較的踏み固められている。

ピットは、径30cm、深さ44cmのものが中央部から1か所確認され、支柱穴とみられる。壁は、20～27cmの高さで、床面と明瞭な境をなさずに45～60度程の傾斜をもって立ち上がる。炉跡は、確認できなかった。

遺物は、深鉢形土器の大破片のほか、土器片 102片、礫 5点で、ほぼ中央部の覆土上・中層から投棄された状態で出土している。

土器片の接合関係は、層位的には同レベル間のものが多いが、位置的には1m以上離れているものもあり、大部分の土器片が一括投棄されたものと考えられる。



第46図 18号竪穴住居跡出土土器拓影図

#### 出土土器 (第46図 PL41)

451 は、中央部南東寄りの覆土下層から出土した口縁部片で、口縁部文様帯は隆帯によって楕円形状に区画し、隆帯に沿って2列の連続刺突文、その内側に横位の波状沈線文や渦巻状の連続刺突文が施されている。頸部には、波状沈線文が施されている。推定口径は、57cmである。452 は、南壁付近の覆土下層から出土した波状を呈する口縁部片で、波頂部に双頭状の突起を有している。口縁部文様帯は、断面三角形の隆帯によって楕円形状に区画し、区画内に幅状の結節沈線文が6列施されている。453 は、中央部の覆土下層から出土した波状を呈する口縁部片で、隆帯によって区画し、区画内に結節沈線文が施されている。454 は、西壁寄りの覆土中から出土した波状を呈する口縁部片で、波頂部に双頭状の小把手を有している。波頂下には、キザミ目を施した隆帯を環手状に貼付させ、隆帯に沿って爪形文が施されている。455 は、中央部の床面から出土した波状を呈する口縁部片で、隆帯をV字状に貼付し、爪形文が施されている。456 は覆土中から出土した口縁部片で、隆帯に沿って半截竹管による沈線文が施されている。457 は、北壁寄りの覆土中から出土した2片が接合した口縁部片で、隆帯と沈線によって区画し、区画内に結節沈線文を縦に施している。458、459は、覆土中から出土した口縁部片で、口縁直下に爪形文を施し、その下位を隆帯によって区画し、結節沈線文を施している。460 は、覆土中から出土した口縁部片で、爪形文が施されている。461 は、覆土中から出土した波状を呈する口縁部片で、波頂下に一孔を有している。462～466 は、覆土中から出土した胴部片で、隆帯に沿って平行沈線文が施されている。463 は、キザミ目を施した小突起を有している。467、773 は、中央部東壁寄りの覆土中から出土した胴部片で、467 は波状沈線文と連続刺突文、773 は、沈線文と刺突文が施されている。

#### 19号竪穴住居跡 (旧10号) (第47図 PL18)

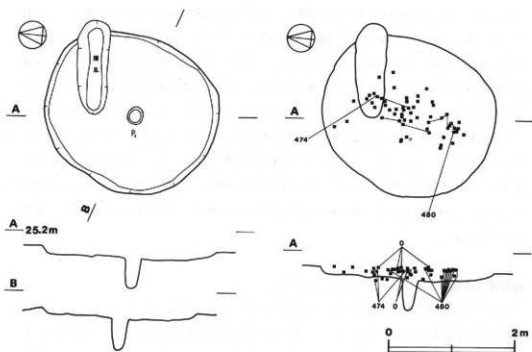
本跡は、L5区を中心を確認され、標高24.9m程の台地平坦面に立地している。平面形は、長径方向N-23°Eを指す楕円形を呈し、規模は長径2.78m、短径2.44mを測る。北壁寄りには幅45cm程の溝が東西に走り、東側では確認面からの深さが20cmを越え土坑状に床面を掘り込んでいる。

覆土は、暗褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。床面は、北西部が若干高いほかは平坦で、全体的に比較的踏み固められている。ピットは、中央部から径27cm、深さ44cmのものが1か所確認されただけで、上柱穴とみられる。炉跡は、確認できなかった。

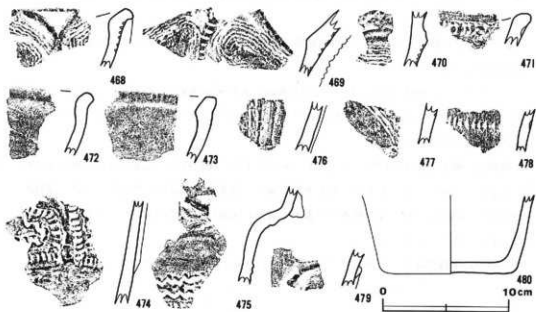
遺物は、縄文土器片80片、曜5点で、中央部付近の覆土上・中層から投棄された状態で出土している。

土器片の接合関係は、層位的には同レベルで、位置的にも近接したものが多いが、覆土上・下

層間や、1 m 以上離れたもの間にもみられる。



第47図 19号竪穴住居跡実測図・出土土器接合関係図



第48図 19号竪穴住居跡出土土器実測図・拓影図



#### 出土土器 (第48図 PL42)

468～470 は、同一個体とみられる破片で、470 は中央部の床面から、他は覆土中から出土している。468、469 は口縁部片で、469 は波状を呈している。文様は、隆帯によって区画し、区画内に幅狭で6条の平行沈線文が施されている。471～473は、覆土中から出土した口縁部片で、471 は爪形文が施されているが、他は無文である。474は、中央部の床面及び覆土中から出土した3片が接合した胴部片で、区画している隆帯に沿って爪形文、その内側に波状沈線文が施されている。475～479は、覆土中から出土した胴部片である。475 は、頸部がくびれ、頸部下に波状沈線文が施されている。476 は、垂下させた断面三角形の隆帯に沿って結節沈線文が、477 は、曲線的に結節沈線文が施されている。478 は爪形文が施され、479 は断面三角形の隆帯が貼付されている。480は、東半部の覆土中から出土した12片が接合した深鉢形土器の底部で、底径10.5cmで無文である。

#### 20号竪穴住居跡 (旧14号) (第49図 PL18)

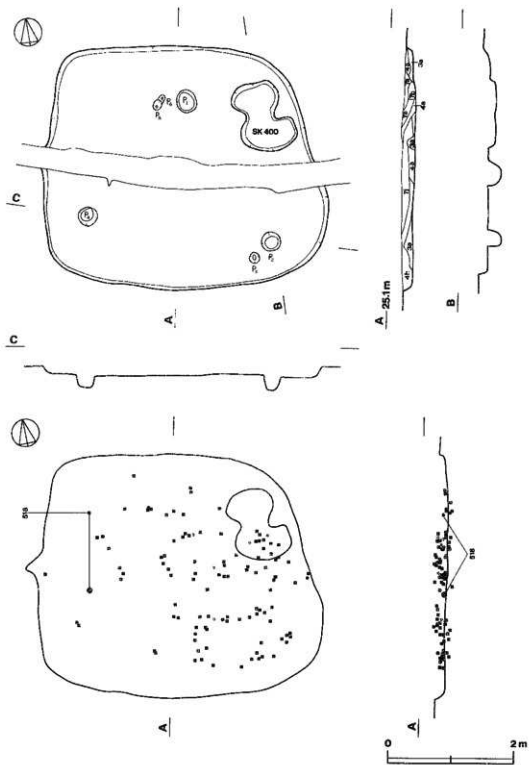
本跡は、L6a2区を中心に確認され、標高24.9m程の台地平坦面に位置している。平面形は、長軸方向N-74°-Wを指す、南東コーナー部がやや張り出した隅九長方形を呈し、規模は、長軸4.6m、短軸3.90mを測る。東壁中央部から西壁中央部にかけて、幅45cm程の溝が走り、床面を23cm程掘り込んでいる。また、北東コーナー部から400号上坑が確認され、本跡との新旧関係は明らかにできなかったが、400号上坑の覆土、及び出土遺物等から、400号上坑が本跡より新しいものと考えられる。

覆土は、暗褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。床面は、ほぼ平坦で、比較的踏み固められている。

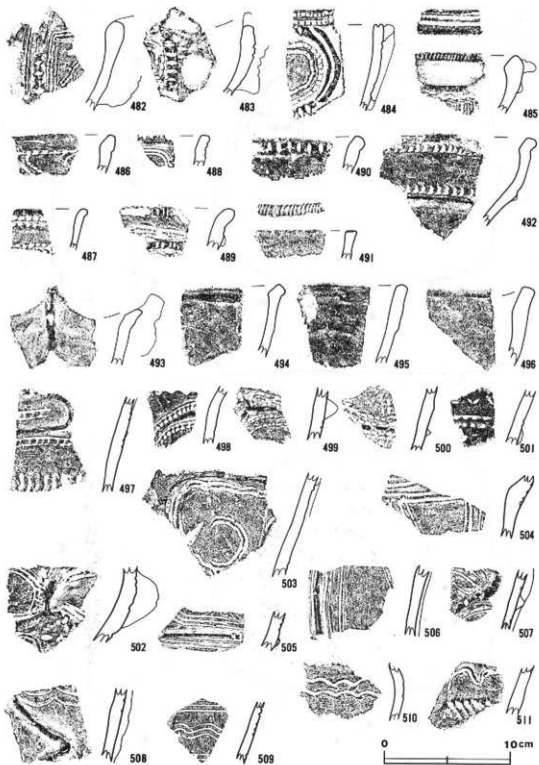
ピットは、5か所確認され、P2・P4は径30cm、深さ20cm前後で、支柱穴と考えられる。壁は、10～15cmの高さで、北西コーナー部付近がやや不明確である以外は、ほぼ垂直に立ち上がる。炉跡は、確認できなかった。

遺物は、縄文土器片513片、チャートフレイク1点、礫12点で、大部分は数か所の小ブロックに分かれているが、主に東半部の覆土上・中層から投棄された状態で出土している。深鉢形土器の大破片(第51図 518)は西壁寄りの覆土下層から床面にかけて出土しているが、本跡には伴わないものと考えられる。

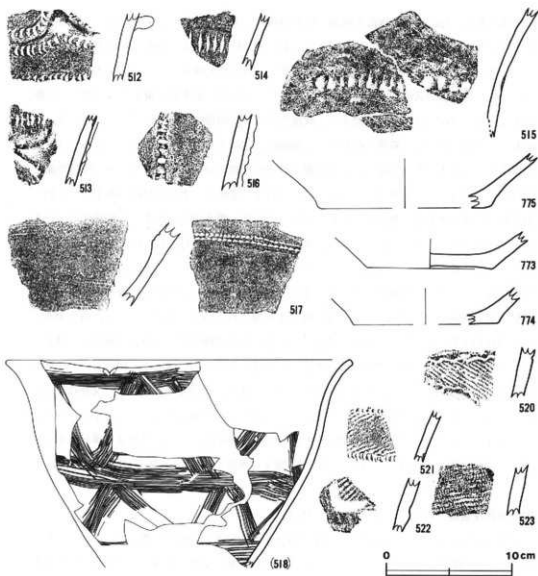
土器片の接合関係は、1例だけで、位置的には1m以上離れたものである。



第49図 20号壑穴住居跡実測図・出土土器接合関係図



第50图 20号竖穴住居出土土器拓影图(1)



第51図 20号竪穴住居跡出土土器実測図・拓影図2)

出土土器 (第50・51図 PL42)

482～485は、北東部の覆土中から出土した口縁部片である。482, 483は波状を呈し、波頂下にキザミ目を施した小突起を有し、結節沈線文が施されている。484は、隆帯によって楕円形状に区画し、区画内、隆帯上及び口唇部に結節沈線文が施されている。485は、口唇部を隆帯によって肥厚させ、口縁直下にも隆帯を貼付している。口唇部には2列の結節沈線文が施されている。486～491は、南西部から出土した口縁部片で、488が床面から出土している以外は、覆土中からの出土である。486, 487は、結節沈線文が、488は平行沈線文がそれぞれ施されている。489～491は、口唇部にキザミ目が施されている。492～496は、北東部の覆土中から出土した

口縁部である。492 は、口縁部を断面三角形の隆帯によって区画し、隆帯に沿って爪形文が施されている。493 は、波状を呈し、波頂下に小突起を貼付している。494～496は無文である。497～501 は、北半部の覆土中から出土した胴部片で、いずれも隆帯に沿って結節沈線文が施されている。494 は、爪形状のヒダが認められる。502～509 は、東半部の覆土中から出土した胴部片である。502～506 は、平行沈線文が、直線的あるいは曲線的に施されている。502 は、小突起を有している。507 は、隆帯が貼付され、曲線的に沈線文が施されている。508、509 は、北東部の覆土中から出土した胴部片で、平行沈線文や波状沈線文が施されている。508 は、断面三角形の隆帯が、蛇行しながら垂下している。510、511は、北西コーナー部付近の覆土中から出土した胴部片で、波状沈線文が施されている。512～514 は、覆土中から出土した胴部片で、いずれも爪形文が施されている。512、513 は、断面三角形の隆帯が貼付されている。515 は、覆土中から出土した2片が接合した胴部片で、ヒダ状の指頭痕が認められる。516 は、覆土中から出土した胴部片で、キザミ目が施された隆帯が垂下している。517 は、中央部の覆土中から出土した浅鉢形土器の胴部片で、内面に2列の連続刺突文が施されている。773～775 は、覆土中から出土した浅鉢形土器の底部片で、無文である。518 は、中央部西壁寄りの覆土下層から一括して出土した37片と、336号土坑の覆土中から出土した1片が接合した口縁部から胴部にかけての大破片で、推定口径は55cmである。形態は胴部から大きく開き、口縁部で外反する。文様は、半截竹筥による8～5本の平行沈線文を3段に施し、その間を平行沈線文によって三角形に区画する意匠文を表出している。520、521は、覆土中から出土した胴部片で、520は地文に單節R.Lの縄文を施し、波状沈線文で区画している。521は、地文に無節L.rの縄文を施し、爪形文で区画している。

## 21号竪穴住居跡 (旧13号) (第52図 PL19)

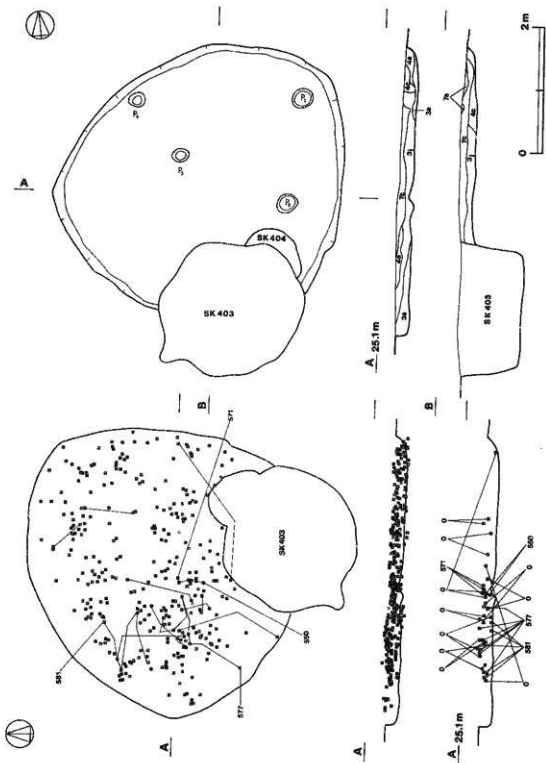
本跡は、L6a区を中心に確認され、標高24.8m程の台地平坦面に位置している。平面形は、径4.5m程の不整形を呈している。南壁部には403、404土坑が重複し、土層及び出土遺物等からいずれも本跡より新しいものとみられる。

覆土は、暗褐色土を主体とし、おおむね2層に分けられ、自然堆積の様相を呈している。床面は、ほぼ平坦で、比較的踏み固められている。

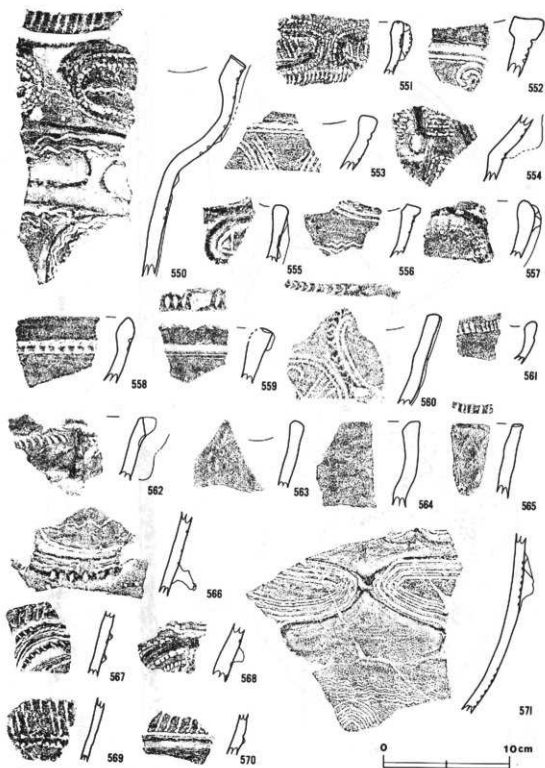
ピットは北半部から4か所確認され、いずれも径30cm、深さ17cm前後で、その配置からP1・P2・P4は主柱穴と考えられる。炉跡は、確認できなかった。

遺物は、小型有孔土器片のほか土器片459片、礫8点で、ほぼ全域にわたって出土しているが、大部分は覆土上・中層から投棄された状態で出土している。床面出土の遺物は、東壁付近に多い。

土器片の接合関係は、層位的、位置的に近接したもの間に多いが、2m以上離れたもの間や、覆土上・下層間にもみられる。



第52図 21号竪穴住居跡実測図・出土土器接合関係図



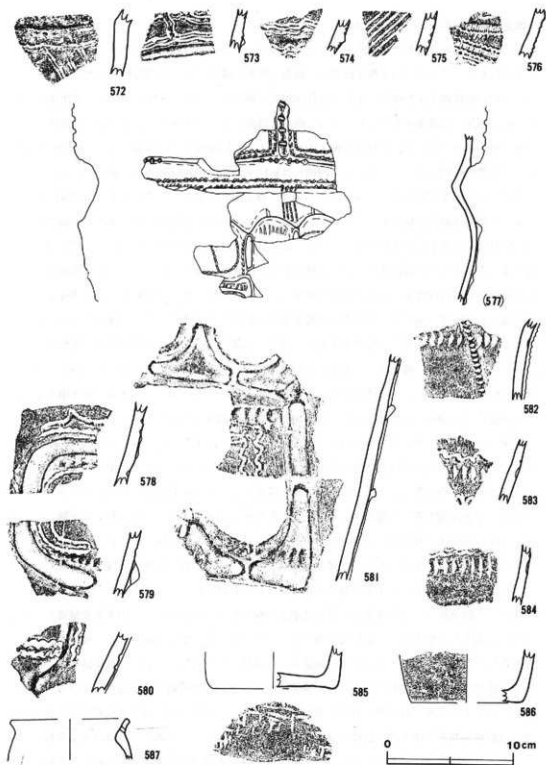
第53图 21号竖穴住居跡出土土器拓影图(1)

#### 出土土器 (第53・54図 PL43)

550 は、中央部の覆土中から出土した5片が接合した口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部は波状を呈している。口縁部文様帯は、断面三角形の隆帯によって楕円形に区画し、隆帯に沿って2列の連続刺突文と横位に1条の波状沈線文が施されている。区画の下位には波状沈線文が施され、頸部には隆帯が貼付されている。胴部も隆帯によって区画し、隆帯に沿って波状沈線文が施されている。551 は、中央部の覆土中から出土した口縁部片で、隆帯によって楕円形状に区画し、隆帯の両側に沿って1列、その内側には斜位又は縦位に連続刺突文が施されている。区画の下位には爪形文が施されている。552～556は、覆土中から出土した波状を呈する口縁部片で、いずれも結節沈線文が施されている。552 は渦巻状に、553 はV字状に結節沈線文が施されている。554 は、波頂下に小突起を有している。556 は、波状沈線文も施されている。557～559は、覆土中から出土した口縁部片で、557 は楕円形状に区画した隆帯に沿って浅い結節沈線文が、558 は肥厚させた口縁直下に幅広の結節沈線文が、559 は肥厚させた口縁直下に平行沈線文がそれぞれ施されている。560 は、北壁寄りの覆土中から出土した波状を呈する口縁部片で、波頂部から爪形状のキザミ目を施した隆帯を渦巻状に貼付し、隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。561、562 は、覆土中から出土した口縁部片で、両者共に爪形文が施されている。562 は波状を呈し、波頂下に、粘土棒を貼付した小突起を有している。563～565は、覆土中から出土した胴部片で、565の胴部にキザミ目が施されている以外は無文である。562 は、山形の波状部である。566 は、中央部の覆土中から出土した胴部片で、上部にキザミ目が施された楕円形状の突起が付され、内側に結節沈線文と波状沈線文が施されている。567 は、中央部南壁寄りの床面から出土した胴部片で、キザミ目が施された隆帯に沿って連続刺突文が施されている。

568は、中央部南西寄りの覆土中から出土した胴部片で、隆帯に沿って連続刺突文が施されている。569、570 は、覆土中から出土した胴部片で、結節沈線文が縦位に施されている。571 は、中央部の覆土中から出土した5片が接合した胴部片で、楕円形状に区画した隆帯に沿って、4条の平行沈線文、その下位に4条の波状沈線文がそれぞれ施されている。572～575は、覆土中から出土した胴部片で、波状沈線文や平行沈線文が施されている。576 は、中央部東壁寄りの覆土下層から出土した胴部片で、爪形文が施されている。577 は、中央部南西寄りの覆土中から出土した10片が接合した頸部の大破片で、頸部はくの字状にくびれている。口縁部文様帯は、断面三角形の隆帯によって長方形に区画され、隆帯に沿って2列の連続刺突文が施されている。区画の接点には、深いキザミ目が施された小突起を有している。頸部には2列の連続刺突文が施され、胴部は断面三角形や中央部を指頭によって凹ませた隆帯によって区画し、結節沈線文を施している。またヒダ状の指圧痕も認められる。578、579 は、西壁付近の覆土中から出土した胴部片で、中央部を指頭によって凹ませた隆帯で区画し、隆帯に沿って結節沈線文を施しているもので、同

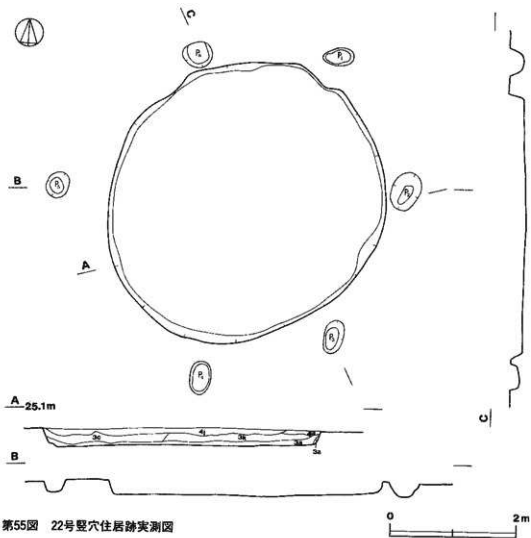




第54图 21号竖穴住居跡出土土器実測図・拓影図(2)

一個体とみられる。580 は、中央部の覆土中から出土した胴部片で、断面三角形の隆帯を蛇行させながら垂下させ、波状沈線文が施されている。581 は、西半部の覆土下層から出土した7片が接合できた胴部片で、中央部を指頭によって囲まれた長楕円形状や三角形の隆帯によって区画し、区画内に波状沈線文を施している。またヒダ状の指圧痕も認められる。582～584 は、覆土中から出土した胴部片で、いずれも爪形文が施されている。582 は、キザミ目が施された隆帯を垂下させ、583、584 は、波状沈線文が施されている。585、586 は、覆土中から出土した底部片で、585 の底面には網代痕が若干認められる。587 は、東壁付近の床面から出土した小型菱形土器で、頸部に小孔が穿たれている。

22号竪穴住居跡 (IU15号) (第55・56図 P1.20)



第55図 22号竪穴住居跡実測図

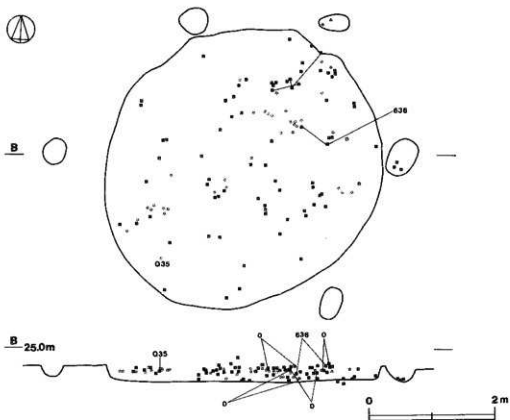
本跡は、L6b5区を中心に確認され、標高24.7m程の台地平坦面に立地している。平面形は、長径方向N-18°Eを指す楕円形を呈し、規模は長径4.65m、短径4.3mを測る。

覆土は、暗褐色土を主体とし、3層に分かれ、自然堆積の様相を呈している。床面は、ほぼ平坦で、全体的に軟らかい。

ピットは、床面上からは全く確認できなかったが、径40cm、深さ20cm前後のピットが壁外から5か所確認され、その配置から本跡に伴う柱穴と考えられる。が跡は、確認できなかった。

遺物は、縄文土器片128片、磨石1点、礫34点で、ほぼ全域にわたっているが、大部分は覆土上・中層から投棄された状態で出土している。

土器片の接合関係は少なく、層位的、位置的に近接したものが多く。

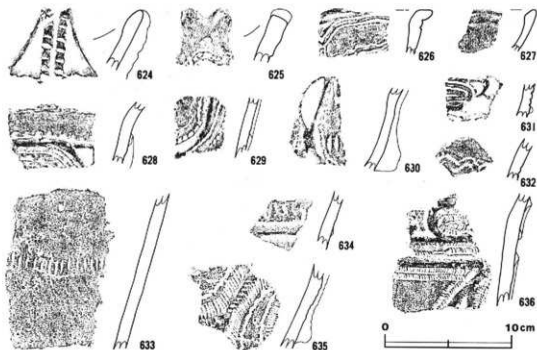


第56図 22号竪穴住居跡出土土器接合関係図

出土土器 (第57図 PL44)

624, 625は、覆土中から出土した波状口縁の波頂部で、624はキザミ目を施した2本の隆帯を垂下させ、625は結節沈線文を施している。626, 627は、覆土中から出土した口縁部片で、626は平行沈線文が施され、627は無文である。628, 629は、覆土中から出土した胴部片で、隆帯に沿っ

て連続刺突文を施している。630は、覆土中から出土した口縁部付近の破片で、断面三角形の隆帯に沿って結節沈線文を施し、横位に爪形文を施している。631、632は、中央部の覆土中から出土した胴部片で、631は楕円形に区画した隆帯に沿って平行沈線文、632は波状沈線文が施されている。633は、北壁付近の覆土中から出土した2片が接合した胴部片で、爪形文が施されている。他に同一個体とみられるものが2片認められる。634は、覆土中から出土した胴部片で断面三角形の低い隆帯が貼付され、ヒダ状の指圧痕が認められる。635は、覆土中から出土した胴部片で、キザミ目が施された隆帯に沿って、爪形文と連続刺突文が施されている。636は、中部北東寄りの覆土中から出土した2片が接合した胴部片で、断面カマボコ形の隆帯によって楕円形状や三角形状に区画され、隆帯に沿って幅状の爪形文が2列施されている。

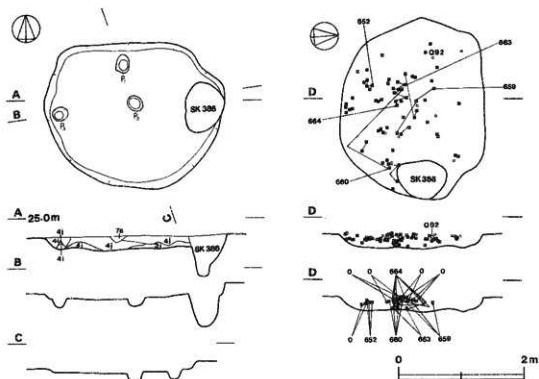


第57図 22号竪穴住居跡出土土器拓影図

#### 23号竪穴住居跡 (旧6号) (第58図 PL.20・21)

本跡は、L6区を中心に確認され、標高24.7m程の台地平坦面に立地している。平面形は、長径方向N-79°-Wを指す不整楕円形を呈し、規模は長径2.81m、短径2.4mを測る。東壁下には386号土坑が重複し、土層から本跡より新しいものであることが確認できた。

覆土は、暗褐色土を主体とし、おおむね2層に分けられ、自然堆積の様相を呈している。床面は、中央部に向かって若干低くなり、皿状を呈するほかは、平坦で、比較的踏み固められている。



第58図 23号竪穴住居跡実測図・出土土器接合関係図

ピットは、径25cm、深さ12cm前後のものが3か所確認されたが、いずれが上柱穴かは決し難い。壁は、10～17cmの高さで、ゆるやかに立ち上がる。炉跡は、確認できなかった。

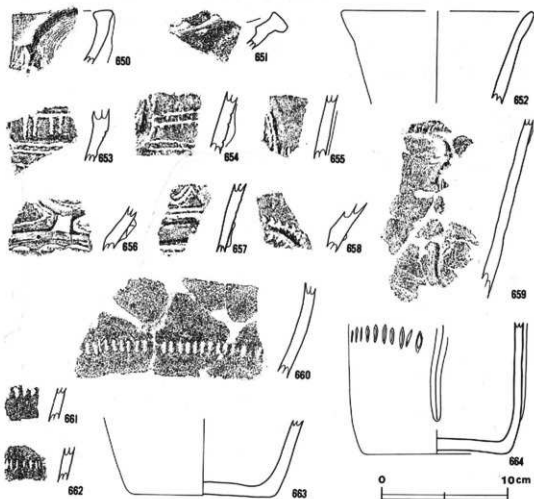
遺物は、縄文土器片 138片、石皿片 1点、礫 8点で、上に中央部から南半部にかけての覆土上・中層から投棄された状態で出土している。

土器片の接合関係は、層位的、位置的に近接したものが多いが、1m以上離れたものもある。

#### 出土土器 (第59図 PL44)

650、651は、覆土中から出土した口縁部片で、650は楕円形状に区画した隆帯に沿って細い結節沈線文が施され、651は波状を呈する浅鉢片で無文である。652は、南畷付近の覆土中から出土した4片が接合した、無文の小型深鉢形土器の口縁部片である。653～655は、覆土中から出土した胴部片で、いずれも結節沈線文が施されている。656、657は、覆土中から出土した胴部片で、656は区画した隆帯に沿って結節沈線文と波状沈線文、657は中央部を指頭によって閉ませた隆帯に沿って平行沈線文が、それぞれ施されている。658は、覆土中から出土した胴部片で、曲線的に貼付された隆帯の両側に爪形文が施されている。659は、中央部の覆土中から出土した5片が接合した胴部片で、断面三角形の隆帯を蛇行させながら垂下させている。660は、中央部の床面から出土した6片が接合した胴部片で、幅広い爪形文が施されている。661、662は、覆土中から出土

した胴部片で、爪形文が施されている。663 は、中央部の床面から出土した6片が接合した深鉢形土器の底部片で、無文である。664 は、中央部の床面及び覆土中から出土した15片が接合した深鉢形土器の底部で、垂下する4本の隆帯の間に幅広の爪形文が施されている。



第59図 23号竪穴住居跡出土土器実測図・拓影図

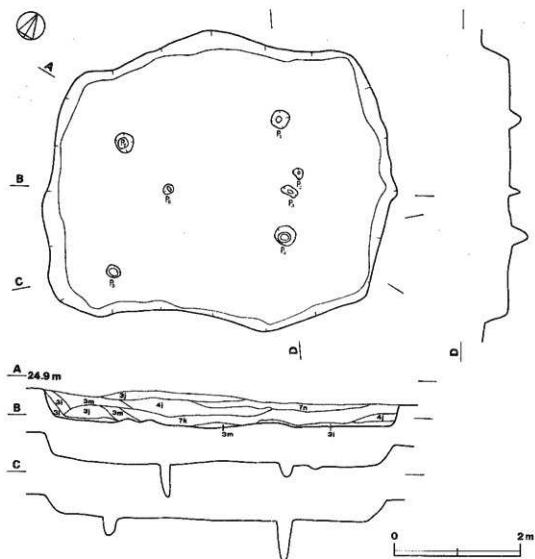
24号竪穴住居跡 (旧12号) (第60・61図 PL.21・22)

本跡は、M6c区を中心に確認され、標高24.6m程の台地先端部に近い平坦面に立地している。平面形は、長軸方向N-55-Eを指し、北西壁がやや外側に張り出し、南東壁がやや内側に入り込んだ不整隅丸長方形を呈し、規模は長軸5.55m、短軸4.6mを測る。

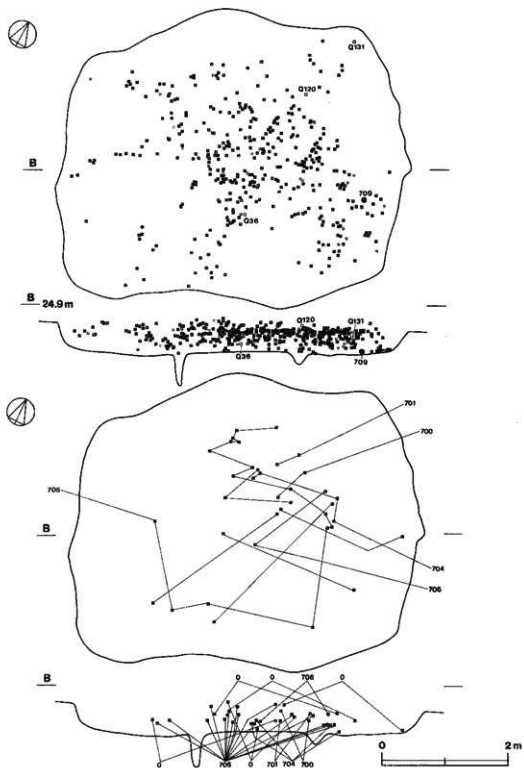
覆土は、暗褐色土を主体とし、おおむね4層に分けられる。堆積状況は、最初に南半部が堆積し、順次北半部が堆積しており、自然堆積の様相を呈している。床面は、南西壁下付近がやや高

いぼかはほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。その中で、中央部やや北東寄りの2×2mの範囲は、特に踏み固められている。

ピットは、7か所確認され、各コーナー付近に配されたP1、P4、P5、P7は、位置、規模等から主柱穴と考えられる。いずれも径25cm程であり、P1、P5、P7は深さ24~30cmであるが、P4は深さ67cmと極端に深い。他のP2、P3、P6は、径20cm、深さ14~51cmで、補助柱穴と考えられる。壁は、33~46cmの高さで、床面と明瞭な境をもたない部分もあるが、若干の傾斜をもって立ち上がる。炉跡は、確認できなかった。



第60図 24号竪穴住居跡実測図



第61图 24号竖穴住居跡出土土器接合関係図

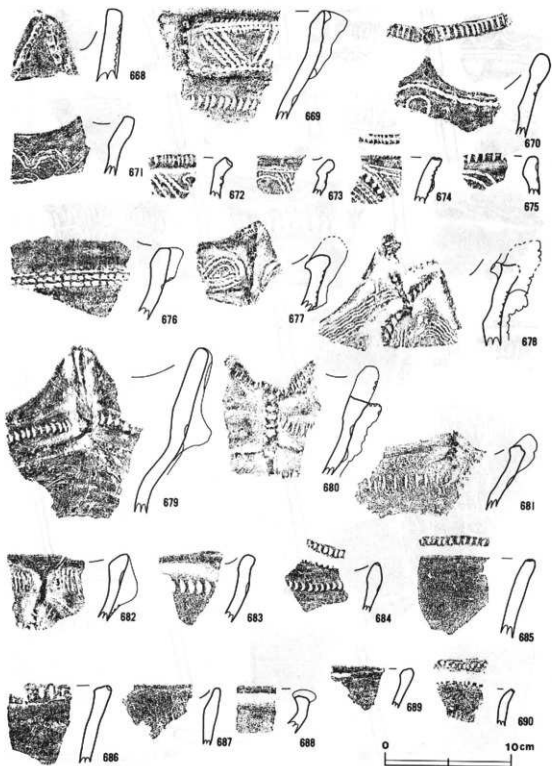


建物は、小型有孔脚付土器1点のほか縄文土器片 620片、磨石1点、石鏃1点、台石1点、チャートフレイク7点、礫22点で、大部分はほぼ中央部の覆土上層から投棄された状態で出土している。床面からの出土は少ないが、東コーナー部に近い床面から小型有孔脚付土器(709)が横転した状態で出土し、本跡に伴うものとみられる。また石鏃は北コーナー部の覆土下層から、台石は北コーナー付近の覆土上層からそれぞれ出土している。

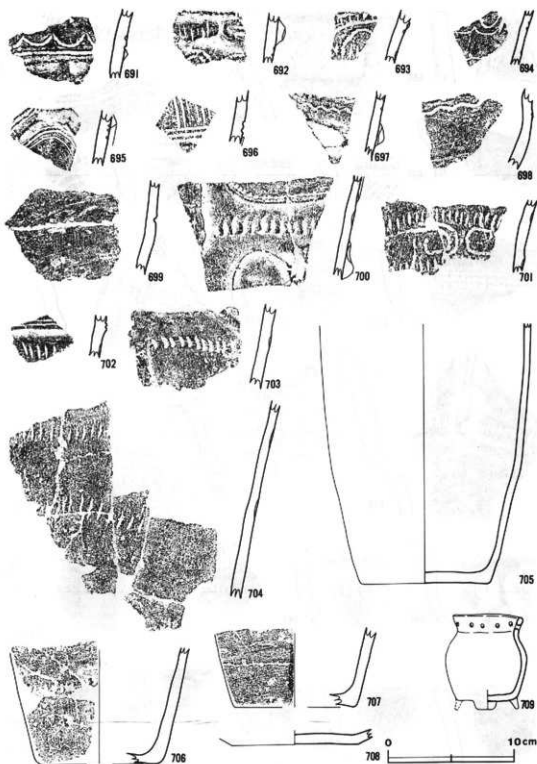
土器片の接合関係は、層位的には覆土最上層と床面間に1例認められる以外は近接したものが多く、位置的には2m以上離れたもの間にも多く認められる。

#### 出土土器 (第62・63図 PL44・45)

668 は、中央部西壁寄りの覆土中から出土した山形突起片で、半截竹管による幅広の結節沈線文が施されている。669 は、西壁付近の覆土中から出土した口縁部片で、口縁部文様帯は断面三角形の隆帯によって長方形に区画し、隆帯に沿って連続刺突文、その内側にV字状に結節沈線文が施され、区画の下位に幅広の爪形文が施されている。670 は、北西コーナー付近の覆土中から出土した波状を呈する口縁部片で、口縁に沿って連続刺突文、その下位に円形状に連続刺突文が施されている。671 は、南東コーナー付近の覆土中から出土した波状を呈する口縁部片で、2列の結節沈線文が連弧状に施されている。672～674 は、覆土中から出土した口縁部片で、いずれも結節沈線文が施されている。672、674 の口唇部には、キザミ目が施されている。675 は、南東コーナー付近の覆土中から出土した口縁部片で、平行沈線文が曲線的に、口縁にキザミ目が施されている。676 は、覆土中から出土した波状を呈する口唇部片で、肥厚させた口唇部直下に3列の連続刺突文が施されている。677 は、中央部東壁寄りの覆土中から出土した波状を呈する口唇部片で、隆帯によって区画した内側に、3条の平行沈線文が円形状に施されている。678 は、中央部東壁寄りの覆土中から出土した2片が接合した波状を呈する口縁部片で、波頂部は欠損しているものの円孔が認められる。波頂下には、キザミ目を施した隆帯がY字状に貼付され、口縁及び隆帯に沿って軽波状を呈する結節状の平行沈線文が施されている。679 は、南東コーナー付近の覆土中から出土した波状を呈する口縁部片で、隆帯によって口縁部を区画し、区画内に爪形文を施している。波頂下には山形の小突起を有している。680 は、中央部の覆土中から出土した口縁部片で、双頭状の小突起を有している。口縁部文様帯は、隆帯によって区画し、区画内に爪形文を施している。小突起から隆帯にかけてのY字状にキザミ目を施している。681は、東壁付近の覆土中から出土した口縁部片で、粘土を貼付した小突起を有し、口縁に沿って爪形文が施されている。682 は、中央部の床面から出土した口縁部片で、肥厚させた口縁に沿って爪形状で幅広の連続刺突文が施されている。683、684 は、東壁付近の覆土中から出土した波状を呈する口縁部片で、口縁に沿って爪形文が施されている。684 は、口唇部にキザミ目が施されている。685～689は、覆土中から出土した口唇部片で、685、686 の口唇部にキザミ目が施されている以外



第62图 24号竖穴住居出土土器拓影图(1)



第63图 24号竖穴住居跡出土土器実測図・拓影図(2)

は無文である。690 は、中央部の覆土下層から出土した小型土器の口縁部片で、口唇部にキザミ目、口縁下に細い爪形状の連続刺突文が施されている。691 は、中央部の覆土中から出土した胴部片で、断面三角形の隆帯に沿って連弧状と直線的に結節沈線文が施されている。692、693 は東壁付近の覆土中から出土した胴部片で、キザミ目が施された隆帯に沿って半截竹管による連続刺突文が施されている。694 は、西壁付近の覆土中から出土した胴部片で、結節沈線文が連弧状に施されている。695～698 は、中央部の覆土中から出土した胴部片で、平行沈線文や波状沈線文が施されている。699 は、中央部東壁寄りの覆土中から出土した胴部片で、半截竹管による1列の結節沈線文が施されている。700 は、中央部北壁寄りの覆土中から出土した2片が接合した胴部片で、断面三角形の隆帯によって楕円形状に区画し、隆帯に沿って1列の連続刺突文が施されている。また、ヒダ状の指痕が認められる。701 は、中央部北壁寄りの覆土中から出土した2片が接合した胴部片で、横位の爪形文の間に結節沈線文が渦巻状に施されている。702、703 は、中央部の覆土中層から出土した胴部片で、いずれも爪形文が施されている。704 は、中央部の覆土下層から出土した9片が接合した胴部片で、2段に爪形文が施されている。同一個体とみられる破片が、他に3片認められる。705 は、中央部の覆土中から出土した22片が接合した胴部から底部にかけての大破片で、無文の深鉢形土器である。706、707 は、中央部の覆土中から出土した無文の底部片である。708 は、中央部の覆土中から出土した浅鉢形土器の底部で、無文である。709 は、東壁直下の床面から出土した小型有孔脚付土器である。法量は、口径5.6cm、器高7.6cm、底径5cmで、形態は底部から若干開きながら立ち上がり、頸部でくびれ、口縁部はやや外反する。口縁下に径3mm程の小孔が13孔穿たれ、底部には四方に高さ7mm程の脚が貼付されているが、三方は欠損している。外面にベンガラ痕跡が一部認められる。

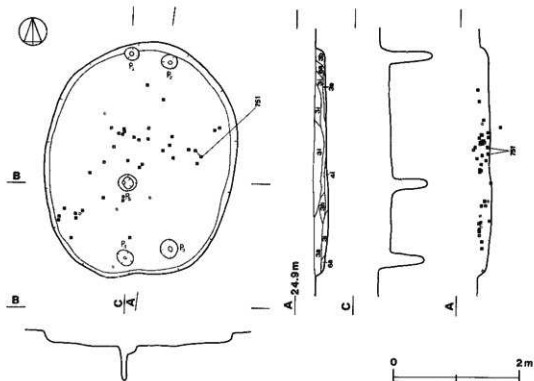
#### 26号竪穴住居跡(旧9号) (第64図 PL23)

本跡は、M5a区を中心に確認され、標高24.7m程の台地先端部に近い平坦面に位置している。平面形は、長径方向N-3°Eを指す楕円形を呈し、規模は長径3.75m、短径3.06mを測る。

覆土は褐色土を主体とし、おおむね2層に分けられ、自然堆積の様相を呈している。床面は、中央部が若干低くなる他は平坦で、中央部は十分踏み固められているが、外周部は軟らかい。

ピットは、北壁下及び南壁下から2か所ずつとほぼ中央部から1か所の計5か所が確認できた。壁下のP1、P2、P3、P4は、径25cm、深さ52～70cmで、ピット間は約40cmである。中央部のP5は、径30cm、深さ55cmである。これらは、いずれも主柱穴と考えられる。壁は、15～20cmの高さで、わずかに傾斜をもって立ち上がる。カ跡は、確認できなかった。

遺物は、縄文土器片46片、黒曜石フレイク1点、礫2点で、大部分は中央部の覆土上・中層から出土しているが、若干床面からの出土もみられる。

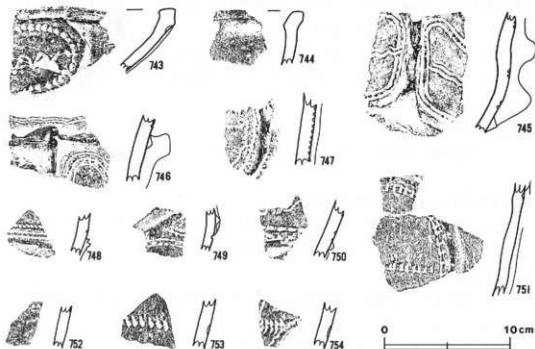


第64図 26号竪穴住居跡実測図・出土土器接合関係図

土器片の接合関係は1例で、層位的、位置的に近接したものである。

#### 出土遺物 (第65図 PL45)

743, 744 は、南西壁付近の床面から出土した口縁部片で、743 は楕円形に区画した隆帯に沿って連続刺突文、内側に波状沈線文が施され、744 は無文である。745 は、中央部の覆土中から出土した口縁部付近の破片で、楕円形状に区画した断面三角形の隆帯に沿って半截竹管による結節沈線文、その内側に2列の波状沈線文が横位に施されている。746 は、中央部東壁寄りの床面から出土した口縁部付近の破片で、断面三角形の隆帯に沿って結節沈線文や平行沈線文が施されている。747 は、中央部の覆土下層から出土した胴部片で、隆帯に沿ってへら状工具による2列の連続刺突文が施されている。748~750は、覆土中から出土した胴部片で、隆帯に沿って結節沈線文が施されている。751 は、中央部東壁寄りの床面から出土した2片が接合した胴部片で、楕円形状に区画した隆帯に沿ってと横位に幅広の結節沈線文が施されている。752 は、南壁寄りの床面から出土した胴部片で、半截竹管による連続刺突文が施されている。753は、西壁直下の床面から出土した胴部片で、爪形文が施されている。754 は、北壁寄りの覆土中から出土した胴部片で、結節沈線文と爪形文が施されている。



第65図 26号竪穴住居跡出土土器拓影図

## 2. 土坑

土坑は、全体で 449基を確認したが、縄文時代に伴うと判断でき得るものは 169基である。これらの土坑は、調査区のほぼ全域にわたって分布しているが、特に、調査区北側のE6・E7区、南側のL5・L6・M6区の2か所に集中して存在している。時期的には、縄文時代中期の阿玉台式期のものが大部分であるとみられるが、早期・前期・阿玉台式期以外の中期及び後期の土器が出土している土坑も若干認められる。土坑の多くは、差し渡し1m内外の円形又は楕円形を呈し、断面形が深さ50cm未満の皿状を呈するものであることから、特徴的なもののみについて形状等を記述し、他は一覧表にゆずる。

### 112号土坑 (旧67号土坑) (第86図 PL24)

本跡は、E7a区から確認され、西側1.5mには113号土坑、北西1.5mには114号土坑が位置している。平面形は、長径方向N-16°Eを指す不整楕円形を呈し、規模は、長径1.16m、短径0.8m、深さ0.34mである。

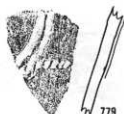
覆土は、暗褐色土で、上層にはロームブロックを含み、大半は自然堆積の様相を呈しているが、

人為的堆積とみられる部分もある。底面は、若干西側へ向って低くなるほかは平坦で、壁は、70度内外の傾斜をもって立ち上がる。

遺物は、北壁寄りの覆土上層から阿玉台式土器片6片、北壁下の底面付近から人間の大白歯、小白歯各二本が出土している。墓塚と考えられる。

**出土土器 (第66図)**

779は、隆帯を蛇行させながら垂下させ、爪形文が施されている。



第66図 112号土坑  
出土土器拓影図

**207号土坑 (旧32号土坑) (第88図 PL24)**

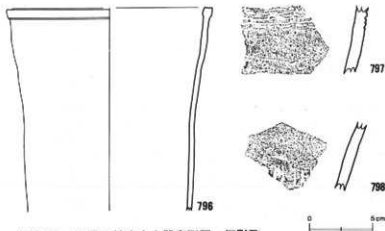
本跡は、E7g3区から確認され、東側3mには208号土坑、北西2.5mには206号土坑が位置している。平面形は、長径方向N-58°-Eを指す不整楕円形を呈し、規模は、長径1.62m、短径1.42m、深さ0.22mである。

覆土は、褐色土で、自然堆積の様相を呈している。底面は皿状を呈し、壁は底面から明瞭な境をなさずに、ゆるやかに立ち上がる。

遺物は、中央部底面から阿玉台式の深鉢形土器が押しつぶされた状態で出土している。

**出土土器 (第67図)**

796は、底面から一括して出土した25片が接合したもので、口縁部から胴部にかけての大破片である。口唇部を隆帯によって肥厚させただけで、無文である。797・798は、覆土中から出土した胴部片で、797は平行沈線文、798は爪形文が施されている。



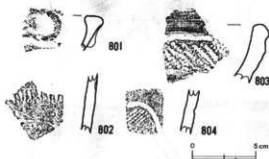
第67図 207号土坑出土土器実測図・拓影図

**210号土坑 (旧6号土坑) (第89図)**

本跡は、E7g4区を中心に確認され、南側0.5mには208・209号土坑、北側約3mには4号竪穴住居跡が位置している。平面形は、長径方向N-79°-Wを指す楕円形を呈し、規模は、長径2.57m、短径1.87m、深さ0.72mである。

覆土は、褐色土を主体とし、若干ロームブロックを含み、自然堆積の様相を呈している。底面は皿状を呈し、壁は床面からゆるやかに立ち上がり、断面は摺鉢形を呈している。

遺物は、覆土中・下層から阿玉台式土器片5点、覆土上層から加曾利E式土器片7点、黒曜石フレイク4点が出土している。



第68図 210号土坑出土土器拓影図

#### 出土土器 (第68図)

801～804は、覆土中から出土したもので、801、803は口縁部片、802、804は胴部片である。801は口縁部を隆帯によって楕円形状に区画し、802は爪形文を施している。803は、単筋RLの縄文を施し、隆帯と沈線によって区画している。804は、沈線によって区画し、区画内にLRの縄文を施している。

#### 235号土坑 (旧40-A号土坑) (第90図 PL24)

本跡は、F7e5区から確認され、北東方8.5mには6号竪穴住居跡、南東方7.5mには237号土坑が、それぞれ位置している。本跡は西側で234号土坑と重複し、土層観察から本跡が新しいものである。平面形は、長径方向N-22°-Wを指す楕円形を呈し、規模は、長径2.39m、短径0.8m、深さ0.58mである。

覆土は、褐色土を主体とし、下層にはロームブロックを含み、人為的堆積の様相を呈している。底面は皿状を呈し、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、断面は摺鉢形を呈している。

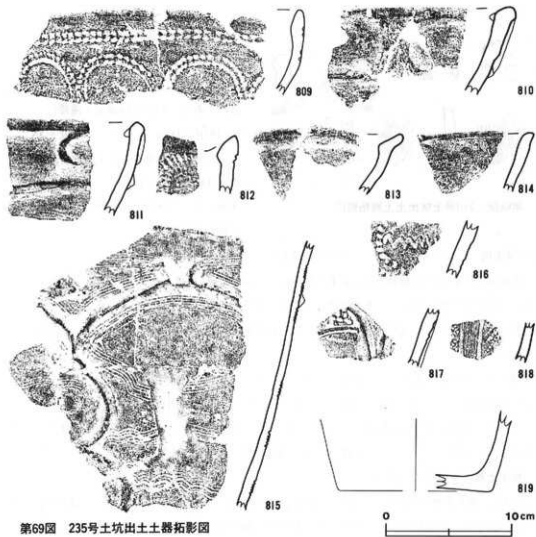
遺物は、覆土上層から下層までにわたり阿玉台式土器片169片、加曾利E式土器片1片、土製円板1点、黒曜石フレイク2点、礫5点が、投棄された状態で出土している。

#### 出土土器 (第69図 PL46)

809は、覆土下層から出土した5片が接合した口縁部片で、口縁に沿って横位に、及びその下位に連続山形状に半截竹管による2列の連続刺突文が施されている。810は、覆土上層から出土した4片が接合した口縁部片で、口縁部を隆帯によって楕円形に区画している。811、812は、覆土中から出土した口縁部片で、811は口縁部を断面三角形の隆帯によって区画し、区画内に曲線的に隆帯を貼付している。812は、口縁部を区画した隆帯に沿って幅広の連続刺突文を施している。813、814は、覆土上層から出土した口縁部片で、無文である。815は、覆土中から出土した10片と236号土坑から出土した1片が接合した胴部片で、他に同一個体片が7片認められる。文様は、断面三角形の隆帯によって区画し、隆帯に沿って5本の平行沈線文や波状沈線文を施している。816～818は、覆土上層から出土した胴部片で、816は楕円形状に施された連続刺突文の中



に1列の波状沈線文が施されている。817は、隆帯によって区画した内側に、連続刺突文、平行沈線文が施されている。818は、地文にR Lの縄文を施し、2本の沈線によって区画した磨消帯を垂下させている。819は、覆土中から出土した底部片で、底部に網代痕が若干認められる。



第69図 235号土坑出土土器拓影図

236号土坑 (IH40-B号土坑) (第90図 PL24)

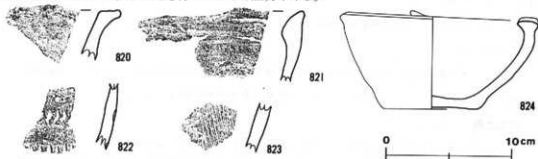
本跡は、F7c区から確認され、前述した235号土坑と東側で重複している。土層観察から本跡が古いものである。平面形は、長径方向N-9°-Eを指す楕円形を呈し、規模は、長径1.24m、短径0.90m、深さ0.6mである。

覆土は、褐色土を主体とし、大部分の層に炭化粒子を含み、自然堆積の様相を呈している。底面は、南側が一段深くなり、段状をなしている。壁は、若干の傾斜をもって外上方へ立ち上がる。

遺物は、覆土全般にわたり、阿玉台土器片72片、土製円板1点、罐1点が、投棄された状態で出土している。

**出土土器** (第70図)

820, 821は、覆土上層から出土した口縁部片で、両者共に無文である。822, 823は、覆土上層から出土した胴部片で、822は爪形文、823は無節Lrの縄文が施されている。824は、覆土上層から出土した9片が接合した小型鉢で、約3分の1が遺存しているだけであるが、口縁部から底部まで認められる。口径14.9cm、器高7cm、底径7.5cmで、底部から内満しながら立ち上がり、口縁部を水平に肥厚させ、小突起を付しただけで無文である。



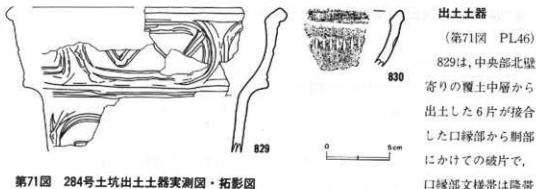
第70図 236号土坑出土土器実測図・拓影図

**284号土坑** (旧446号土坑) (第90図 PL24)

本跡は、I5区を中心と確認され、北西側2.5mには13号竪穴住居跡、南側1.5mには285号土坑が位置している。平面形は、長径方向N-35°-Wを指す楕円形を呈し、規模は、長径2.18m、短径1.33m、深さ0.22mである。

覆土は、褐色土でロームブロックを含むが、自然堆積の様相を呈している。底面は平坦で、北西壁下に径23cm、深さ57cmのピットが存在する。壁は、傾斜をもって外上方へ立ち上がる。

遺物は、中央部やや北寄り、ピットの南東側の覆土上層から床面にかけて、阿玉台式土器片19片が出土している。



第71図 284号土坑出土土器実測図・拓影図

**出土土器**

(第71図 PL46)

829は、中央部北壁寄りの覆土中層から出土した6片が接合した口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部文様帯は隆帯

によって楕円形に区画し、隆帯に沿って半截竹管による2列の平行沈線文、その内側に横位の波状沈線文を施している。頸部にも平行沈線文を施し、胴部は隆帯によって区画し、隆帯に沿って平行沈線文を施している。830は、覆土中から出土した口縁部片で、幅広い爪形文が施されている。

#### 285号土坑 (旧453号土坑) (第90図)

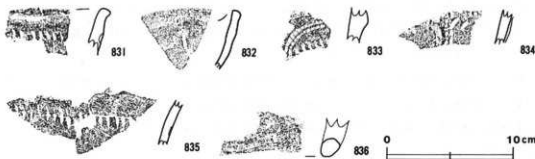
本跡は、I5<sub>18</sub>区から確認され、南側3.5mには14号竪穴住居跡、北側1.5mには284号土坑が位置している。平面形は、長径方向N-61°-Wを指す楕円形を呈し、規模は、長径1.7m、短径1.45m、深さ0.29mである。

覆土は、褐色土で、自然堆積の様相を呈している。底面は、ほぼ平坦で、壁は若干の傾斜をもって立ち上がる。

遺物は、東壁寄り及び西壁付近の覆土中・下層から阿玉台式土器片45片、北東壁下の底面から石鏃1点が出土している。土器片は、すべて投棄された状態で出土している。

#### 出土土器 (第72図)

831、832は、覆土中から出土した口縁部片で、831は爪形文が施されており、832は無文である。833、834は、覆土中から出土した胴部片で、隆帯に沿って結節沈線文が施されている。835は、覆土中から出土した5片が接合した胴部片で、爪形文が施されている。836は、覆土中から出土した器台片で、透し孔がみられる。



第72図 285号土坑出土土器拓影図

#### 306号土坑 (旧351号土坑) (第91図)

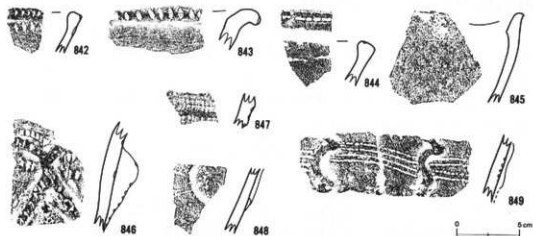
本跡は、K5<sub>19</sub>区を中心に確認され、西側5.5mには305号土坑、南東側8.5mには307号土坑が位置している。平面形は、長径方向N-15°-Eを指す楕円形を呈し、規模は、長径1.36m、短径1.1m、深さ0.71mである。

覆土は、褐色土を主体とし、上層には焼土ブロックが投棄された状態で認められる外、各層ともに炭化粒子を含み、上層を除いては自然堆積の様相を呈している。

遺物は、中央部の覆土上層から底面にわたって出土しているが、大部分は上層からであり、阿玉台式土器片53片、礫2点が投棄された状態で出土している。

#### 出土土器 (第73図)

842～844は、覆土上層から出土した口縁部片で、842には爪形文、843は口唇部にキザミ目、844は口唇部に1列の結節沈線文がそれぞれ施されている。845は、覆土下層から出土した無文の口縁部片である。846～848は、覆土上層から出土した胴部片で、846はX字状の隆帯に沿って結節沈線文と爪形文、847は中央を凹ませ隆帯の上部に爪形文を施している。848は、隆帯が貼付されている。849は、覆土中層から出土した2片が接合した胴部片で、断面カマボコ形の隆帯を蛇行させながら垂下させ、半截竹管による4列の結節沈線文を横位に施している。



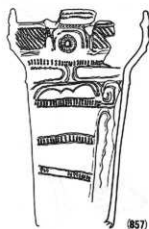
第73図 306号土坑出土土器拓影図

#### 314号土坑 (旧358号土坑) (第92図)

本跡は、K6b6区から確認され、北東側5.5mには315号土坑、南西側15mには313号土坑が位置している。平面形は、長径方向N-21°-Wを指す楕円形を呈し、規模は、長径1.36m、短径1.05m、深さ0.15mである。

覆土は、褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。底面は皿状を呈し、壁との境は明瞭でなく、断面形は皿状を呈している。

遺物は、中央部の底面から覆土中にかけて、半完形の深鉢形土器(第74図-857)のほか阿玉台式土器片45片が、投棄された状態で出土している。



第74図 314号土坑出土土器実測図

出土土器 (第74図 PL.46)

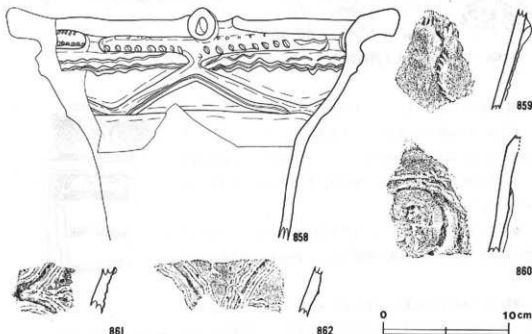
857 は、一括して出土した23片が接合した深鉢形土器で、口縁部から胴部下半にかけての約3分の1が遺存している。口縁部には結節沈線文が施された屈状把手を有し、口縁部文様帯は、隆帯によって長方形に区画し、隆帯沿い及び斜位に結節沈線文を施している。把手の下位には、口状に2列の結節沈線文を施し、内側にキザミ目を施した環状の粘土帯を貼付している。頸部には爪形文を施し、その下位に楕円形状に結節沈線文を施している。胴部は、断面三角形の隆帯を蕨手状及び蛇行させながら垂下させ、半截竹管による爪形状の連続刺突文を内側に施した2列の結節沈線文による区画が、横位に3段施されている。

315号土坑 (旧365号土坑) (第92図 PL.25)

本跡は、K6a区を中心に確認され、南西側5mには314号土坑、南東側12mには316号土坑が位置している。平面形は、長径方向N-37°-Eを指す楕円形を呈し、規模は、長径0.83m、短径0.7m、深さ0.22mである。

覆土は、暗褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。底面は皿状を呈し、壁は底面と明瞭な境をなさずに、ゆるやかに立ち上がる。

遺物は、中央部やや北壁寄りの覆土中層から深鉢形土器の胴部上半一括土器(第75図-858)を含む阿玉台式土器片61片が、投棄された状態で出土している。



第75図 315号出土土器実測図・拓影図

### 出土土器 (第75図 PL46)

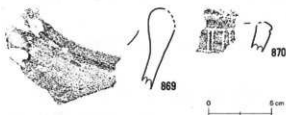
858 は、覆土中層から一括して出土した19片が接合したもので、口縁部から胴部上半にかけての大破片で、口径は27cmである。口縁には四単位の小突起を有し、口縁部文様帯は、口縁直下に半截竹管による連続刺突文を施し、その下位に断面三角形の隆帯によって逆三角形の区画を設け、横位に波状沈線文を施している。区画の下位には、隆帯に沿って平行沈線文が施されている。胴部には波状沈線文がハの字状に施されている。859, 860は、覆土中から出土した胴部片で、859はキザミ目を施した隆帯を蛇行させながら垂下させ、860は隆帯を渦巻状に貼付し、外側に波状沈線文を施している。861, 862は、覆土中層から出土した同一個体とみられる胴部片で、隆帯に沿って平行沈線文や波状沈線文が施されている。

### 343号土坑 (旧221号土坑) (第94図 PL25)

本跡は、L5b<sub>1</sub>区から確認され、北側2mには17号竪穴住居跡、北東側3mには340号土坑が位置している。17号竪穴住居跡の項でも記述したが、本跡と340～342号土坑の4基の土坑は、17号竪穴住居跡を囲むように存在する阿玉台式期の土坑であり、17号竪穴住居跡と密接な関係があったものとみられる。平面形は、長径方向N-41°-Wを指す楕円形を呈し、規模は、長径1.85m、短径1.6m、深さ0.57mである。

覆土は、ロームブロックを少量含む褐色土で、自然堆積の様相を呈している。底面は平坦であるが、壁との境は明瞭でなく、壁は若干の傾斜をもって立ち上がる。

遺物は、覆土上・中層から阿玉台式土器片5片が流れ込んだ状態で出土している。



### 出土土器 (第76図)

869 は、覆土上層から出土した波状を呈する口縁部片で、無文である。870 は、覆土中層から出土した口縁部片で、半截竹管による結節沈線文が施されている。

第76図 343号土坑出土土器拓影図

### 353号土坑 (旧262号土坑) (第94図 PL25)

本跡は、M5b<sub>2</sub>区を中心に確認され、南東側6.5mには26号竪穴住居跡が位置している。平面形は、長径方向N-71°-Wを指す楕円形を呈し、規模は、長径2.12m、短径1.73m、深さ0.78mである。

覆土は、暗褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。底面は、長径1.0m、短径0.6

mと、上端と比して小さく、南東側がやや低くなる。壁は、底面から若干の傾斜をもって立ち上がり、中位で大きく屈曲し、わずかに平坦部を形成した後、ゆるやかに立ち上がる。

遺物は、覆土上・下層から茅山式土器片5片が流れ込んだ状態で出土している。

#### 出土土器 (第77図)

872~875は、覆土中から出土した胴部片で、872は表裏共に粗い条痕文、873~875は、外面が細く、内面が粗い条痕文が施されている。いずれも胎土に繊維が含まれている。



第77図 353号土坑出土土器拓影図

#### 365号土坑 (旧248号土坑) (第95図 PL26)

本跡は、L5e9区から確認され、西側2mには364号土坑、南側2.5mには366号土坑、東側3mには372号土坑がそれぞれ位置している。平面形は、長径方向N-0°を指す楕円形を呈し、規模は、長径1.17m、短径0.98m、深さ0.71mである。

覆土は、暗褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。底面は皿状を呈し、壁は底部と明瞭な境をなさずに、ほぼ垂直に立ち上がる。

遺物は、北半部の覆土下層から阿玉台式土器片37片、礫1点が流れ込んだ状態で出土している。

#### 出土土器 (第78図)

876~878は、覆土下層から出土した胴部片で、877は2片が接合している。876は、楕円形状に区画された陸帯沿いと横位に結節沈線文が施されている。877は、横位に貼付された断面三角形の陸帯に沿って、3本の平行沈線文が施されている。878は、爪形文が施されている。



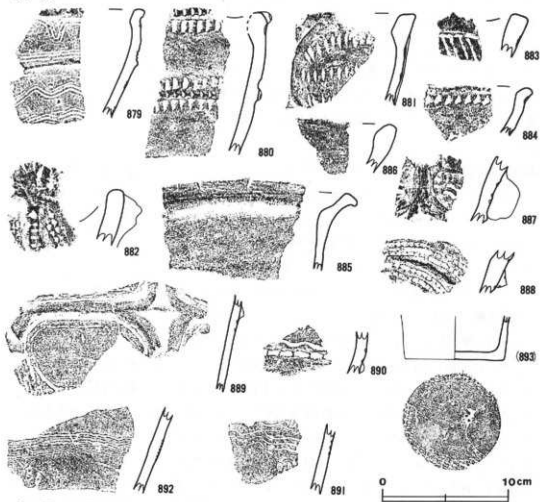
第78図 365号土坑出土土器拓影図

366号土坑 (旧250号土坑) (第96図 PL26)

本跡は、L519区から確認され、北側2.5mには365号土坑、南側2.5mには367号土坑が位置している。平面形は、枡円形状を呈しているが、南壁上位は若干掘り過ぎているため、本来は円形を呈し、規模は径1.4m、深さ0.75mとみられる。

覆土は、暗褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。底面は平坦で、壁は底部と明確な境をなさずに、軽くオーバーハングしながら立ち上がり、上位で軽く外側へ開く。いわゆる袋状の形態をしている。

遺物は、全面かつ覆土上層から下層にわたって、前期後半の土器片3片、阿玉台式土器片278片、礫5点が、投棄された状態で出土している。これらの土器片は、ほとんどが接合できず、小破片である。このうち、前期後半の3片は、10.5m離れた20号竪穴住居跡から出土した土器と接合している。



第79図 366号土坑出土土器拓影図



#### 出土土器 (第79図 PL46)

879 は、覆土上層から出土した2片が接合した口縁部片で、口縁部を区画した隆帯に沿って平行沈線文を施し、頸部には3列の波状沈線文を2段に施している。880 は、覆土下層から出土した2片が接合した口縁部片で、口縁部を区画する隆帯に沿って爪形文が施されている。881 は、覆土下層から出土した口縁部片で、楕円形状に区画した隆帯に沿って爪形文が施されている。882 は、覆土中層から出土した口縁の波頂部片で、波頂部からキザミ目を施した隆帯を垂下させ、口縁に沿って2列の連続刺突文を施している。883 は、覆土中層から出土した波状を呈する口縁部片で、結節沈線文が施されている。884 は、覆土中層から出土した口縁部片で、爪形文が施されている。885、886 は、覆土上層から出土した無文の口縁部片である。887、888 は、覆土中層から出土した胴部片で、887 は楕円形状に区画した隆帯に沿って連続刺突文が施され、区画の接点には山形の小突起を有している。888 は、曲線的に貼付した隆帯に沿って、2列の結節沈線文が施されている。889 は、覆土上層から出土した5片が接合した胴部片で、隆帯によって横位に区画し、さらに楕円形状に区画した隆帯に沿って2列の結節沈線文を施している。890 は、覆土中層から出土した胴部片で、横位の隆帯に沿って結節沈線文と波状沈線文が施されている。891、892 は、覆土上層から出土した胴部片で、両者共に波状沈線文が施されている。893 は、覆土下層及び上層から出土した7片が接合した底部片で、底部に網代痕がみられる。

#### 367号土坑 (H1263号土坑) (第95図 PL26)

本跡は、I.5区から確認され、北側2.5mには366号土坑、南側0.3mには369～371号土坑が位置している。平面形は、円形を呈し、規模は、径1.65m、深さ0.14mである。

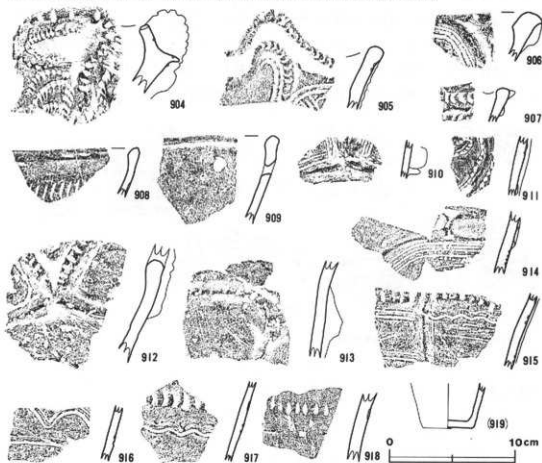
覆土は、褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。底面は平坦で、中央部に径30cm、深さ56cmのピットが存在する。壁は、若干の傾斜をもって立ち上がる。

遺物は、北半部の覆土から阿玉台式土器片248片、礫4点が、投棄された状態で出土している。

#### 出土土器 (第80図 PL46)

904 は、覆土上層から出土した扇状把手片で、S字状に貼付されたキザミ目を施した隆帯によって彫られ、頂部が耳状を呈している。口縁及び隆帯に沿って爪形状の連続刺突文が施されている。905 は、覆土中から出土した波状を呈する口縁部片で、波頂部から連続刺突文を施した隆帯を渦巻状に貼付し、隆帯に沿って結節沈線文を施している。906～909 は、覆土上層から出土した口縁部片で、906 は隆帯に沿って結節沈線文、907、908 は爪形文が施され、909 は無文で、口縁下に小孔が穿たれている。910、911 は、覆土上層から出土した胴部片で、隆帯に沿って結節沈線文が施されている。912 は、覆土中から出土した3片が接合した口縁付近の破片で、区画した隆帯に沿って結節沈線文が施されている。913 は、覆土中から出土した胴部片で、上部にキ

ザミ目を施した隆帯で区画している。914, 915は、両者共に覆土中から出土した2片が接合した胴部片で、914は曲線的に貼付された隆帯に沿って3本の平行沈線文が、915は、断面三角形の隆帯を垂下させ、横位に平行沈線文、波状沈線文が施されている。916～918は、覆土中から出土した胴部片で、916は波状沈線文と平行沈線文、917は爪形文と波状沈線文、918は爪形文がそれぞれ施されている。919は、覆土中から出土した無文の底部片である。



第80図 367号土坑出土土器拓影図

369号土坑 (旧252号土坑) (第95図 PL37)

本跡は、L5<sub>ss</sub>区から確認され、北側0.3mには367号土坑、西側1mには368号土坑が位置している。また、東壁部では370, 371号土坑と重複し、土層観察から本跡は、370号土坑より新しく、371号土坑より古い。平面形は、南東壁が371号土坑によって失われているものの、円形を呈し、規模は、径1.3m内外、深さ0.7mである。

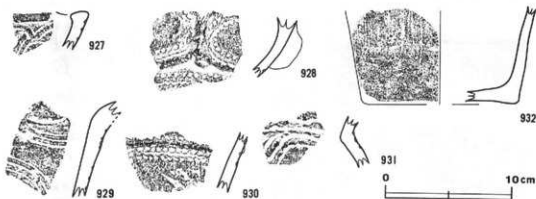
覆土は、褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。底面は平坦で、壁は若干の傾斜を

もって立ち上がる。

遺物は、全域の覆土上層から下層にわたって阿玉台式土器片63片、黒曜石フレイク1点が、投棄された状態で出土している。

#### 出土土器 (第81図)

927は、底面から出土した口縁部片で、半截竹管による2列の結節沈線文が施されている。928は、底面から出土した口縁付近の破片で、楕円形状に区画した隆帯に沿って、半截竹管による2列の連続刺突文が施されている。929～931は、覆土下層から出土した胴部片で、929は曲線的な平行沈線文、930は横位の隆帯に沿って2列の連続刺突文、931は結節沈線文が、それぞれ施されている。932は、覆土上層から出土した底部片で、底部外周に網代痕がみられる。



第81図 369号土坑出土土器拓影図

#### 403号土坑 (旧379号土坑) (第97図 PL27)

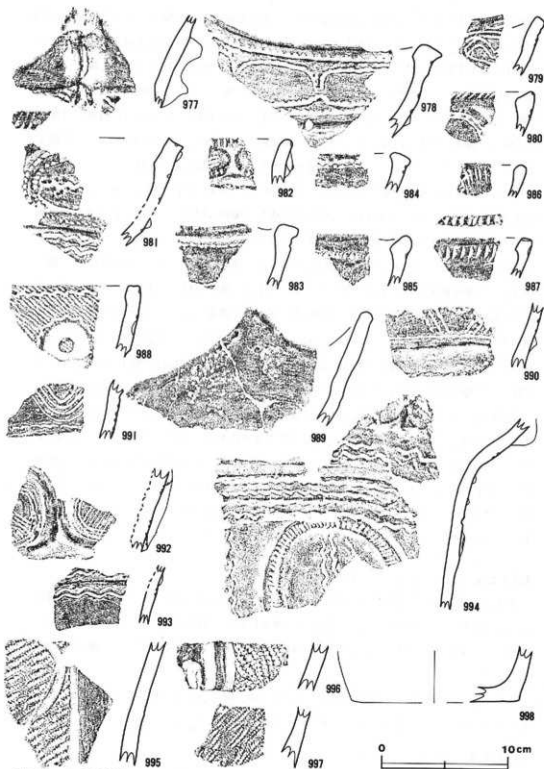
本跡は、L6a区を中心に確認され、北側で21号竪穴住居跡および404号土坑と重複している。土層観察から、本跡は、21号竪穴住居跡より新しいが、404号土坑との関係は明らかでない。平面形は、ほぼ円形を呈し、規模は、径2.30m内外、深さ0.95mである。

覆土は、褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。底面は、ほぼ平坦で、壁は若干の傾斜をもって立ち上がる。南西部には、幅40cmで25cm外側へ張り出した段状の施設が存在する。

遺物は、中央部の覆土上層から下層にかけて、阿玉台式土器片を主体として勝版式土器片、堀之内式土器片が268片、チャートフレイク2点、礫6点が、投棄された状態で出土している。

#### 出土土器 (第82図 PL46)

977、978は、覆土上層から出土した波状を呈する口縁部片で、977は山形の波頂下に粘土棒を心にした断面がC字状を呈する突起が貼付されている。978は、口縁部を隆帯によって区画し、隆帯に沿って1列の連続刺突文、その内側にも連弧状に連続刺突文が施されている。979は、覆



第82图 403号土坑出土土器拓影图

土中層から出土した波状を呈する口縁部片で、2列の結節沈線文が施されている。980は、覆土上層から出土した口縁部片で、隆帯に沿って半截竹管による2列の結節沈線文が施されている。981は、覆土中層から出土した3片が接合した口縁部片で、楕円形状に区画した隆帯に沿って2列の連続刺突文、その内側に1本の波状沈線文を横位に施している。区画の下位にも波状沈線文が施されている。982～986は、覆土中層から出土した口縁部片で、982は口縁部を隆帯によって区画し、983、984は口縁に沿って2列の連続刺突文、985、986は口縁に沿って爪形文が、それぞれ施されている。987は、覆土上層から出土した口縁部片で、口縁に沿って爪形文が施されている。988は、覆土中層から出土した口縁部片で、地文にR1の縄文を施し、口縁に沿って結節沈線文を波状に施し、口縁下には中央部を残して環状に凹まし、外周に結節沈線文を施している。989は、覆土上層から出土した4片が接合した、波状を呈する口縁部片で、無文である。990は、覆土中層から出土した口縁部付近の破片で、隆帯に沿って1列の連続刺突文を施し、その内側にも連続刺突文をV字状に施している。991は、覆土上層から出土した胴部片で、波状沈線文を横位に施している。992は、楕円形状に区画した隆帯に沿って4本の平行沈線文、その内側に平行沈線文を斜位に施している。993は、横位の隆帯に沿って半截竹管による波状沈線文が施されている。994は、覆土上層から出土した1片と21号竪穴住居跡の覆土中から出土した5片が接合した頭部付近の破片で、本来は21号竪穴住居跡に属する可能性がある。頭部文様は、2条の隆帯に沿って2列の波状沈線文を3段に施している。胴部は、垂下させた波状沈線文によって区画し、区画内の上部に連続刺突文を施した隆帯を楕円形状に貼付している。また隆帯の内側には2列の波状沈線文を垂下させている。995は、覆土下層と上層の各1片が接合した胴部片で、地文にR1の縄文を施し、2本の沈線で区画した磨消帯を垂下させている。996、997は、覆土中層から出土した胴部片で、996は地文にLrの縄文を施し、隆沈文で縦に区画している。997は、R1の縄文を施している。998は、覆土中層から出土した無文の底部片である。

#### 422号土坑 (IR291号土坑) (第98図 PL27)

本跡は、M6c区から確認され、西側1mに21号竪穴住居跡、東側1mに423号土坑が位置している。平面形は、隅丸方形を呈し、規模は、東西1.43m、南北1.5m、深さ0.75mである。

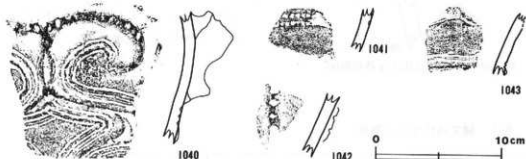
覆土は、褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。底面は平坦で、壁は約70度の傾斜をもって立ち上がる。

遺物は、中央部の覆土上層から夏島式土器片2片、阿玉台式土器片13片が出土し、底面からは阿玉台式土器片3片、礫2点が、投棄された状態で出土している。

#### 出土土器 (第83図 PL46)

1040は、覆土上層から出土した口縁部付近の破片で、羊の角状に隆帯を貼付し、隆帯に沿って

3本の平行沈線文を施している。1041は、底面から出土した胴部片で、2列の結節沈線文が施されている。1042, 1043は、覆土上層から出土した胴部片で、1042はキザミ目を施した隆帯を垂下させ、1043は横位の隆帯に沿って2本の平行沈線文を施している。



第83図 422号土坑出土土器拓影図

#### 425号土坑 (旧290号土坑) (第98図)

本跡は、M6c区を中心に確認され、北西側7mには24号竪穴住居跡、南西側3.5mには426号土坑が位置している。平面形は、長径方向N-60°-Wを指す楕円形を呈し、規模は、長径1.88m、短径1.23m、深さ0.3mである。

覆土は、暗褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。底面は皿状を呈し、壁は底面と明瞭な境をなさずに、ゆるやかに立ち上がる。

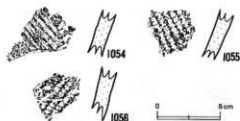
遺物は、東半部の覆土から夏島式土器片2片、植房式土器片1片、阿玉台式土器片10片、礫50点が、投棄された状態で出土している。礫は、差し渡し15cm程のものから1cm位のものまであり、台石片、円礫の各1点を除いては、いずれも破砕礫である。石質は、片麻岩が26点と最も多く、次いで石英斑岩10点、雲母片岩3点、安山岩、斑輝岩各2点である。

#### 431号土坑 (旧270号土坑) (第99図 PL27)

本跡は、M6b区から確認され、北西側1.5mには429, 430号土坑、東側5mには432, 433号土坑が位置している。平面形は、長径方向N-62°-Wを指す楕円形を呈し、規模は、長径1.36m、短径1.12m、深さ0.24mである。

覆土は、褐色土を主体とし、焼土粒子、焼土ブロックを含み、人為的堆積の様相を呈している。底面は皿状を呈し、中央部には径30cmの範囲で多量の焼土が確認された。この焼土は、覆土中に含まれている焼土ブロック等と共に、投棄されたものとみられる。壁は、底面と明瞭な境をなさずに、ゆるやかに立ち上がる。

遺物は、中央部の覆土上層から下層にかけて、茅山式土器片1片、前期土器片3片、破砕礫1点が、焼土と共に投棄された状態で出土している。



第84図 431号土坑出土土器拓影図

出土土器 (第84図)

1054~1056は、覆土上層から出土した胴部片で、1054は表裏に条痕文、1055、1056は同一個体とみられ、RLの縄文が施されている。なお、いずれも胎土に繊維を含んでいる。

表1 縄文時代土坑一覧表

土坑番号	旧番号	位置	平面形	長径方向	規 (m)		底面	覆土	出土遺物	形態分類	備考	遺物番号
					長径×短径	深さ						
16	220	B5j7	楕円形	N-48°-E	1.45×1.10	1.02	皿状	N		II A2c		
17	219	B5j7	楕円形	N-58°-W	2.47×1.43	0.17	平坦	N		II B3a		
32	136	D6c5	不整形楕円形	N-56°-E	1.26×0.96	0.22	皿状	N	縄文1(X上)	II B2a		
34	135	D6c5	(楕円方形)	N-53°-E	1.12×1.04	0.22	皿状	N	阿1(X下)	III B2a	33と重複	
37	186	D6g5	楕円形	N-65°-E	1.40×1.20	0.26	平坦	N		II A2a		
42	132	D6c4	楕円形	N-79°-W	1.58×1.20	0.26	有段	N		II B2a	中央部に焼土	
67	445	D7i7	不整形楕円形	N-38°-E	1.17×0.95	0.17	平坦	N	縄13(X下~上)	II B2a		
68	390	D7hc	円形		0.95×0.88	0.52	皿状	MN		I A1b		
75	398	D8d3	円形		0.85×0.80	0.22	皿状	MN	縄1・縄文3(X中)	I B1a		776
76	399	D8e4	円形		1.10×1.02	0.25	平坦	N	阿1・縄1(X上)	I B2a		777・778
90	33	E7c5	不整形円形	N-19°-E	1.45×1.32	0.42	皿状	M	阿1(Y)	I B2a		
96	35	E7b5	楕円形	N-52°-E	1.02×0.96	0.18	平坦	美		II A2a		
101	66	E7a7	楕円形	N-30°-E	1.70×1.04	0.54	皿状	N		II B2b		
102	107	D7i5	楕円形	N-36°-W	1.20×0.90	0.36	平坦	N	縄2(X中)	II A2a		
103	64	E7a5	(不整形円形)	N-21°-W	2.10×1.16	0.42	平坦	N		II A2a	104と重複	
104	65	E7a5	(不整形円形)	N-30°-W	0.85×0.80	0.42	平坦	N		I A1a	103, 106と重複	
105	62	E7a5	(楕円形)	N-61°-W	1.28×0.96	0.41	皿状	N	阿1(X上)	II A2a	106と重複	
106	63	E7a5	(不整形)	N-62°-W	1.50×1.44	0.30	平坦	N		II A2a	105と重複	
107	61	E7a5	楕円形	N-32°-E	0.96×0.82	0.30	平坦	N	縄1(Y)	II A1a		
112	67	E7a3	不整形円形	N-16.5°-E	1.16×0.80	0.34	平坦	MN	阿6(X上)阿4(Y)	II A2a		779
113	68	E7a3	楕円形	N-70°-W	1.38×1.10	0.24	平坦	N	阿5(X中)	II B2a		780

上成番号	旧番号	位置	平面形	長短方向	規模(m)		底面	質土	出土遺物	形態分類	備考	遺物番号
					長さ×短径	高さ						
115	76	E7a2	楕円形	N-76'-W	1.10×0.90	0.22	平坦	N	阿1(X上) 加E1(X中)	II B2a		
116	71	E6j2	楕円形	N-71'-W	1.30×0.70	0.32	平坦 砂有	N		II A2a		
120	77	F7a3	楕円形	N-30.5'-W	0.80×0.50	0.22	皿状	N	阿1(X下)	II B1a		
127	147	D6j7	長楕円形	N-41'-W	1.60×0.80	0.16	皿状	N	阿7(X上-Y)	II B1a		781
132	152	E6c7	不整形	N-44'-W	1.50×1.36	0.22	皿状	N	阿6(X上)	II B2a		
134	149	E6a7	楕円形	N-52'-W	2.50×2.18	0.34	皿状	N	阿1(X)	II B2a		782
138	182	F6a2	楕円形	N-39.3'-E	1.72×1.26	0.14	平坦	N	阿4(X上)	II B2a		783-784
142	217	D4h0	隅丸方形	N-30'-E	1.95×1.92	0.23	平坦	N		II B2a		
158	163	E6ja	不整形	N-31.5'-E	1.14×0.86	0.16	皿状	N	阿1(Y)	VI B2a		
159	164	E6j7	楕円形	N-32'-E	1.34×1.25	0.14	皿状	N	阿1、加E1 (X上・中)	II B2a		785
160	162	E6ia	楕円形	N-53'-E	1.38×1.00	0.14	皿状	N		II B2a		
161	161	E6is	楕円形	N-58'-W	1.92×1.64	0.38	平坦	MN	阿4、横文2(X中)	II A1a		786-788
165	98	E6fs	楕円形	N-30'-W	0.96×0.86	0.14	有段	N	阿4(X上)	II B1a		789
166	99	E6ta	円形		0.86×0.86	0.16	平坦	N	阿1(X上)	I B1a		790
169	95	F6am	楕円形	N-35.5'-W	1.64×1.08	0.30	皿状	N		II B2a		
172	101	E6as	楕円形	N-60'-E	1.40×0.86	0.28	皿状	N		II B2a		
173	104	E6es	(楕円形)	N-63'-E	1.78×(1.30)	0.52	皿状	N		II B2b		174より古
174	103	E6ds	不整形	N-86'-E	1.55×(0.80)	0.38	平坦	N	阿1(X上)	II B2a		172より調査1中 174の遺物に付随
177	94	E6fo	隅丸方形	N-25'-E	1.24×1.20	0.20	平坦	N	阿1(X上)	II B2a		
181	29	E7g1	円形		0.80×0.80	0.30	平坦	M		I A1a		182より古
185	88	E7f1	(楕円形)	N-45.5'-W	1.95×1.30	0.22	皿状	N	阿3(X上)	II B2a		791-793
188	28	E6do	長楕円形	N-17'-E	1.70×0.94	0.38	皿状	N		II B2a		
193	82	F7c1	楕円形	N-50'-E	0.82×0.62	0.28	傾斜	N	阿3(X上)	II B1a		
196	76	E7d1	楕円形	N-41'-W	0.90×0.38	0.30	平坦 砂有	MN	阿6(X下)	II B1a		794-795
204	39	E7e3	不整形	N-65'-E	1.26×0.80	0.56	皿状	N	加E1(Y)	II B1b		
207	32	E7g3	不整形	N-58'-E	1.62×1.42	0.22	平坦	N	阿54、(括) (Y)	II B2a		796-798
208	38	E7g4	楕円形	N-28'-W	1.80×1.60	1.00	皿状	N	阿9・フレイク2・ 磨3(Y-X上)	II B1c		800
210	6	E7g4	楕円形	N-79'-W	2.52×1.87	0.76	皿状	MN	阿3・加F1・ フレイク1(X上・中)	II B3b		801-804
227	174	E7g7	長楕円形	N-71'-W	1.50×0.84	0.18	平坦	N	阿4(X上)	II B2a		
228	37	E7h7	楕円形	N-64'-W	1.92×1.20	0.30	皿状	N	阿16(X上)	II B2a		805-806

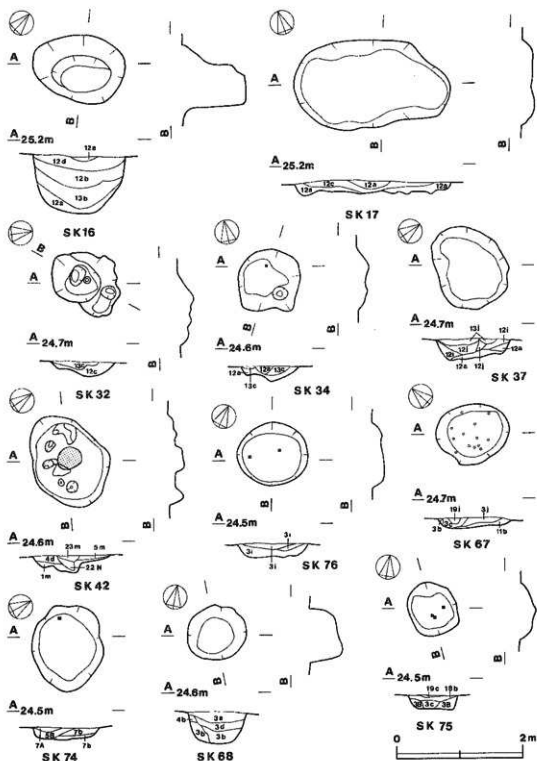


上段 番号	旧 番号	位 置	平面形	長 径 方 向	規 模 (m)		断面 土質	出土 遺 物	形態分類	備 考	遺物番号
					長径×短径	深さ					
230	177	E7ia	(不整形)	N-0°-E	2.20×1.68	0.18	平坦	N 阿11、G1(X上)	ⅡB3a	229、231と重複	
232	179	E7ia	溝状長方形	N-45°-W	3.19×2.65	0.16	平坦	N 阿4(X上)	ⅡB4a	233と重複	807-808
233	188	E7ia	溝状長方形	N-45°-W	3.19×2.65	0.16	平坦	N 阿6(X上)	ⅡB4a	232と重複	
235	40-A	F7c3	楕円形	N-22°-W	2.39×0.80	0.50	皿状	NM 阿170、G5、加E1	ⅡB3b	236より新	809-819
236	40-B	F7c3	楕円形	N-9°-E	1.24×0.90	0.55	皿状	N 阿73、石3	I B1b	235より古	820-824
238	400	F7c2	楕円形	N-72°-W	1.12×0.80	0.28	皿状	N	ⅡB2a		
280	451	I5b0	楕円形	N-51°-E	1.43×1.18	0.18	平坦	MN 阿2(Y、X下)	ⅡB2a		825
282	447	I5t4	楕円形	N-80°-E	1.55×0.97	0.22	平坦	N 阿9(X下)	ⅡB2a		826-828
284	446	I5ia	楕円形	N-35°-W	2.18×1.33	0.22	平坦	N 阿(大成片)19 (X下~上)	ⅡB3a		829-830
285	453	I5ia	楕円形	N-61°-W	1.70×1.45	0.29	平坦	N 阿45(X上) 石敷1(Y)	ⅡB2a		831-836
286	SX-4	J4j0	円形		0.54×0.50	0.56		阿1・石皿1・礎1	I A1a		
287	450	I5ia	円形		1.55×1.55	0.27	平坦	MN 阿16(X下)	I B2a		838
288	449	I6b3	楕円形	N-61°-W	1.65×1.20	0.28	皿状	MN 阿6(X上)	ⅡB2a		
291	374	J5ia	円形		1.03×0.93	0.30	皿状	N	I A2a		
292	373	J5ia	不整形円形		1.26×1.21	0.20	平坦	N	I B2a		
295	362	J6j1	楕円形	N-76°-E	1.12×0.93	0.44	平坦	N	ⅡA2a		
296	361	J6i2	不整形円形	N-73°-E	1.28×0.94	0.28	皿状	N	ⅡB2a		
297	360	J6j4	不整形円形	N-39°-W	1.98×1.87	0.54	平坦	N 加E4、石1 (X中~上)	I A2b		839
299	372	K3b4	楕円形	N-87°-E	0.95×0.80	0.30	皿状	N 阿1(X上)	ⅡB1a		841
300	364	K5c0	楕円形	N-8°-W	1.19×0.95	0.28	平坦	N	ⅡA2a		
304	363	K5c0	不整形円形	N-60°-W	0.90×0.70	0.19	平坦	N	ⅡB1a		
305	350	K5t8	円形		1.20×1.18	0.25	平坦	N 阿2(X上)	I B2a		
306	351	K5t8	楕円形	N-13°-E	1.36×1.10	0.71	皿状	MN 阿多、礎1 (Y~X上)	ⅡA2b		842-849
308	349	K5g0	楕円形	N-49°-E	0.93×0.80	0.29	皿状	N	ⅡB1a		
309	353	K6t1	不整形円形	N-56°-W	1.19×0.62	0.25	皿状	N 礎1・礎1(X中)	ⅡB2a		850
310	354	K6t2	円形		1.21×0.95	0.60	有段	N 阿9、礎之内15 (X下~上)	I A2b		851-855
311	355	K6g1	不整形円形	N-18°-E	1.86×1.70	0.53	凹凸	N 平瀬1、瓦瀬2 (X下)	I B2b		856
314	358	K6b4	楕円形	N-21°-W	1.36×1.05	0.15	皿状	N 阿(深鉢)1 (X中)	ⅡB2a		857
315	365	K6a7	楕円形	N-37°-E	0.83×0.70	0.22	皿状	N 阿5(Y)	ⅡB1a		858-862
318	347	K6h7	円形		1.20×1.17	0.27	皿状	N 阿2(X上)	I B2a		865

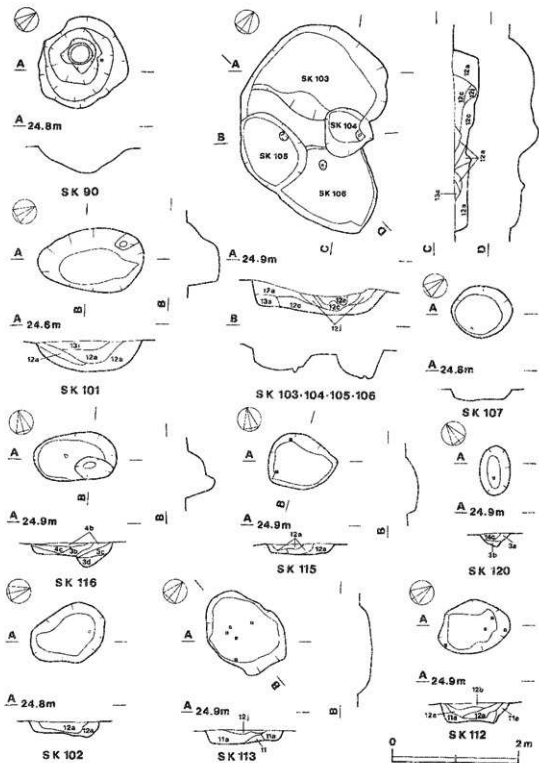
土坑 番号	明 番号	位置	平面形	長径方向	規 模		底面 傾斜	出土 遺物	彩繪分類	備 考	遺物番号	
					幅×短径	深さ						
319	348	K6i1	円形			1.31×1.23	0.15	平坦	N		I B2a	
320	346	K6j5	不整形円形	N-5°-W		1.03×0.90	0.24	皿状	N		II B2a	
321	345	L6a7	円形			0.73×0.70	0.18	皿状	N		I B1a	
322	341	L8e1	南北方形	N-28°-E		2.25×1.14	1.07	平坦	N	阿1 (XF)	III A3c	
323	343	L6e1	楕円形	N-88°-W		1.08×0.99	0.38	皿状	N		III B2a	
324	342	L6d1	楕円形	N-23°-W		1.02×0.96	0.10	皿状	N	阿2 (X上)	III B1a	
325	344	L6b1	円形			1.27×1.42	0.28	平坦	N		III B2a	
327	245	L5c1	円形			0.84×0.81	0.40	皿状	N		I B1a	
330	244	L5e1	不整形円形	N-78°-E		0.33×0.80	0.39	有段	N		III B1a	
331	260	L5c1	楕円形	N-19°-E		0.82×0.52	0.18	皿状	N		III B1a	
332	259	L5b1	楕円形	N-61°-W		1.08×0.91	0.35	皿状	N	阿2 (XF)	III B2b	
333	258	L5b1	円形			1.12×1.05	0.58	皿状	N		I A2b	
334	257	L5e1	南北方形	N 6°-E		0.85×0.70	0.45	皿状	N		III A1a	335より古
335	242	L5c1	(楕円形)	N-21°-W		1.04×0.89	0.42	平坦	N	阿5 (X上, 中)	III B1a	334より新 866・857
336	243	L5e1	不整形円形	N-25°-W		1.07×1.00	0.37	有段	N		III A2b	
337	256	L5c1	楕円形	N 78°-W		1.88×0.82	0.52	皿状	N	阿2, 阿6, 阿10, 阿11 (X中)	III B2b	868
338	371	L5a1	円形			0.88×0.85	0.20	皿状	N		I B1a	
340	222	L3b2	南円形	N-31°-W		1.42×1.18	0.47	皿状	N	阿4, 石1 (X上)	III B2a	
341	369	L5a1	不整形円形	N-42°-E		1.07×0.88	0.42	皿状	N		I B2b	
342	370	K5j1	楕円形	N-85°-E		1.28×0.93	0.47	平坦	N		III A2b	
343	221	L5b1	円形			1.85×1.60	0.37	平坦	N	阿5 (X上, 中)	I A2b	869・870
344	224	L5c1	南円形	N-79°-W		1.15×0.98	0.25	平坦	N		III B1a	
345	225	L5e1	円形			1.07×1.00	0.42	有段	N	阿7 (X中)	I A1a	871
346	226	L3i2	円形			1.31×1.14	0.67	皿状	N		I B2b	
353	262	M3b1	不整形円形	N-71°-W		2.12×1.73	0.78	有段	N	阿5	III A3b	872~875
354	235	L5i1	南円形	N-89°-W		2.16×1.10	0.41	円形	N		III B3a	
355	234	L5b1	楕円形	N-89.3°-W		2.36×1.10	0.63	平坦	N		III A3b	
356	233	L5h1	長楕円形	N-8°-W		2.52×1.05	0.52	平坦	N	阿1 (X上)	III A3b	
357	236	L5b1	不整形円形			1.01×0.90	0.40	皿状	N		I B2a	
358	238	L5i1	南円形	N-7°-E		0.83×0.78	0.30	皿状	N	阿2 (X上)	III A1a	

土坑 编号	旧 番号	位 置	平面形	方位方向	规 模 (m)		地面	覆土	出土 遗 物	形迹分类	備 考	遗物番号
					长×宽×深	深						
361	240	L5c6	不整栴形	N-54°-W	0.95×0.77	0.30	平垣	N	石1 (X下)	ⅡA1a		
362	241	L5c7	栴形	N-64°-W	1.14×0.80	0.65	皿状	N	阿2 (X上)	ⅡA2b		
363	265	L5h7	栴形	N-23°-W	1.40×1.28	1.03	平垣	N		ⅡB2c		
364	249	L5e8	円形		1.20×1.07	0.40	平垣	N	阿4 (X下, 上)	ⅠA2a		
365	248	L5e9	円形	N-0°	1.17×0.98	0.71	皿状	N	阿37, 石1 (X下)	ⅠA2b		876~878
366	250	L5f9	円形		1.40×1.40	0.75	平垣	N	阿281, 石5	ⅠD2b		879~893
367	263	L5g9	不整栴形	N-43°-E	1.70×1.63	0.14	皿状	N	阿多 (X上)	ⅠB2a		904~919
369	252	L5g9	円形		1.37×1.22	0.73	皿状	N	阿多	ⅠA2b		371より古 370より新 927~932
370	328	L5g9	不整栴形		0.87×0.40	0.23	平垣			(ⅠA1a)		369より古
371	253	L5g9	(不整栴大方形)	N-26.5°-W	(1.78)×1.55	0.72	平垣	N	阿6	ⅡA2b		369より新 933~935
372	247	L5e0	栴形	N-16°-E	1.14×0.97	0.25	平垣	N	阿5 (X上~Y)	ⅡA2a		937
373	335	L5fz	不整栴形	N-35°-W	0.92×0.65	0.26	皿状	N		ⅡB1a		
377	325	L6f8	円形		0.95×0.76	0.20	皿状	N	阿1 (X中)	ⅠB1a		
378	329	L6c6	不整栴形	N-11°-E	1.32×1.12	0.16	皿状	N	阿6, 縄文1 (X下~上)	ⅡB2a		938~940
379	331	L6e7	円形		1.20×1.10	0.12	皿状	N	阿3, 阿7 (X下~上)	ⅠB2a		941
380	334	L6e7	円形		1.10×1.00	0.22	皿状	N		ⅠB2a		
381	333	L6f7	栴形	N-13°-W	0.85×0.65	0.15	皿状	N	阿1 (X中)	ⅡB1a		942
382	332	L6e7	栴形	N-48°-E	0.97×0.78	0.16	皿状	N	阿6 (X上)	ⅡB1a		
383	381	L6e7	不整栴形	N-85°-W	0.87×0.62	0.30	皿状	N	阿(括)8 (Y)	ⅡB1a		946~950
384	330	L6e7	円形		0.92×0.90	0.22	皿状	N	阿2·阿9 (X下~上)	ⅠB1a		951~954
388	318	L6g6	円形		1.10×1.04	0.22	皿状	N	阿2 (Y)	ⅠB2a		957
390	320	L6f5	円形		1.08×1.06	0.28	皿状	N		ⅠB2a		
391	317	L6g5	円形		0.96×0.96	0.20	皿状	N	阿1·石2 (XY)	ⅠB1a		
392	316	L6g5	円形		0.96×0.96	0.22	平垣	N	阿4 (X下)	ⅠB2a		958
393	314	L6g5	円形		1.06×0.88	0.18	皿状	N	阿2·阿5 (Y~X上)	ⅠB2a		959
394	313	L6g4	円形		1.04×1.02	0.20	皿状	N	阿4 (X下)	ⅠB2a		
395	315	L6g4	円形		1.20×1.16	0.30	平垣	N	阿3, 不明1 (X下)	ⅠB2a		
396	312	L6h3	不整栴形	N-52°-W	1.20×0.86	0.20	皿状	N	阿4, 石1 (X中)	ⅡB2a		960
397	311	L6h3	円形		1.68×1.54	0.18	皿状	N	阿2, 石2, 阿23 (X下~上)	ⅠB2a		398と重複 961~964
398	324	L6h3	円形		1.00×0.92	0.50	平垣	N	阿12, 加E1	ⅠA2b		397と重複 967~970

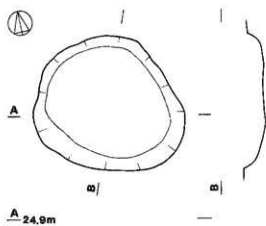
土坑番号	旧番号	位置	平面形	長径方向	規模(m)		底面傾斜	出土遺物	形態分類	備考	遺物番号
					長径×短径	深さ					
399	310	L6h3	楕円形	N-37°-E	2.06×1.68	0.10	平坦	N	夏1, 阿7(X下)	ⅡB3a	972~974
403	379	L6i4	円形		2.31×2.12	0.95	平坦	N	阿多, 阿E	I A3b	S1-13と404より新 977~998
404	380	L6i4	(楕円形)	N-44°-W	(0.95)×(0.55)	0.37	皿状	N	阿21, 石2 土製円板1	ⅡB1a	S1-13より新 403より古 1028~1031
407	305	M6a4	楕円形	N-63°-W	1.23×1.00	0.46	皿状	N	夏2, 阿2(X中)	ⅡB2a	中央部に焼土 1032~1034
410	254	L5j5	楕円形	N-73°-W	1.15×1.00	0.35	皿状	N		ⅡB2a	
412	299	M6b3	楕円形	N-10°-W	2.00×1.64	0.67	平坦	M	阿4(Y, X中)	ⅡA3b	
413	300	M6c3	楕円形	N-70°-W	1.07×0.90	0.13	平坦	N	阿2(X下)	ⅡB2a	1035
414	301	M6d1	長楕円形	N-39°-W	1.80×0.96	0.26	皿状	N	阿1, 阿2, 石2 (X中~上)	ⅡB2a	
416	298	M6b4	楕円形	N-40°-W	1.03×0.97	0.13	平坦	N	阿1(X下)	ⅡB2a	
417	296	M6b5	楕円形	N-37°-E	1.37×1.02	0.20	皿状	N	夏4, 阿1(X上)	ⅡB2a	1036-1037
419	293	M6c4	(不規則形)		(0.95)×0.93	0.14	平坦	N	阿4(Y, X上)	I B1a	420より古 1038
420	294	M6c4	(不規則形)		1.32×1.26	0.48	平坦	N	夏8, 阿3, 土師1 (X中)	I A2a	419より新
422	291	M6c6	渦丸方形	N 0°	1.53×1.44	0.74	平坦	N	夏2, 阿17, 石2 (Y, X上)	I A2b	1040~1043
423	292	M6c7	円形		1.57×1.45	0.61	平坦	MN	阿7, 石2 (Y~X中)	I A2b	1044-1045
424	337	M6d2	不規則形	N-51°-E	1.55×1.12	0.30	平坦	N	夏1, 阿1, 石1 (X下~上)	ⅡB2a	1046-1047
426	289	M6f3	楕円形	N 80°-E	1.82×1.14	0.30	平坦	N	石1(X中)	ⅡB2a	
427	285	M6f2	不規則形	N-67°-W	1.45×1.08	0.27	皿状	N	阿1, 縄文2, 石1 (X上)	ⅡB2a	1050-1051
429	269	M6h1	円形		0.98×0.85	0.13	皿状	N	夏1, 阿3, 土製品2 石3(X上)	I B1a	
430	268	M6h1	楕円形	N-47°-W	0.80×0.65	0.17	皿状	N	阿1(X中)	I B1a	1052-1053
431	270	M6h1	楕円形	N-62°-W	1.36×1.12	0.18	皿状	N	早期, 前期 (Y~X上)	ⅡB2a	1054~1056
433	284	M6h3	楕円形	N-53°-E	3.95×1.50	0.20		N	阿8, 阿1, 石1, 石1 土1(X中~上)	ⅡB4a	1057
434	282	M6h1	楕円形	N-35°-E	1.72×1.18	0.15	平坦	N	早期2, 前期7, 縄3 (X下~上)	ⅡB2a	1058~1063
435	275	M6i4	円形		0.66×0.63	0.23	平坦	N	早期2, 阿1(X上)	I A1a	1064
436	281	M6h4	不規則形	N-55°-E	1.92×1.08	0.23	平坦	X	縄文2(Y)	ⅡB2a	1065
441	274	M6j3	円形		1.05×0.94	0.23	皿状	N	早期2(Y~X中)	I B2a	
442	266	M6i1	楕円形	N-45°-E	1.10×0.80	0.20	皿状	N	阿3(X上)	ⅡB2a	1066-1067
445	280	M6j5	楕円形	N-55°-W	1.00×0.80	0.25	皿状	N		ⅡB2a	中央にピット
446	278	M6a4	楕円形	N-72°-E	1.14×0.69	0.16	皿状	N		ⅡB2a	



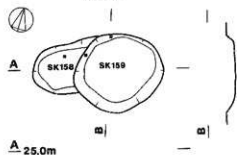
第85图 土坑实测图(1)



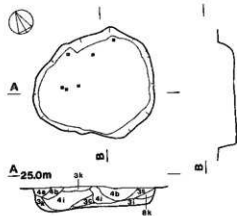
第86图 土坑实测图(2)



SK 134

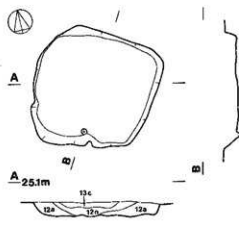


SK 158-159

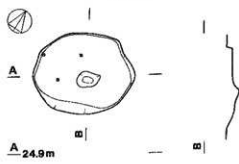


SK 161

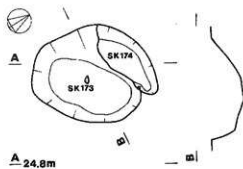
第87图 土坑实测图(3)



SK 142

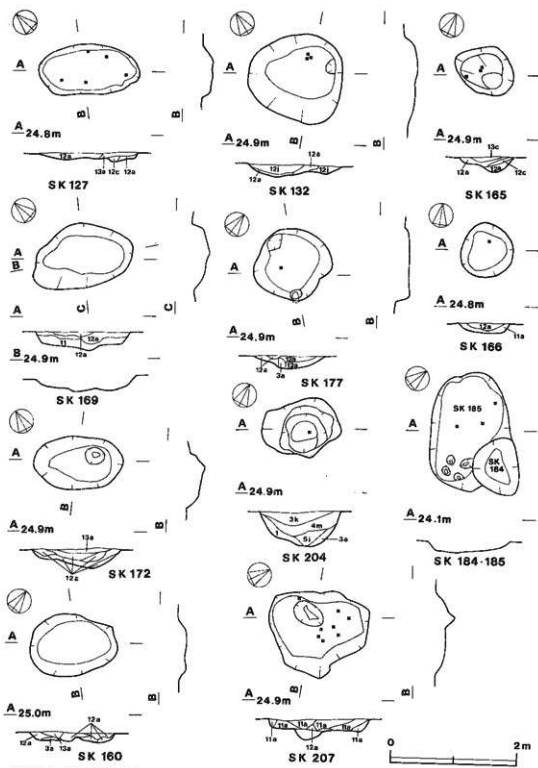


SK 138



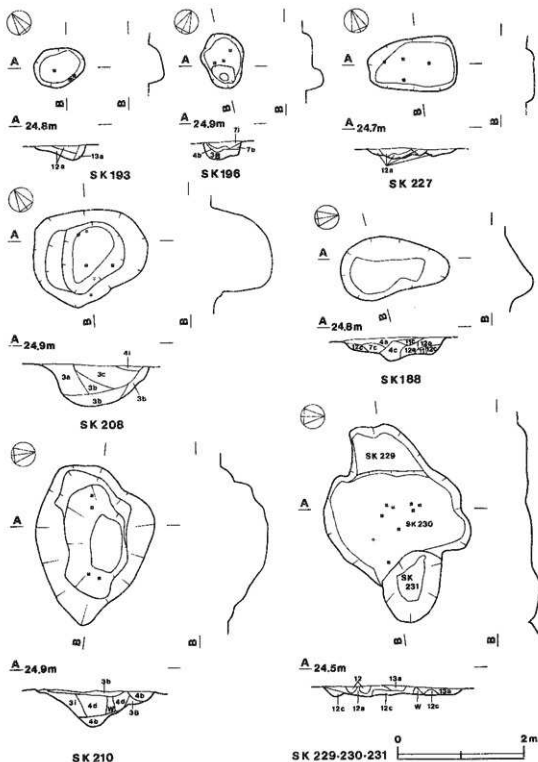
SK 173-174



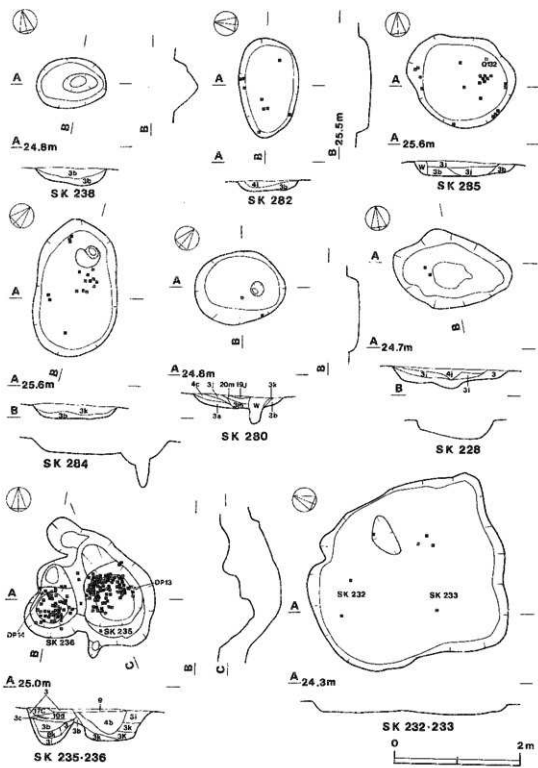


第88圖 土坑実測圖(4)

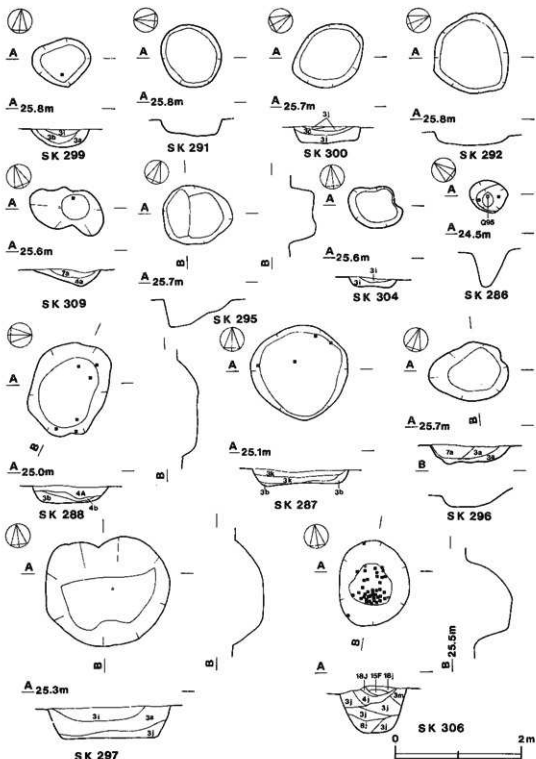




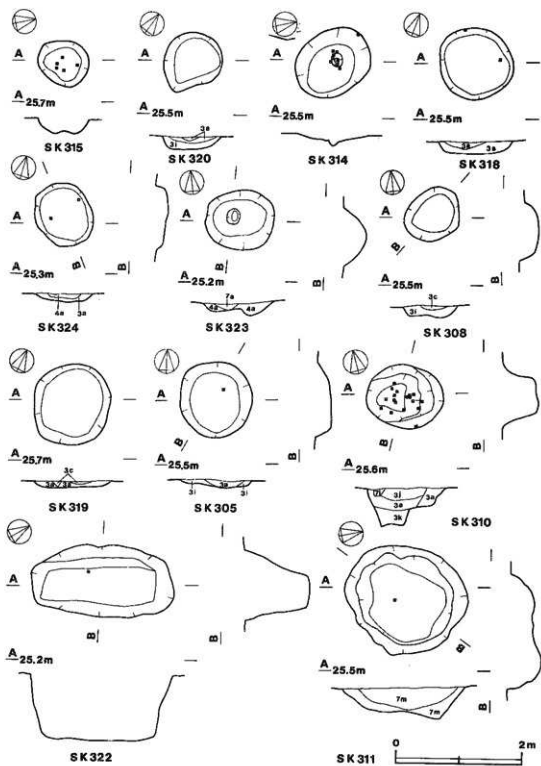
第89图 土坑实测图(5)



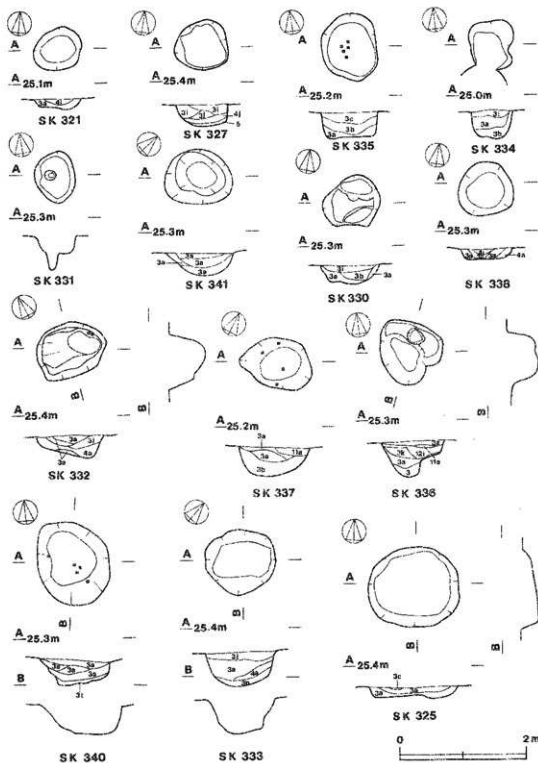
第90图 土坑表测图(6)



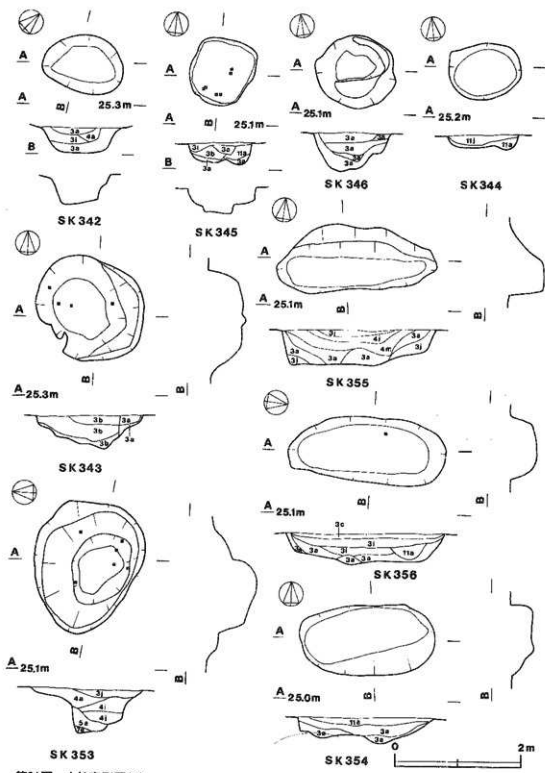
第91图 土坑实测图(7)



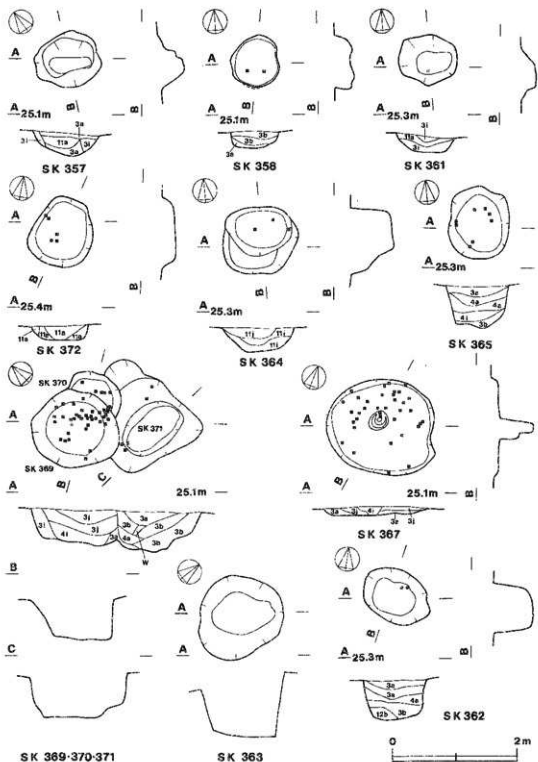
第92图 土坑实测图(8)



第93図 土坑実測図(9)



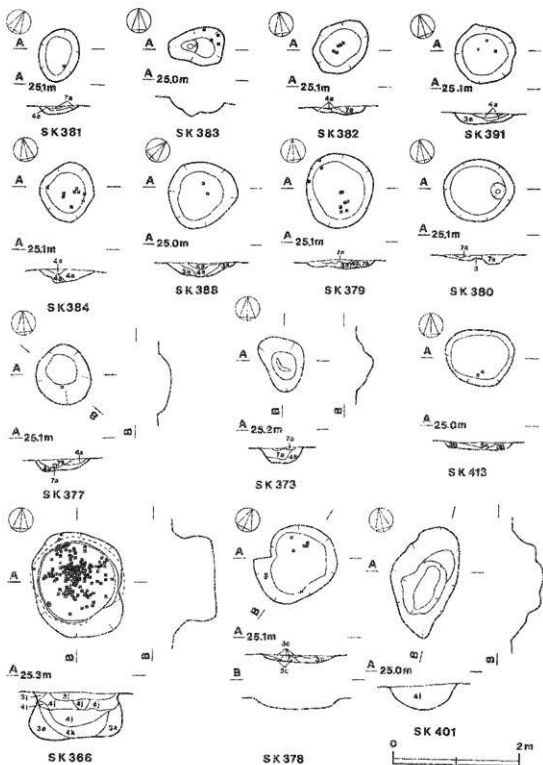
第94图 土坑实测图(10)



SK 369-370-371

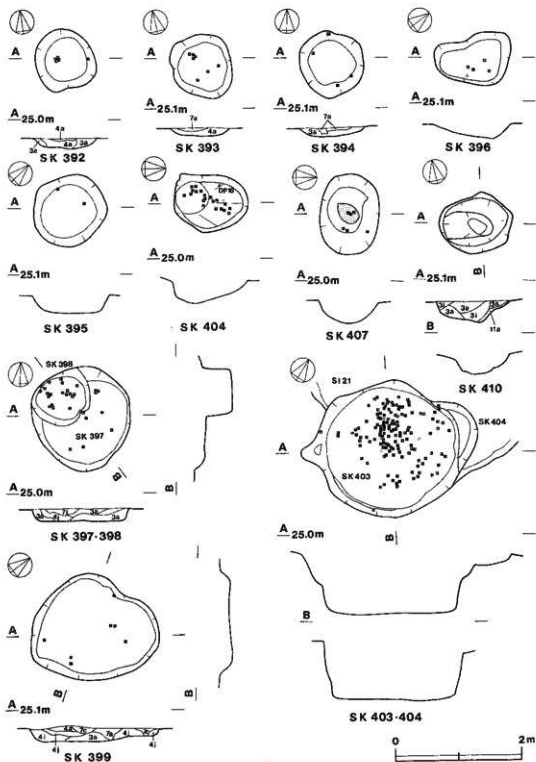
SK 363

第95图 土坑类测图(1)

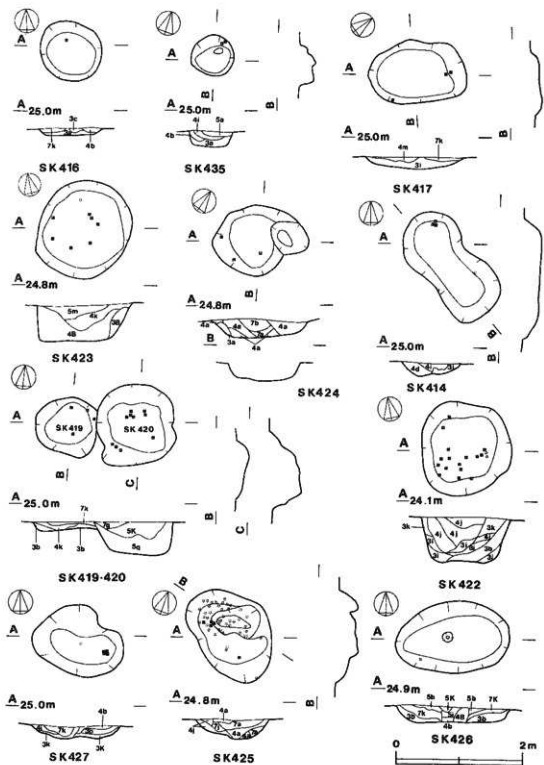


第96圖 土坑実測圖(12)

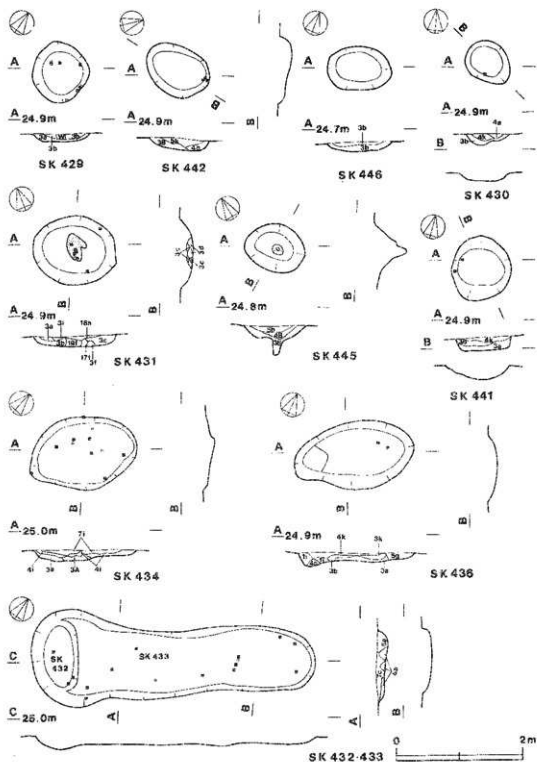




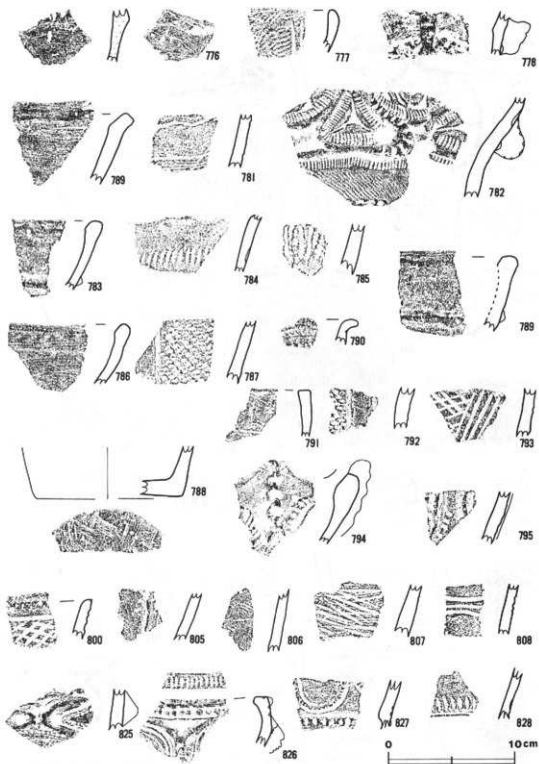
第97图 土坑实测图(13)



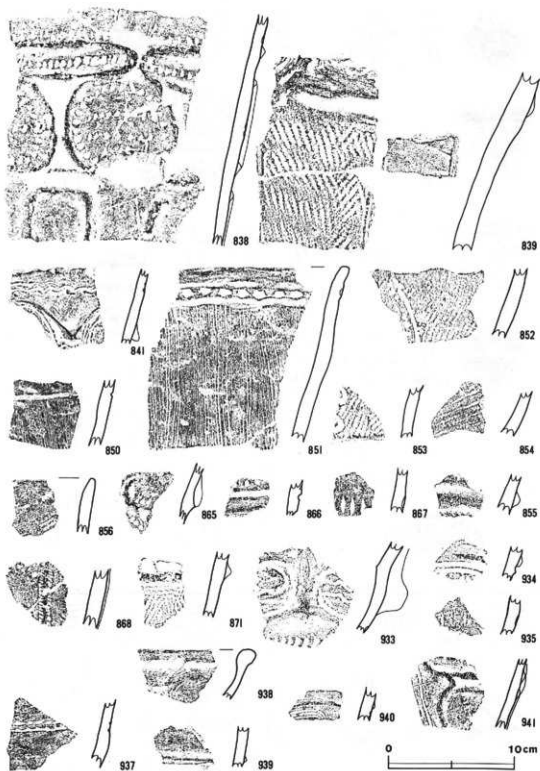
第98图 土坑实测图(14)



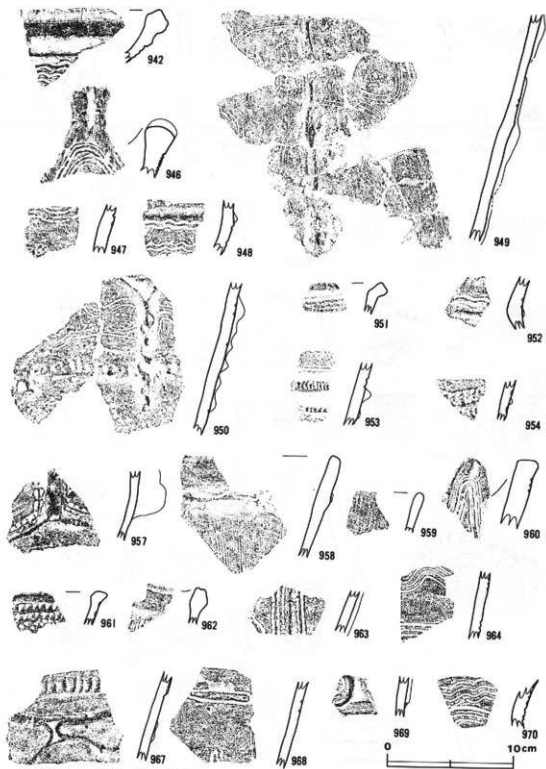
第99图 土坑实测图(15)



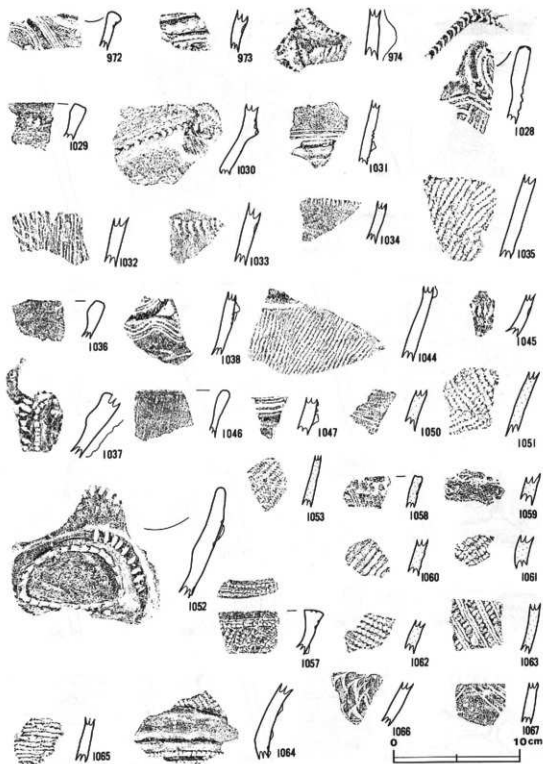
第100图 土坑出土土器拓影图(1)



第101图 土坑出土土器拓影图(2)



第102图 土坑出土器拓影图 (3)



第103图 土坑出土土器拓影图(4)

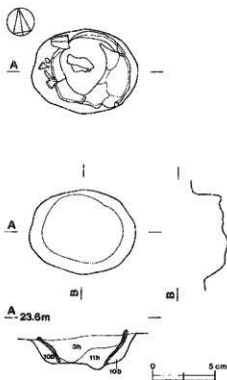
### 3. 埋 甕

#### 1号埋甕 (第104・105図 PL27)

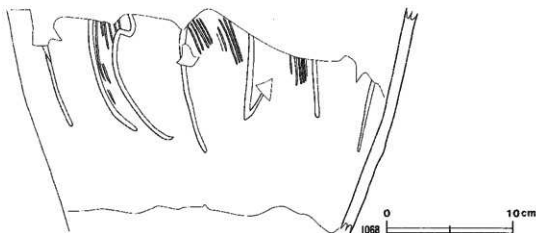
本跡は、G7<sub>19</sub>区から確認され、台地緩斜面に立地している。北西側5mには3号集石、南側2mには4号溝が、それぞれ存在している。

出土状況は、長径方向N-80°-Wを指す長径0.85m、短径0.67m、深さ0.2mの掘り形内に正位で埋設されている。土器は、口縁部及び底部を欠いている。覆土は、土器の内外共に、ロームブロックを含む褐色土で、土器内の覆土は、比較的軟らかい。

土器(1068)は、胴部上半及び底部を欠く深鉢形土器で、幅広の沈線によって曲線的に区画し、区画内に櫛歯状工具による条線を施している。現存高は、14cmである。胎上には、砂粒を多く含んでいる。



第104図 1号埋甕実測図



第105図 1号埋甕(土器)実測図



#### 4. 集石

今回の調査において、土器や石器等と共に多量の礫が出土しているが、この礫が一处所に密集していたものを「集石」と認定し、その状態を記録した。集石には、土坑状の掘り込みの有無や、礫の密集度合の違いが認められるが、その全てを集石とした。

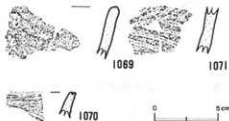
##### 1号集石 (旧5号集石) (第110図 PL28)

本跡は、F7<sub>12</sub>区を中心に確認され、南側に近接して2号集石、北東側5mには241号土坑が、それぞれ位置している。本遺構は、平面形が円形で、径0.86m、深さ0.46mの規模を有する土坑内に、若干の土器片と共に礫56個が出土したものである。

礫は、坑内の東半部にのみ存在し、底面から確認面まで比較的密に存在する。礫は、差し渡し11cmから59cmのものまであり、重量は、6gから70gの間である。石質は、流紋岩が最も多く、次いで砂岩、石英斑岩、安山岩の順である。これらの礫は、ほとんどが破碎したもので、熱を受けひび割れたものや、もろくなっている。

坑内の覆土は、褐色土を主体とし、ほとんどの層にロームブロックを含み、焼土粒子、炭化粒子を少量含む層も認められる。

伴出土器は、熱を受けてもろくなった植房式土器片9片が、礫と混じって出土している。



出土土器 (第106図)

1069, 1070は口縁部片で、1069は無文、1070は流紋岩が施されている。1071は胴部片で、縄文が羽状に押圧されている。1070, 1071は、胎土に繊維を含んでいる。

第106図 1号集石出土土器拓影図

##### 2号集石 (旧4号集石) (第110図 PL28)

本跡は、F7<sub>12</sub>区から確認され、北側に近接して1号集石が位置している。本遺構は、平面形がほぼ円形を呈し、径1m内外、深さ0.36mの規模を有する土坑内に、礫425個が出土したものである。

礫は、坑内全域にわたり、底面付近から確認面まで密に存在するが、底面付近は石の密度が若干低い。礫は、差し渡し1cmから14cmのものまで認められるが、3cmから6cmのものが多く、重量は、5g～1,350gのものまであり、10g～70gのものが最も多い。石質は、流紋岩が208個と全体の約半分を占め、以下砂岩、石英斑岩、安山岩、片麻岩、雲母片岩、泥岩、凝灰岩の順であ

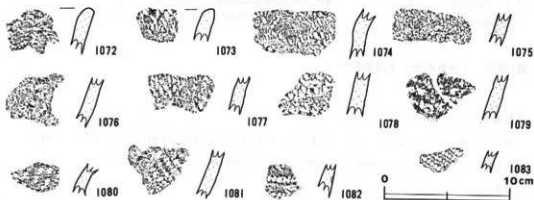
る。これらの礫は、約9割が破砕したもので、1割が円礫である。また、ほとんどの礫は、熱を受け、もろく、ひび割れたものも多い。

坑内には、礫と共に焼土粒子、炭化粒子を含んだ暗褐色土が堆積している。

伴出遺物は、礫と同様に熱を受けてもろくなった植房式土器片41片が、礫と混じって出土している。

#### 出土土器（第107図）

1072, 1073は、口縁部片で、縄文が施されている。1074～1083は、胴部片で、いずれも縄文が施されている。なお、すべての胎土に、繊維を含んでいる。



第107図 2号集石出土土器拓影図

#### 3号集石（旧3号集石）（第110図 PL28）

本跡は、G7rs区を中心に確認され、付近には遺構が少なく、南西側5mに1号埋甕、南側6mには44号溝が位置しているだけである。本跡は、平面形が円形で、径1.64m、深さ0.5mの規模を有する土坑内に、礫47個が存在するものである。

礫は、断面が鍋底状の土坑に、焼土粒子を含む褐色土が20cm程堆積した上に配された状態で出土している。礫は、差し渡し10cm前後のものが多く、重量は60g前後のものが多い。

土器の伴出は、皆無である。

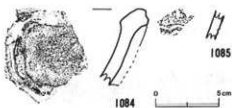
なお、本跡の北側G7es区のローム面から91個の礫が出土している。これは、1グリット内からの出土礫としては最大で、本跡と何らかの関連があるものと考えられる。

#### 4号集石（旧1号集石）（第110図 PL28）

本跡は、L5bs区から確認され、付近には約2.5mの距離をもって330～336号の7基の土坑が、本跡を囲むように円形に存在している。本跡は、東西0.75m、南北0.65mの範囲で、ローム面に礫23個が配されているものである。

礫は、差し渡し2cmから12cmのものまであり、重量は9gから288gの間である。石質は、砂岩が12個と最も多く、以下流紋岩、アプライトの順で、全て破砕したもので、熱を受けてもろくなっている。23個の礫のうち、接合関係にあるものが5組あり、接合後の個数は14個である。

伴出遺物は、明確ではないが、礫の間から阿玉台式土器片4片が出土している。なお、この土器片は、二次的に熱を受けた様子が全くみられない。



第108図 4号集石出土土器拓影図

出土土器（第108図）

1084は口縁部片で、隆帯によって口縁部を楕円形状に区画している。1085は胴部片で、半截竹管による波状沈線文と爪形文が施されている。

5号集石（旧2号集石）（第110図 PL28）

本跡は、L666区から確認され、南東側に388号土坑、北東側に390号土坑、西側に391号土坑が近接して位置している。本跡は、東西0.78m、南北0.45mの楕円形の範囲で、ローム面に礫4個が配されているものである。

礫は、差し渡し4.5cmから12.5cmのもので、重量は82gから690gのものである。石質は、流紋岩が3個、斑禿岩1個で、いずれも熱を受けている。

伴出遺物は、明確ではないが、前期土器片2片、阿玉台式土器片2片が、礫の周辺から出土している。なお、この土器片は、二次的に熱を受けた様子は全くみられない。



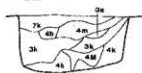
第109図 5号集石出土土器拓影図

出土土器（第109図）

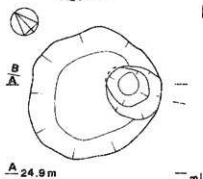
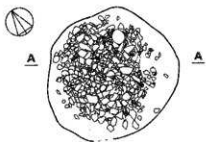
1086～1087は 胴部片で、1086は 縄文が施され、1087は隆帯が貼付されている。



A 25.0m



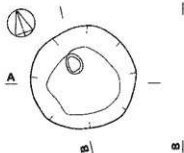
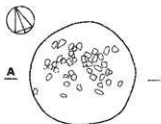
SS 1



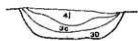
A 24.9m



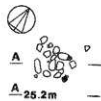
SS 2



A 24.4m



SS 3



A 25.2m

SS 4



SS 5



第110图 集石実測図

## 5. 焼土遺構

### 1号焼土遺構（旧SX4）（第113図）

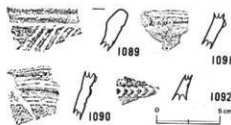
本跡は、J5b6区を中心に確認され、北東側5mには14号竪穴住居跡が位置している。焼土の分布状況は、長径方向N-60°-Eを指す楕円形状に分布し、長径6.3m、短径3.9mにわたっている。

焼土は、分布状況とほぼ同形、同規模の竪穴状掘り込み内に堆積し、堆積状況は約10cmの厚みをもち褐色土を呈する上層に多くみられ、10~15cmの厚みをもち明褐色土を呈する下層には少量含まれているだけである。なお、焼土を多く含む上層には、炭化粒子も含まれている。上層・下層共に自然堆積の様相を呈し、掘り込みの外周部は明確にとらえられない。底面からピットは確認できなかった。

これらの焼土に混じって、58片の阿玉台式土器が出土している。

#### 出土土器（第111図）

1089は、覆土中から出土した口縁部片で、1列の結節沈線文によって区画した内側に、結節沈線文を斜位に施している。1090~1092は、覆土中から出土した胴部片で、1090は横位の隆帯に沿って2条の平行沈線文が、1091は横位の隆帯に沿って結節沈線文が、1092は爪形状で幅広の結節沈線文が、それぞれ施されている。



第111図 1号焼土遺構出土土器拓影図

### 2号焼土遺構（旧SX1）（第113図）

本跡は、K5b9区を中心に確認され、北東側2mには308号土坑が位置している。焼土の分布状況は、長径方向N-60°-Wを指す楕円形状を呈し、長径4.14m、短径3.3mにわたっている。

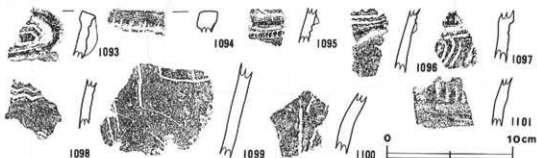
焼土は、5~10cmの厚さでブロック状に堆積し、ブロックの周辺には焼土粒子を含む褐色土がみられる。掘り込みは確認できず、ロームが若干凹んでいる程度である。

これらの焼土に混じって、37片の阿玉台式土器が出土している。

#### 出土土器（第112図）

1093は、南西寄りの覆土中から出土した口縁部片で、楕円形状に区画した隆帯に沿って、2列の連続刺突文が施されている。1094は、東側の地山直上から出土した口縁部片で、口縁下に爪形文が施されている。1095、1096は、南東寄りの覆土中から出土した胴部片で、1096は2片が接合したものである。1095は、横位の隆帯に沿って爪形状の結節沈線文、1096は、横位の隆帯に沿って2列の結節沈線文が、それぞれ施されている。1097、1098は、中央部東寄りの覆土中から出土し

た胴部片で、1097は隆帯に沿って2列の結節沈線文を施し、さらに、その内側にも曲線的に結節沈線文を施している。1098は、波状沈線文が横位に施されている。1099、1100は、東側の地山直上から出土した、同一個体とみられる胴部片で、1099は3片が接合したものである。両者共に、沈線によって文様が描出されている。1101は、中央部東寄りの覆土下層から出土した胴部片で、ヒダ状の指圧痕がみられる。



第112図 2号焼土遺構出土土器拓影図

### 3号焼土遺構（旧SX2）（第113図）

本跡は、L6g5区から確認され、南側で22号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は、本跡が22号竪穴住居跡より古いものとみられる。

焼土は、長径方向N-40°-Eを指していたとみられる楕円形状を呈する。推定長径1.5m、短径1.05mの土坑状落ち込み内に堆積している。落ち込みは、深さ15cm程で断面形が皿状を呈し、暗褐色土に焼土を含んでいる。

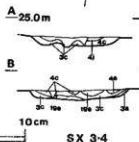
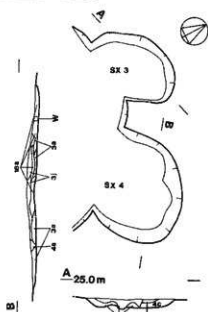
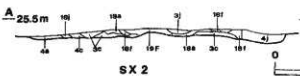
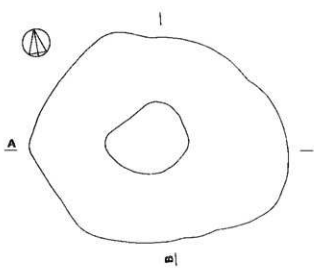
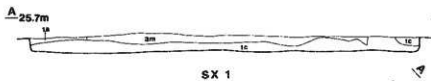
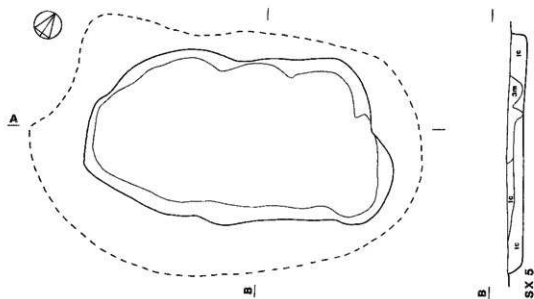
出土遺物は、皆無である。

### 4号焼土遺構（旧SX3）（第113図）

本跡は、L6g5区を中心に確認され、北東側0.5mには3号焼土遺構が位置し、西側では22号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は、本跡が22号竪穴住居跡より古いものとみられる。

焼土は、径1.5m程の円形を呈していたとみられる土坑状落ち込み内に堆積している。落ち込みは、深さ15cm程で断面形が皿状を呈し、上層に焼土ブロック、下層の褐色土に焼土粒子を含んでいる。

出土遺物は皆無である。



第113图 烧土遺構実測図

## 6. 包含層出土の土器

当遺跡からは、前述した各遺構に伴わずに包含層等から多くの縄文式土器が出土している。これらの土器は、ほとんどが小破片であるが、時期的には早期から後期にわたっている。最古の資料は燃糸文系土器に属するもので、井草式、夏島式、榎荷台式に比定できる。次いで沈線文系土器に属する早期中葉の三戸式、田戸式等に比定できるもので、量的には少ない。続いて条痕文系土器に属する早期中葉の鶴ヶ島台式、茅山式等に比定できるものがある。前期では、前半の横房式土器が比較的多量にみられ、続いて浮島式土器が少量みられる。中期の土器は、前葉の五領ケ台式土器が少量みられ、次の阿玉台式土器は当遺跡の上体をなすもので、勝坂式土器も少量伴っている。後葉では、加曾利E・II・III式土器が若干みられる。後期に入ると、称名寺式、堀之内式土器がみられ、さらに加曾利B式、安行式土器が極少量みられる。

一部の型式を除いては、該期の遺構が認められていないが、生活の痕跡が認められ、当遺跡を歴史的に理解する上において、小さな土器でも貴重な資料となるであろう。これらの土器については、文様や型式等から14群に分類し、拓影図を掲載し、その概略を述べてゆきたい。

### 第I群土器 (第114図 756・1186・1203～1214・1230・1231)

早期前半の燃糸文系土器群を一括した。

#### 1類 (1186)

1点のみ出土した。口唇部を外側に折り返して肥厚させ、丸頭状で、口唇部直下にも縄文を施している。口縁下に小さな凹線状の凹みが認められる。胎土には砂粒を多く含んでいる。

#### 2類 (756・1203～1214)

比較的に密な燃糸文が縦に施文されているもので、口唇部は丸頭状を呈するものの、1類に比して口縁部の外反や口唇部の肥厚が少なくなる。756は、口縁下に小孔を有している。1212～1214は、燃糸文がみられないものである。胎土には砂粒を含んでいる。

#### 3類 (1230・1231)

燃糸文が条間を開けて施文されているもので、口唇部の形状は2類と同じである。胎土には、長石、石英類の白色砂粒を多く含んでいる。出土量は、希少である。

### 第II群土器 (第114図 1232～1234)

無文の土器を本群とした。

口唇部は、外削ぎ状を呈し、器面には横位の粗い削りが施されている。器厚は1cm前後と厚みがあり、胎土には砂粒を多量に含んでいる。出土量は、少ない。

### 第III群土器 (第114図 645・1154・1238～1241・1243～1262)

沈線文系土器群を一括した。



### 1 類 (645・1154・1238～1241)

平行沈線が格子目状に組み合わされる文様を基調にするもので、口唇部が内削ぎ状を呈するものがみられる。斜位に施された格子目が多くみられる。器厚は厚手のものと薄手のものがあり、胎土には白色砂粒を含むものがみられる。焼成は比較的良好で、淡棕褐色を呈しているものが多い。1154は、本類に伴う底部とみられる。

### 2 類 (1243～1246)

併行する細沈線が施されているもので、横位に施されているものが多い。斜位及び部分的に縦位に施されているものもみられる。口縁は、平縁のものや波状を呈するものがあり、口唇部に細沈線によるキザミ目が施されているものもみられる。胎土には、砂粒を含んでいる。

### 3 類 (1247～1251)

半截竹管状の施文具の外側を使用して施文したものとみられる、比較的深い太沈線が平行に施されているものである。沈線は、横位に施されているものと斜位に施されているものがある。口縁部は、上部が平坦な角頭状を呈している。胎土には、砂粒を含んでいる。

### 4 類 (1252～1255)

沈線と刺突文が組み合わされているものである。沈線は、細沈線と太沈線があり、横位あるいは斜位に施されている。刺突文は、半截竹管によるもの、棒状工具によるものがあり、太沈線のものには爪形文が施されている。器面は、比較的良好に研磨され、砂粒によるざらつきはみられない。

### 5 類 (1256～1259)

貝殻腹縁文が多用されているものである。細沈線によって区画された内側に、貝殻腹縁文が充填されているものが多い。1256は、口唇部に貝殻腹縁文が施されている。胎土には、砂粒を含み、器面は研磨されている。

### 6 類 (1260)

1点のみ出土した。1条の沈線を挟んで波状沈線が描出されているものである。胎土には、砂粒を多く含んでいる。

### 7 類 (1261)

Ⅲ群に伴うとみられるもので、浅い条痕文が斜格子状に施されている。胎土には、砂粒を含んでいる。

### 8 類 (1262)

Ⅲ類に属する底部で、鋭い尖底を呈している。胎土には砂粒を含み、器面は研磨されている。

## 第Ⅳ群 (第115図 1287～1297・1302～1315)

条痕文系土器群を一括した。

### 1 類 (1287・1288)

微隆起線によって幾何学的な区画を施した内側に、平行微隆起線を充填したものである。1287は、平行微隆起線間に横位の微隆起線が梯子状に充填されている。器面は研磨され、胎土には、砂粒を少量含んでいるほか、繊維も若干含んでいる。

#### 2類 (1289~1293)

沈線によって三角形や菱形状に区画し、内側に半截竹管の押しきによる沈線が充填され、交点に円形竹管による刺突文が施されているものである。口縁は、平縁のものと同様に波状を呈するものがあり、いずれも口唇部にキザミ目が施されている。1289~1291は、口縁下に微隆起線が施されているのに対して、1292は沈線が施されている。

なお、1289・1290は、地文に条痕文が施され、裏面は、いずれも条痕文が施されている。胎土には、すべて繊維を含んでいる。

#### 3類 (1294~1297)

区画内に、半截竹管による刺突文が充填されているものである。いずれも地文に条痕文が施され、区画は微隆起線による。口唇部には、キザミ目が施されている。胎土には、繊維を含んでいるほか、砂粒を多く含み、雲母末を含んでいるものもみられる。

#### 4類 (1302・1303)

棒状工具による大粒の刺突文が施されているものである。口縁は波状を呈し、口唇部にはキザミ目が施されている。胎土には、繊維、砂粒、雲母末を含んでいる。

#### 5類 (1304・1305)

太い半截竹管状施文工具の外側を使用して、口縁から縦位に太い沈線が施されているもので、表裏とも条痕文が施されている。1305は、沈線の下端に、半截竹管による刺突文が施されている。胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

#### 6類 (1306~1314)

表裏面に条痕が施されるものである。1306~1308は、口唇部にキザミ目が施されている。1311は、波状口縁を呈するものである。胎土には、繊維、砂粒を含んでいる。

#### 7類 (1315)

第IV群に属する底部で、胎土には繊維を含んでいる。

#### 第V群 (第116図 1341・1342・1345~1378, 第117図 1379~1403)

前期前半の土器群を一括する。

#### 1類 (1341・1342)

表裏面に条痕が施され、横位の隆帯に沿ってヘラ状工具による刺突文が施されるものである。胎土には、繊維を含み、器壁は粗くてもろい。

#### 2類 (1345・1346)

施文された縄文の端が、ループ状を呈しているものである。1345は、波状口縁を呈し、口縁に鋭いキザミ目が施されている。胎土には、繊維を含み、裏面は研磨されている。

#### 3類 (1347～1372)

縄文が施されているものであり、口縁から縄文が施されているもの、口縁直下に幅狭の無文帯を有しているものなどがある。縄文は、RLとLR撚りのものがあるほか、羽状を呈するものもみられる。口縁は、直線的に開くものと、軽く内彎するものがあり、口唇部は、にぶくとがるものと、上部が水平で角頭状を呈するものがある。波状を呈するもの、口唇部に粗い押圧が施されたものも若干みられる。1367は、半截竹管による連続刺突文、1368は、貝殻腹縁文が施されている。1369は、撚り合せの縄文である。裏面は、良く研磨され、胎土には繊維を含んでいる。

#### 4類 (1373～1388)

縄文を押圧しているもので、2条のものと3条のものがある。ほとんどが斜位の押圧で、羽状を呈しているものもみられる。口縁部の形状、胎土、裏面の調整は、3類と同じである。1387は、粗い木目状に押圧されている。

#### 5類 (1389～1398)

半截竹管による刺突文、押引文、沈線文が施されているものを一括した。1389、1390は、刺突文、1391、1392は押引文、1393～1397は沈線文が施されている。裏面は研磨され、胎土には繊維を含んでいる。

#### 6類 (1399～1402)

第V群に属する底部で、いずれも縄文が施されている。胎土には、繊維を含んでいる。

#### 7類 (1403)

半截竹管による波状沈線文が施されたもので、1点だけの出上である。胎土には、繊維を含んでいる。

### 第VI群土器 (第117図 1453～1458)

前期後半の諸磯b式土器である。

#### 1類 (1453～1457)

半截竹管による、爪形状の結節沈線文と平行沈線文によって文様を挿入するものである。口縁部は波状を呈し、口縁に沿って結節沈線文、平行沈線文が施されている。胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。裏面は、研磨されている。

#### 2類 (1458)

キザミ目を施した浮線文によって文様を挿入するもので、1点だけの出上である。浮線文間には、棒状工具による刺突文が施されている。器面は、比較的研磨され、胎土には、多量の砂粒を含んでいる。

## 第Ⅷ群土器 (第117図 1460~1469)

前期後半の浮島系土器群を一括する。

### 1類 (1460~1464)

半截竹管による平行沈線によって文様を描出するものである。1460は、平行沈線文が全体的に施されているものである。1462~1464は、平行沈線文が格子目状に施されているもので、1462は、口縁直下に半截竹管による条線が施されている。器面は研磨され、胎土には砂粒を含んでいる。

### 2類 (1465~1469)

波状貝殻文が施されているものである。文様は、アナガラ属貝殻とハマグリの貝殻の腹縁をもって支点をかえて押しあて、連続させた波状貝殻文である。1465は、口唇部にキザミ目が施され口縁直下には、貝殻によるえぐりが施されている。器面は研磨され、胎土には砂粒を含んでいる。

## 第Ⅷ群土器 (第118図 1478~1502)

中期初頃の土器群を一括する。

### 1類 (1478~1486)

地文に縄文が施されず、半截竹管により文様を描出されるものである。隆帯と半截竹管による平行沈線文、結節沈線文によって矩形あるいは三角形に区画しているものが多くみられる。口縁は、平縁のものと波状を呈するものがあり、内彎しながら立ち上がるものが多い。1486は、浅鉢形土器の口縁部で、玉抱き三叉文が施されている。胎土には、砂粒を含んでいるが、比較的緻密で、器面も十分調整されている。胎土に雲母を含んでいるものが多い。

### 2類 (1487~1502)

地文に縄文が施されているものである。地文に縄文を施し、半截竹管による沈線文、結節沈線文によって区画されたものと、縄文のみが施されたものがある。1494、1495は、肥厚させた口縁と、口縁下に貼付した隆帯上に縄文が施されている。1499、1500には、縦位の結節文がみられる。器面は比較的研磨され、胎土には砂粒を含むほか、雲母末を含んでいるものもある。

## 第Ⅸ群土器

中期前葉から中葉にかけての阿玉台式土器群である。

### 1類

阿玉台lb式に比定できるもので、窓枠状区画をなす隆帯に沿って、1列の結節沈線文が施されたものである。器形は、底部から若干開きながら立ち上がり、口縁部が内彎するものが多い。口縁は、波状を呈するものもみられるが、突起や扇状肥手を有するものが多い。文様は、枠状の区画をなす隆帯に沿って結節沈線文や連続刺突文が施され、さらに波状沈線文、爪形文などが加えられている。ヒダ状の指圧痕がみられるものもある。胎土には、雲母・砂粒が含まれている。

### 2類

阿玉台Ⅱ式に比定できるもので、隆帯に沿って、複列の結節沈線文が施されたものである。形態は、口縁部の内彎度合いが増し、大きくカーブして胴部に続くものが多くなる。口縁は、平縁のものもみられるが、波状を呈する口縁には発達した扇状把手や山形状の把手を有するものがみられ、口縁内側の稜も拡大してくる。文様は、隆帯による区画が口縁部から胴部にも及び、波状沈線文、平行沈線文、爪形文、キザミ目文などが施されている。器面は良く調整され、胎土には雲母末・砂粒を含んでいる。

#### 第Ⅹ群土器（第118図 1559～1569）

中期中葉の勝坂式土器を一括する。

##### 1類

地に縄文を施さず、隆帯の区画に沿って結節沈線文が施されるものである。形態は、筒形の胴部から大きく外傾し、直立する口縁部に至る。文様は、隆帯による区画内に、渦巻状や三角形に隆帯を貼付し、隆帯に沿って1ないしは2列の結節沈線文を施している。器面は、良く調整され、胎土には、砂粒のほか雲母末を含んでいるものもある。

##### 2類

地に縄文を施さず、半截竹管による平行沈線文、刺突文が施されているものである。形態は、無文帯の口縁部が軽く外反するものである。文様は、幅広の隆帯によって区画し、半截竹管による平行沈線文、円文、刺突文を施したものである。胎土には、砂粒を含んでいる。

##### 3類（1559～1568）

地に縄文を施されているもので、爪形文が施されているものである。形態は、円筒形を呈するものとみられ、幅広の爪形文によって文様が描出されている。また、三叉文や円形の磨消文、沈線文などもみられる。裏面は、研磨され、胎土には砂粒を含んでいる。

##### 4類（1569）

第Ⅸ群に属する有孔鋳付土器で、器壁を貫通する孔を鋳上部の直上に穿っている。文様は認められない。器面は研磨され、胎土には砂粒を含んでいる。

#### 第Ⅺ群土器（第119図 1575～1584）

中期後葉の加曾利E式土器を一括する。

口縁部を沈線によって楕円形に区画し、区画内に縄文を施しているものが多い。胴部には、2本の沈線によって区画した磨消帯を垂下させているものもみられる。全面に縄文が施されているものもある。

#### 第Ⅻ群土器（第119図 1604～1616）

後期前半の称名寺式土器を一括する。

##### 1類（1604～1611・1613）

沈線と縄文によって文様を描出するものである。器形をうかがえるものは少ないが、胴部上半でくびれ、口縁部は内彎し、口唇部を内側へ肥厚させているものが多くみられる。器面は研磨され、胎土には砂粒を含んでいる。

2類 (1612)

沈線と縄文に刺突文を加えて、文様を描出するもので、他は1類と同じである。

3類 (1614～1616)

沈線と刺突文によって文様を描出するものである。1類のように縄文を施すかわりに刺突文を施すもので、文様意匠は同じ効果を生んでいる。刺突は、小さな凹形を呈するもの、三角形を呈するものなどがみられる。器面は、研磨され、胎土には砂粒を含んでいる。

第Ⅲ群土器 (第120図 1639～1655)

後期前半の壺之内式を一括する。

1類 (1639～1641・1652)

地文に縄文を施して、細い沈線によって文様を構成するものである。半截竹筥による平行沈線を、横位、縦位及び斜位に施している。裏面は研磨され、胎土には砂粒を含んでいる。

2類 (1643)

地文に縄文を施して、太い沈線によって文様を構成するものである。波頂部から波状沈線を垂下させている。

3類 (1644～1649)

沈線によって区画した磨消帯によって文様を構成するものである。口縁部は無文帯で、器面は研磨されている。胎土には、砂粒を含んでいる。

4類 (1650・1651・1653～1655)

その他の土器を一括する。

第Ⅳ群土器 (第120図 1659～1661)

後期中葉から後葉の土器を一括する。

1類 (1659)

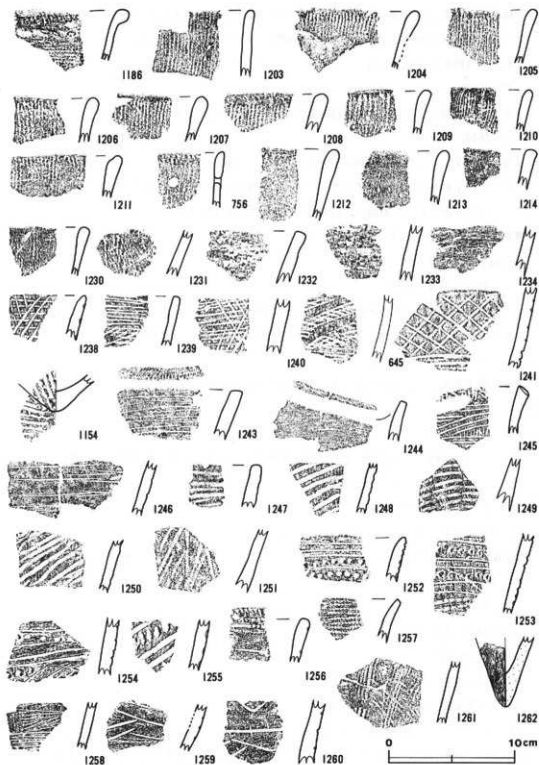
加曾利B式の土器で、1点だけの出土である。

2類 (1660・1661)

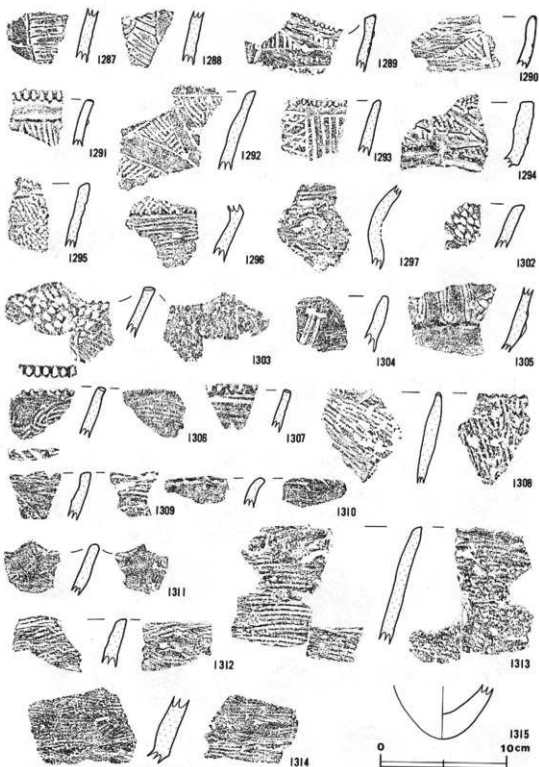
安行Ⅱ式の土器で、2点だけの出土である。

ミニチュア土器 (第120図 1663・1664)

1663は、口径5cm、器高7.2cm、底径3cmで、小孔を穿った2対の突起を有している。1664は、口径3.7cm、器高1.8cm、底径2.9cmのものである。第Ⅲ群土器に属するものと考えられる。

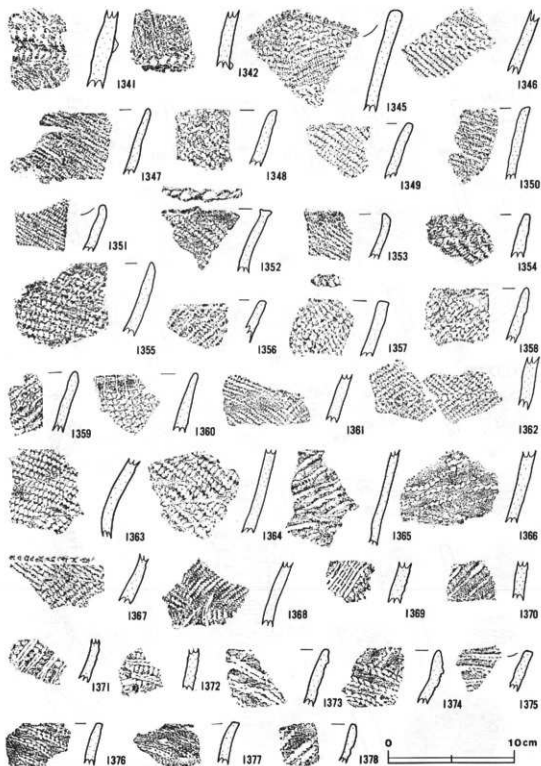


第114图 包含层出土土器拓影图(1)

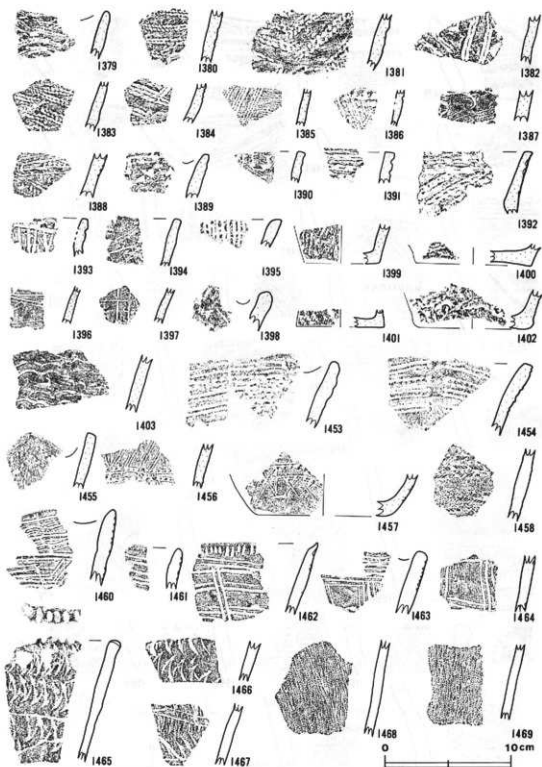


第115图 包含层出土土器拓影图(2)

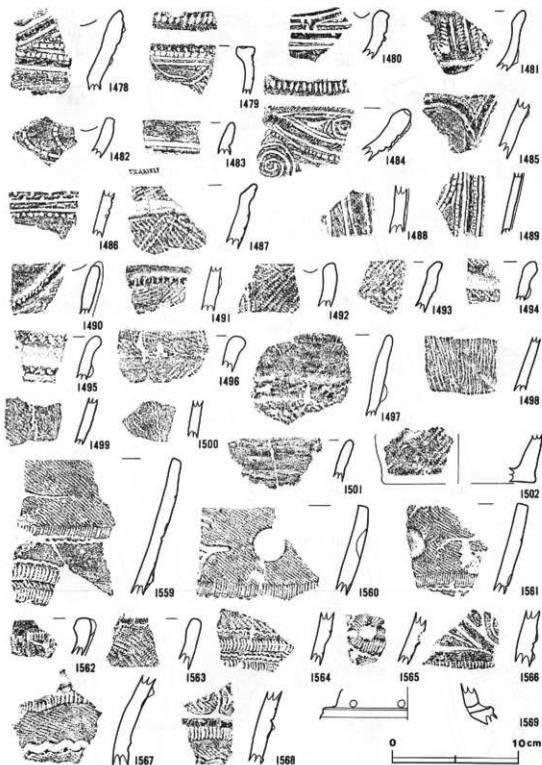




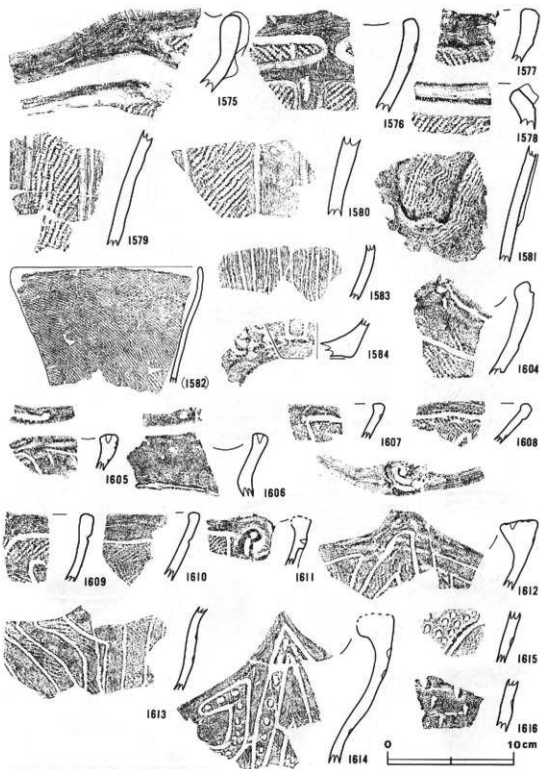
第116图 包含层出土土器拓影图(3)



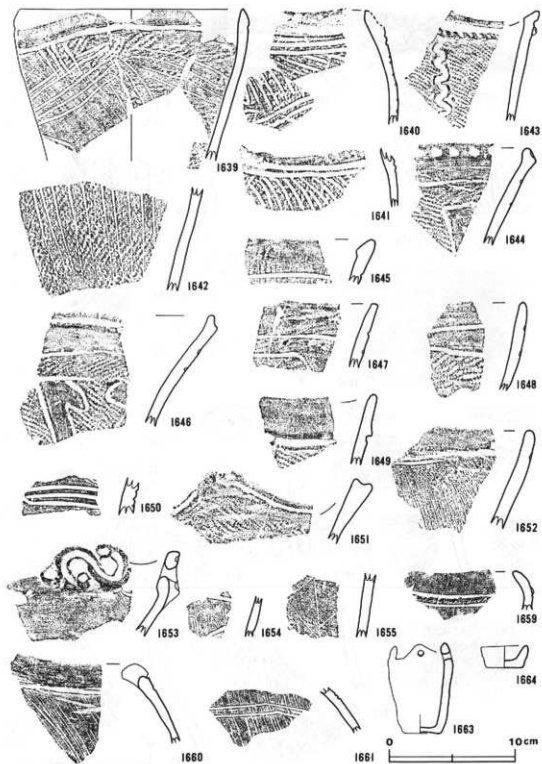
第117图 包含层出土土器拓影(4)



第118图 包含层出土土器拓影图(5)



第119图 包含层出土土器拓影图(6)



第120图 包含層出土土器拓影图(7)

## 7. 土製品

土製品は、遺構の内外を問わず、全てここで取り扱い、一覧表に掲載した。土製品としたものは、土器片鏟1点、土製円板34点、不明土製品2点である。

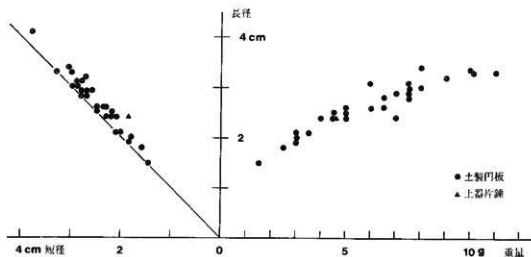
### (1) 土器片鏟 (第122図 DP1)

15号竪穴住居跡の覆土下層から出土したDP1の1点のみで、形態は小判形を呈している。深鉢形土器の胴部片を用い、外周部は磨られ、長径方向の両端に抉りが認められる。

### (2) 土製円板 (第122図 DP2~35)

土製円板は、34点確認でき、これらは縄文時代の住居跡、土坑及びその周辺からのみ出土している。形状はほぼ円形を呈し、外周部は良く擦られているものが多い。使用部位は、全て胴部片で、無文のものが多い。時期の判別できるものは縄文時代中期の阿玉台式に属する。

法量的には、長径で1.5~4.1cmのものが認められるが、2~2.5cm, 2.8~3.4cmにまとまりがみられる。重量的には、1.5~14.5gと差が認められるが、大部分は3~5g, 6~8gにまとまりがある。



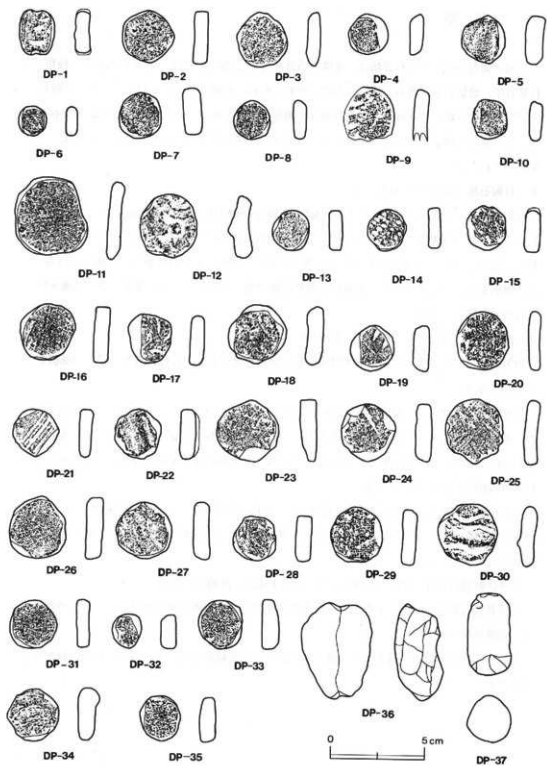
第121図 土製円板・土器片鏟の法量・重量分布

### (3) 不明土製品 (第122図 DP36・37)

不明土製品としたものは2点だけで、DP36は粘土塊状を呈し、指頭痕がみられる。胎土には、雲母末、砂粒を含み阿玉台式土器と同質である。DP37は棒状を呈し、胎土には砂粒が多く含まれている。用途等は明らかでない。

表2 土製品一覧表

遺物番号	名称	出土地点	法 量 (cm)			重量 (g)	使用部位	備 考
			最大長	最大幅	最大厚			
DP 1	土器片 鉢	15号住居跡	2.4	1.85	0.9	4.5	胴 部	
2	土 器 円 板	11号住居跡	2.8	2.7	0.8	6.5	胴 部	
3	*	*	2.9	2.6	0.8	5	*	
4	*	13号住居跡	2.1	2.1	0.8	3.5	*	
5	*	*	2.5	2.2	0.9	(5.5)	*	一部欠損
6	*	16号住居跡	1.5	1.45	0.55	1.5	*	
7	*	*	2.4	2.2	1.05	7	*	
8	*	*	1.9	1.85	0.7	3	*	
9	*	17号住居跡	(2.7)	(2.6)	0.9	(8.5)	*	一部欠損
10	*	*	2.0	1.8	0.6	3	*	外周は打ち欠いただけ
11	*	21号住居跡	4.1	3.8	0.7	14.5	*	
12	*	24号住居跡	3.3	3.0	0.9	11	*	
13	*	235号 土坑	2.1	2.0	0.7	3.5	*	
14	*	236号 土坑	2.1	2.1	0.7	3	*	
15	*	367号 土坑	2.4	2.1	0.8	4	*	
16	*	404号 土坑	3.0	2.9	0.8	7.5	*	
17	*	F6b6	2.6	2.3	0.7	5	*	
18	*	F7a7	2.9	2.7	1.0	7.5	*	
19	*	I513	2.4	2.3	0.8	5	*	
20	*	*	3.1	2.8	0.7	6	*	
21	*	I513	2.5	2.5	0.7	4.5	*	
22	*	I6a3	2.6	2.5	1.05	6.5	*	
23	*	J5c7	3.3	3.3	0.85	10	*	
24	*	J5d6	3.1	2.9	0.9	7.5	*	
25	*	J6b2	3.4	3.05	0.7	8	*	
26	*	K5b8	3.3	3.0	0.9	10.5	*	
27	*	K5b9	3.0	3.0	0.85	8	*	
28	*	L5b6	2.4	2.2	0.8	5	*	
29	*	L5f9	2.9	2.8	0.75	7	*	
30	*	L5g0	3.2	3.2	1.05	9	*	
31	*	L6a2	2.5	2.5	0.65	5	*	
32	*	L615	2.8	1.6	0.8	2.5	*	
33	*	*	2.6	2.35	0.8	6	*	
34	*	L6j1	2.8	2.8	1.1	7.5	*	
35	*	M6e5	2.4	2.2	0.8	4.5	*	
36	不明土製品	11号住居跡	5.1	3.8	2.6	39	*	
37	*	429号 土坑	4.3	2.5	2.35	26	*	



第122图 土製品実測図



## 8. 石器

今回の調査で出土した石器類は、遺構の内外を含めて158点である。これらの石器の種類には、打製石斧、磨製石斧、磨石、敲石、石皿、凹石、台石、石錘、スクレーパー、スタンプ形石器、凡字形石器、石鏃、球状耳飾り、垂れ飾り、線刻礫などがある。これらの石器の中には小片もあり、その全てを図示することは困難であることから、図示できなかったものについては、一覧表を参照されたい。

### 1 打製石斧 (第123図 Q1~4)

打製石斧は、4点のみの出土である。Q1は、扁平な礫を打ち欠いて刃部を作りだしただけのもので、あるいは礫器とすべきかも知れない。Q2は分銅形で、Q4もこれに類するものとみられる。Q2は、刃部が頭部より若干広く、薄手である。両面とも、自然面を多く残している。Q3は、撥形を呈し、厚手である。表面には調整剝離が加えられているが、裏面は全く剝離が施されず自然面を残している。

### 2 磨製石斧 (第123図 Q5~17, 第124図 Q18~24)

磨製石斧は、20点出土し、定形式磨製石斧、短冊形磨製石斧、乳棒状磨製石斧、局部磨製石斧に分類できる。

定形式磨製石斧には、Q14、Q15、Q19、Q24を除く17点が相当する。形状は、全体的に丸味をもち、明瞭な稜をもたないQ6、Q7、Q9、Q21と、明瞭な稜を有するQ5、Q8、Q10~13、Q16~Q18、Q20、Q22、Q23とに分けられる。刃部先端の形状は、比較的弧状を呈するものが多いが、Q5、Q17は直線的な刃部をなしている。

短冊形磨製石斧には、Q15、Q19が相当する。Q15は丸味をもち、刃部も弧状を呈している。両面に自然面を若干残している。Q19は、片刃状を呈し、頭部寄りの側縁部に、断ち切ったような面取りがみられる。

乳棒状磨製石斧は、Q14の1点のみで、刃部先端は、直線的である。

局部磨製石斧は、Q24の1点のみで、刃部の片面だけに研磨が施されている。一方の側縁部には、剝離調整が加えられている。

石質は、砂岩が12点と最も多く、他に安山岩3点、閃緑岩2点、チャート、珩岩、緑泥片岩各1点である。

表3 石斧一覽表

遺物番号	名称	出土地点	法 量 (cm)			重量 (g)	石 質	遺存状態	形 状	備 考
			最大長	最大幅	最大厚					
Q 1	打製石斧	SI-3	8.3	4.5	2.0	110	安山岩	完 形		第123図
2	+	F4g2	10.0	6.0	1.8	146	安山岩	+	分 割 形	+
3	+	E7c3	9.8	5.2	3.0	177	流紋岩	+	+	+
4	+	N5a9	( 9.1)	7.7	3.0	(259)	片麻岩	一部欠損	磨 形	+
5	磨製石斧	SK-386	(10.6)	5.1	3.4	(321)	閃綠岩	頭部欠損	定形 直刃	+
6	+	SX-2	(6.8)	4.1	2.9	(112)	砂 岩	+	定形 丸刃	+
7	+	D7ea	(8.9)	(4.5)	3.5	(181)	安山岩	刃部欠損	定形	+
8	+	E4b3	(9.8)	(6.7)	(2.7)	(225)	砂 岩	頭部・刃部欠損	定形	
9	+	E7a6	(7.1)	4.6	3.5	(164)	安山岩	下半部欠損	定形	第123図
10	+	E7b7	(4.2)	(3.5)	(0.9)	( 15)	砂 岩	破 片	定形 丸刃	
11	+	E8d1	(6.0)	(5.3)	2.8	(109)	珉 岩	下半部欠損	定形	第123図
12	+	G6j6	(6.2)	4.9	2.5	(114)	閃綠岩	上半部欠損	定形 丸刃	+
13	+	J5er	(6.2)	(4.3)	(0.7)	( 39)	砂 岩	破 片	定形	
14	+	J5i1	8.4	3.4	1.8	80	砂 岩	刃部欠損	乳棒状 直刃	第123図
15	+	J6as	8.8	5.7	3.3	251	砂 岩	頭部欠損	短冊形 丸刃	+
16	+	K5gc	(5.0)	(4.1)	(1.4)	( 39)	砂 岩	破 片	定形	
17	+	K6c1	(7.9)	5.1	3.2	(189)	砂 岩	頭部欠損	定形 直刃	第123図
18	+	K6i1	(5.7)	4.6	3.0	(120)	安山岩	上半部欠損	定形 丸刃	第124図
19	+	L5ca	9.3	4.5	2.3	139	緑泥片岩	完 形	楕圓形 丸刃	+
20	+	L6ea	(5.2)	5.0	2.9	( 29)	チャート	下半部欠損	短冊形	+
21	+	L6es	(5.6)	3.7	2.8	( 71)	砂 岩	+	定形	+
22	+	L6h7	(8.6)	(3.4)	3.0	( 75)	砂 岩	破 片	定形 丸刃	+
23	+	M6cs	(5.9)	(3.9)	(1.9)	( 57)	砂 岩	+	定形	
24	+	N5as	9.5	4.1	1.9	105	砂 岩	完 形	局部磨製石斧	第124図

## 3 磨石 (第124~128図 Q25~86)

磨石は、62点と最も多く出土し、礫面に磨き痕が認められるものであるが、礫面に凹みを有するもの、敲打痕が認められるものも、これに含めた。形態は、円礫ないしは棒状礫を素材とし、平面の形状が円形あるいは楕円形状を呈するものが多い。Q44、Q74は、隅丸方形形状を呈している。

表4 磨石一覧表

(1)

遺物番号	出土地点	法 量 (cm)			重量 (g)	石 質	磨石状態	形 状	使用部位	備 考
		最大長	最大幅	最大厚						
Q 25	S1-2	6.8	5.5	4.8	250	砂 岩	完 形	楕円形	(外 周)	第124回
26	S1-6	(4.9)	4.4	4.2	(119)	花崗岩	破 片			
27	S1-11	7.65	3.3	1.95	151	流紋岩	完 形	短筒形	(外 周)	
28	S1-11	(3.2)	(2.3)	(1.5)	(13)	安山岩	破 片			
29	S1-13	(10.5)	8.2	5.2	(660)	安山岩	一部欠損	楕円形	(全 面)	第124回
30	S1-13	(6.5)	(4.6)	(2.4)	( 80)	安山岩	破 片		( * )	
31	S1-15	9.9	9.2	6.1	792	安山岩	完 形	円形	( * )	第124回
32	S1-15	(7.3)	(3.6)	2.9	(111)	砂 岩	欠 損		(外 周)	
33	S1-16	6.8	6.1	4.1	233	安山岩	完 形	円形	(全 面)	第124回
34	S1-17	8.5	7.0	3.9	280	安山岩	完 形	(長方形)	側 面	*
35	S1-22	7.1	5.7	4.2	(257)	砂 岩	一部欠損		(側 面)	
36	S1-24	(5.3)	7.3	5.4	(296)	アフライト	片 残		(全 面)	
37	SK-65	(10.3)	8.6	4.0	(397)	斑 輝 岩	一部欠損	楕円形	( * )	第125回
38	SK-71	11.7	8.0	6.0	841	砂 岩	完 形	(楕円形)	三側面	*
39	SK-315	(6.3)	(6.5)	3.6	(190)	珉 岩	片 残		(全 面)	
40	SK-426	(5.7)	(3.4)	(1.6)	( 30)	砂 岩	破 片		( * )	
41	SS-2	(6.7)	(3.8)	2.2	( 72)	砂 岩	*		( * )	
42	SS-4	16.0	11.1	6.4	1,200	安山岩	完 形	楕円形	(側 面)	同小 第125回
43	SS-4	(5.5)	8.5	4.0	(206)	安山岩	片 残		(全 面)	
44	D51a	5.5	6.0	3.4	(152)	安山岩	一部欠損	方 形	全 面	同小 第125回
45	D7h3	(5.0)	(6.7)	(2.2)	( 95)	安山岩	破 片		*	
46	E7ca	(6.6)	(5.8)	(4.6)	(328)	安山岩	破 片		*	
47	E7ce	(4.0)	(3.3)	(2.3)	( 18)	安山岩	破 片			
48	E7es	(10.1)	(7.8)	(4.3)	(391)	安山岩	一部欠損	楕円形	全 面	
49	E7f7	(6.8)	3.5	3.2	(187)	安山岩	片 残	*	*	
50	E7ia	(6.4)	(4.6)	(1.2)	( 45)	安山岩	破 片		*	
51	E7ia	9.7	7.0	5.0	392	安山岩	完 形	楕円形	*	同小 第126回
52	E7ja	9.6	8.3	6.3	624	流紋岩	*	円形	両面と側面	*
53	F6ja	(6.3)	(4.0)	(2.3)	( 65)	流紋岩	破 片		全 面	
54	F7cs	7.0	10.3	4.8	550	安山岩	完 形	楕円形	*	同小 第126回
55	F7ct	7.7	7.1	4.6	196	安山岩	完 形	円形	*	*

遺物番号	出土地点	法 規 (cm)			重量 (g)	石 質	遺存状態	形 状	使用部位	備 考
		最大長	最大幅	最大厚						
Q 56	G6c9	(5.9)	(4.0)	3.7	( 61)	燧 岩	破 片		全 面	
57	G6e5	(8.2)	(7.5)	3.3	( 248)	安山岩	*	*		
58	G7a1	10.5	5.5	3.2	190	安山岩	完 形	短筒形	*	第127回
59	G7b1	12.9	5.7	4.3	484	安山岩	*	*	*	同办 第128回
60	G7c1	(5.5)	(5.7)	(3.7)	( 127)	安山岩	破 片		*	
61	H5c8	(5.8)	7.2	5.3	( 241)	安山岩	*		*	
62	H5c8	(5.5)	(4.1)	(2.1)	( 54)	安山岩	*		*	
63	H5e1	4.9	(5.5)	4.4	( 130)	安山岩	*		*	
64	H5e5	(7.8)	(2.6)	(2.2)	( 66)	安山岩	*		*	
65	H5g1	(4.2)	(3.0)	(4.5)	( 57)	安山岩	*		*	
66	H5g5	6.6	(3.9)	(3.9)	( 138)	安山岩	*		*	
67	H5i6	(4.5)	(4.0)	(4.3)	( 72)	砂 岩	*		*	
68	H5j1	9.9	7.1	4.9	545	安山岩	完 形	樽形	*	同办 第127回
69	H6c5	(5.2)	(3.9)	2.5	( 59)	砂 岩	破 片		*	
70	H6g1	(8.6)	(4.1)	(7.1)	( 219)	安山岩	*			
71	I5d5	(3.4)	(2.2)	(1.3)	( 16)	安山岩	*			
72	I5k5	(5.2)	(5.7)	(4.4)	( 62)	安山岩	*			同办
73	I5j3	12.8	10.2	5.9	1,150	安山岩	完 形	樽形	全 面	同办 第127回
74	J5j5	8.3	5.6	3.5	189	安山岩	*	方 形	*	第136回
75	J6b5	(5.5)	7.3	2.8	( 317)	安山岩	片 残		*	
76	K6a1	(6.5)	5.7	3.5	( 221)	安山岩	*		*	
77	L5f9	(3.0)	(1.8)	(1.7)	( 13)	安山岩	破 片			
78	L5i2	9.2	6.9	4.1	389	安山岩	完 形	樽形	両 面	第127回
79	L6c3	8.4	4.4	1.7	110	安山岩	*	樽形	*	
80	L6c7	(6.5)	(4.7)	(2.1)	( 70)	安山岩	破 片		全 面	
81	M5j9	(5.7)	(5.6)	4.1	( 229)	安山岩	片 残		*	
82	M6a5	(5.8)	(3.7)	5.1	( 100)	安山岩	破 片		*	
83	M6b1	5.9	5.6	3.9	193	安山岩	完 形	円 形	*	第128回
84	M6e2	(6.0)	(5.2)	2.6	( 122)	砂 岩	破 片		側 面	敲き
85	M6e7	(5.8)	8.3	4.3	( 280)	安山岩	片 残		全 面	
86	M6i2	9.0	7.2	4.2	402	流紋岩	完 形	樽形	*	第127回

磨面は、全面にみられるものが44点と最も多く、次いで四側面、両面の順で、片面と一側面、一ないしは三側面のものもみられる。凹みを有するものは9例で、両面あるいは片面に存在し、磨面と併存する例が多い。その位置は、器面の中央部に1ないしは数か所みられる。敲打痕が認められるものは、Q31、Q51、Q59、Q68、Q73の5例で、長径方向の両端ないしは一方の端に認められる。

法量は、完存品が少ないが、長径が5.9~16cmで4~10cmにまとまり、幅は3.2~11cmで5.5~7cmにまとまりをみせる。重量は、100~1,200gにわたり、150~200gと480~550gにわずかにまとまりがみられる。

石質は、安山岩が44点(71.0%)と多数を占め、以下砂岩の9点、流紋岩の4点、花崗岩、アブライト、斑輝岩、珉岩、燧岩の各1点である。

#### 4 敲石(第128図 Q88)

敲石は、3点出土しているが、完形品は1点である。これらは、棒状礫あるいは扁平な礫を用い、礫の一端に敲打痕が認められるものである。

表5 敲石一覧表

遺物番号	出土地点	法 長 (cm)			重量 (g)	石 質	遺存状態	形 状	使用部位	備 考
		最大長	最大幅	最大厚						
Q 87	E7bn	(5.2)	(3.9)	4.2	(110)	花崗岩	破片			
88	F3an	11.9	3.7	3.1	190	粘板岩	完形	棒状	一方の端	第128図
89	J6is	(5.7)	4.1	3.2	(106)	安山岩	破片		磨縁	

#### 5 石皿(第128~129図 Q92・93・95・99・106)

石皿は、18点出土しているが、完存品は2点で、残り16点は破片である。これらは、残された使用面の状態によって、使用面が片面のみのものと、両面にみられるものに分けられる。前者には、Q91、Q92、Q95~Q97、Q102、Q106が該当し、後者にはQ93が該当する。また、使用の度合によって、Q92、Q95のように使用面が緩やかに凹むものと、Q91、Q93のように比較的平坦なものとに分けられる。このような使用面あるいはその裏面に小さな凹みを有するものが4例みられる。凹みは、使用面にみられるものが1例(Q93)あるが、他は使用面の裏面にみられる(Q92、Q95、Q106)。

平面的な形状は、完存品が少ないことから詳細は明らかにできないが、Q92、Q93の完存品は長方形を呈している。他に楕円形を呈していたとみられるものにQ95がある。

石質は、安山岩が14点(77.8%)と多数を占め、他に片麻岩が2点、斑輝岩、雲母片岩が各1点ある。

表6 石皿一覽表

遺物番号	出土地点	法 量 (cm)			重量 (g)	石 質	遺存状態	形 状	使用部位	備 考
		最大径	最大幅	最大厚						
Q 90	SI-13	( 6.9)	7.5	(4.2)	(161)	安山岩	破片			
91	SI-18	(17.1)	(10.6)	2.5	(500)	片麻岩	+	平 皿	一 面	
92	SI-23	(10.9)	(12.9)	5.0	(670)	安山岩	+		+	裏面に凹み11
93	SK-163	18.0	18.8	7.2	4,450	斑 麻 岩	完 形	平 皿	二 面	凹み1
94	SK-65	( 8.7)	( 6.6)	1.5	(154)	雲母片岩	破片	+		凹み1
95	SK-286	43.6	29.4	9.8	17,050	安山岩	完 形	平 皿	一 面	徳川由凹み8、 裏面凹み15
96	F7bs	(12.1)	(13.5)	7.6	(749)	安山岩	破片		+	凹み8
97	F7es	(11.2)	( 9.8)	2.4	(465)	安山岩	+	平 皿	+	凹み1
98	H5gs	( 7.0)	( 4.7)	(1.7)	( 57)	安山岩	+			
99	I5da	(14.2)	(12.8)	(4.0)	(869)	片麻岩	+	平 皿		凹み2
100	I5je	( 6.8)	( 4.2)	4.0	(140)	安山岩	+			
101	J5ez	( 7.8)	( 4.8)	(6.6)	(161)	安山岩	+			
102	J5ga	( 9.0)	( 9.2)	(7.0)	(606)	安山岩	+		一 面	
103	K5ie	( 5.4)	( 3.4)	4.3	( 96)	安山岩	+			
104	K6ez	( 7.6)	( 5.7)	4.9	(283)	安山岩	+			
105	L5aj	( 6.5)	( 3.8)	(3.8)	( 52)	安山岩	+			
106	L5es	( 7.8)	(11.0)	8.0	(556)	安山岩	+		一 面	裏面に凹み2
107	L6ia	( 7.9)	( 5.4)	(3.5)	(212)	安山岩	+			

## 6 凹石 (第129図 Q108・113・114)

凹石は、12点出土し、うち完存品は1点で、残り11点は破片である。これらは、片面に凹みを残すものと、両面に残すものに分類できる。前者にはQ109～112、Q115～119が相当し、後者にはQ108、Q113、Q114が相当する。

凹みの数は、多いもので片面7か所みられ、両面では10か所みられるものがある。しかし、大部分は破片であるため、1～3か所だけのものが多い。

平面の形状は、明らかではないが、扁平な礫が多く用いられている。Q113は、石棒の二次利用である。

石質は、片麻岩が8点と多く、他に安山岩、雲母片岩が各2点である。

表7 凹石一覧表

遺物番号	出土地点	法 量 (cm)			重量(g)	石 質	遺存状態	形 状	凹み数	備 考
		最大長	最大幅	最大厚						
Q 108	SI-13	17.7	15.3	4.3	2,010	雲母片岩	光彫(台形)	扁平	5+1	第129区
109	SI-13	( 6.6)	( 5.8)	3.7	(195)	片麻岩	破片		2	
110	SK-297	(10.5)	( 8.3)	2.5	(280)	片麻岩	*	平 型	1	
111	SS-2	(10.5)	5.0	2.1	( 69)	片麻岩	*	*	1	
112	SS-2	( 6.0)	( 5.0)	1.5	(200)	片麻岩	*	*	1	
113	C5j	(15.0)	(10.3)	9.6	(2,260)	安山岩	*	(平円)	2+2	第129区
114	F7d	(15.5)	(12.6)	7.3	(620)	安山岩	*		7+3	*
115	G7es	( 8.8)	( 6.0)	2.7	(135)	雲母片岩	*		3	
116	I5de	( 9.3)	( 8.4)	5.6	(620)	片麻岩	*		2	
117	J5ac	( 8.6)	( 7.7)	2.4	(275)	片麻岩	*	平 型	1	
118	L6gy	( 9.0)	( 4.6)	1.3	( 91)	片麻岩	*	*	1	
119	M6cs	(10.9)	( 7.4)	( 2.3)	(243)	片麻岩	*		1	

## 7 台石 (第130区 Q120)

台石は、1点のみ出土し、24号竪穴住居跡と425号土坑から出土したものが接合している。形状は長方形の扁平な礫で、磨きなどの使用痕は確認できない。

表8 台石一覧表

遺物番号	出土地点	法 量 (cm)			重量(g)	石 質	遺存状態	形 状	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
Q 120	SI-21 SK-425	22.2	16.3	7.7	1,420	片麻岩	(完形)	長方形	第130区

## 8 スタンプ形石器・凡字形石器 (第130区 Q121・122・124~126)

スタンプ形石器は、5点出土し、うち3点が完存品である。これらは、棒状礫の一端が切断さ

表9 スタンプ形石器・凡字形石器一覧表

遺物番号	名 称	出土地点	法 量 (cm)			重量(g)	石 質	遺存状態	備 考
			最大長	最大幅	最大厚				
Q 121	スタンプ形石器	SI-16	(10.0)	6.5	6.0	(500)	石英礫岩	頭部欠損	第130区
122	*	E7fa	14.6	8.3	7.4	969	*	完 形	*
123	*	F7bo	( 9.0)	7.1	5.1	(310)	安山岩	頭部欠損	
124	*	H6ba	12.2	7.1	6.8	505	石英礫岩	完 形	第130区
125	*	M6aa	11.1	7.6	4.2	335	砂 岩	完 形	*
126	凡字形石器	G6e1	11.6	10.1	4.9	567	石英礫岩	完 形	*

れ、敲打面としているものである。側縁の一面ない二面には、敲打による潰しが施されている。

石質は、石英斑岩が3点で、安山岩、砂岩が各1点である。

凡字形石器としたものは、1点のみで、スタンプ形石器より扁平な礫の一端を、鋭く切断しているもので、平面形状は三角形を呈している。側縁には、スタンプ形石器と同様に敲打により潰しが施されている。

## 9 石錘 (第130図 Q127)

石錘は、1点のみ出土し、扁平な礫の短径方向の両端を打ち欠いたものである。

表10 石錘一覧表

遺物番号	出土地点	法 規 (cm)			重 量 (g)	石 質	遺存状態	形 状	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
Q 127	L5as	4.4	3.4	0.6	16	安山岩	完 形	楕円形	第130図

## 10 石鏃 (第131・132図 Q129-145)

石鏃は、未製品1点を含めて18点出土している。それらは、その形態によって次の3類に大別できる。

I類は、基部の抉込みが大きいもので、7点みられる。この7点は、平面形が二等辺三角形を呈するIa類と、三角形を呈するIb類に細分できる。Ia類には、Q128, Q131, Q140-Q143が相当し、Ib類には、Q135が相当する。Ia類のうち、Q128は抉込みが丸いのに対して、他は三角形状である。

II類は、基部の抉込みが小さいもので、5点みられる。この5点は、平面形が二等辺三角形を呈するIIa類、二等辺三角形状で側縁が丸味を有するIIb類および三角形を呈するIIc類に細分できる。IIa類にはQ132, Q133, IIb類にはQ130, IIc類にはQ134, Q144が、それぞれ相当する。

III類は、基部が平出なもので、Q137, Q138の2点みられる。

石質は、各類共にチャートが多く、チャートが12点、黒曜石が5点である。

表11 石鏃一覧表

遺物番号	出土地点	法 規 (cm)			重 量 (g)	石 質	遺存状態	形 状	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
Q 128	SI-5							脱落	
129	SI-7	2.5	1.6	0.4	1	チャート	完 形	無茎凹基 第131図	
130	SI-11	3.05	1.95	0.6	3.5	黒曜石	未製品	(無茎平基) *	
131	SI-24	2.4	1.9	0.7	(2.5)	チャート	両側欠損	無茎凹基 *	
132	SK-285	4.45	1.75	0.3	3.5	*	完 形	無茎凹基 *	
133	D5ce	2.2	1.6	0.5	1.5	*	完 形	無茎凹基 *	



遺物番号	出土地点	法 量 (cm)			重量 (g)	石 質	遺存状態	形 状	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
Q 134	F7c <sub>3</sub>	1.75	1.3	0.2	(0.5)	黒曜石	片脚欠損	無底凹基	第131図
135	H31c	1.9	(1.7)	0.3	(1.5)	＊	片脚欠損	無底凹基	＊
136	I6e <sub>9</sub>	1.7	1.5	0.2	0.5	チャート	完 形	無底凹基	＊
137	H6g <sub>3</sub>	2.1	1.05	0.25	0.5	＊	完 形	無底凹基	＊
138	I5g <sub>7</sub>	2.4	1.8	0.7	2.5	チャート	完 形	無底凹基	第132図
139	J5a <sub>0</sub>	2.2	1.7	0.5	2	＊	完 形	無底凹基	＊
140	J6d <sub>6</sub>	2.4	1.7	0.3	1	黒曜石	完 形	無底凹基	＊
141	L5a <sub>5</sub>	2.9	1.8	0.5	1.5	チャート	完 形	無底凹基	＊
142	L5f <sub>7</sub>	2.8	1.85	0.55	2	＊	完 形	無底凹基	＊
143	L6e <sub>7</sub>	3.2	2.1	0.5	(2.5)	黒曜石	片脚欠損	無底凹基	＊
144	L6d <sub>1</sub>	2.6	1.5	0.6	1.5	チャート	完 形	無底凹基	＊
145	M6a <sub>8</sub>	1.7	1.4	0.3	1	＊	完 形	無底凹基	＊

## 11 スクレーパー (第132・133図 Q146～150)

剥片の側縁部あるいは末端に、スクレーパー・エッジを作り出したもので、5点出土している。いずれも、縦長剥片に急角度の調整剝離を施したものである。

石質は、黒曜石が4点、頁岩が1点である。

表12 スクレーパー一覽表

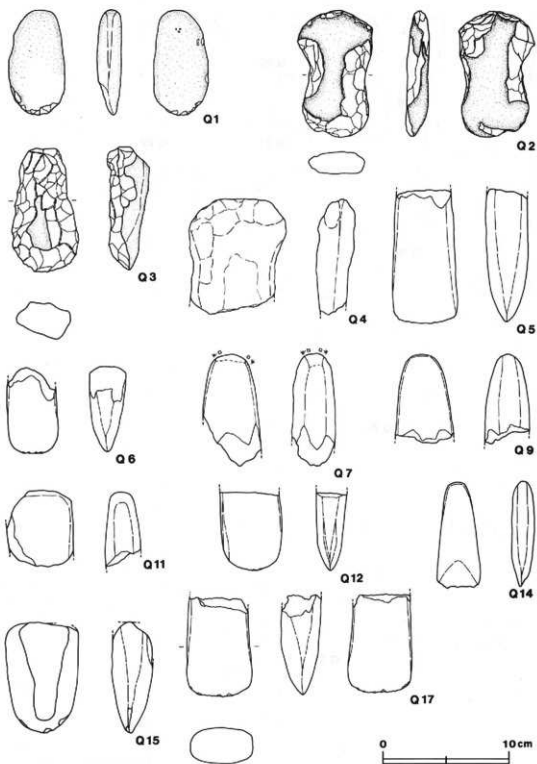
遺物番号	出土地点	法 量 (cm)			重量 (g)	石 質	遺存状態	備 考
		最大長	最大幅	最大厚				
Q 146	S1-16	3.1	2.5	0.9	4.5	黒曜石	完 形	第132図
147	SK-67	3.4	2.1	1.1	(6)	頁 岩	欠 損	第133図
148	I5j <sub>7</sub>	4.3	3.3	1.1	16	黒曜石	完 形	＊
149	I17c <sub>1</sub>	(2.8)	1.6	1.1	(4)	黒曜石	欠 損	＊
150	J6d <sub>6</sub>	(1.8)	(1.0)	0.7	(1.5)	黒曜石	欠 損	＊

## 12 石製品 (第133図 Q151～153)

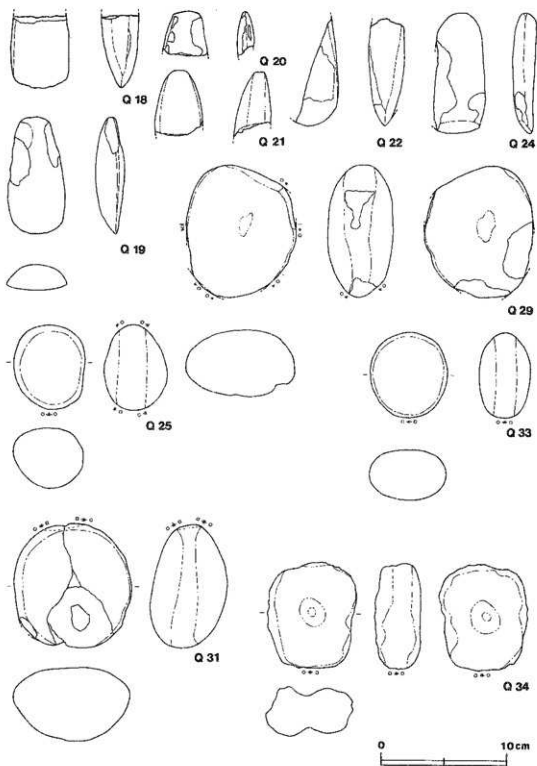
石製品としては、塊状耳飾・垂れ飾・線刻鏢各1点である。

表13 石製品一覽表

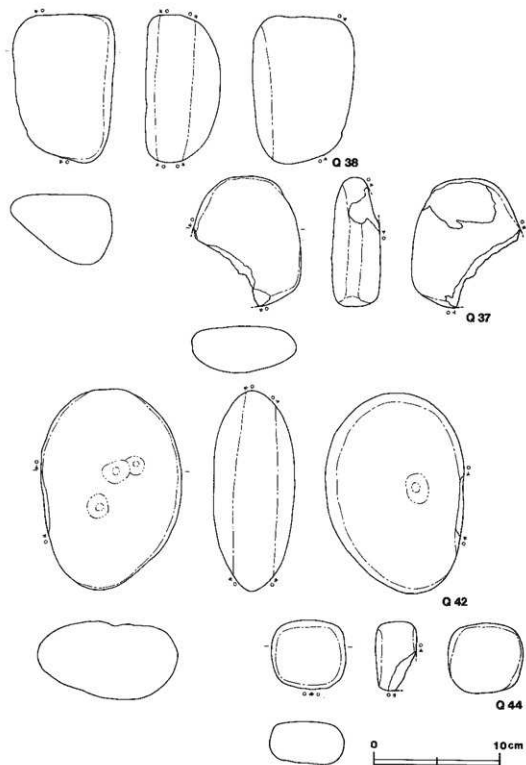
遺物番号	名 称	出土地点	法 量 (cm)			重量 (g)	石 質	遺存状態	備 考
			最大長	最大幅	最大厚				
Q 151	塊状耳飾	S1-2	(2.8)	(2.7)	0.5	(6.5)	滑 石	片 欠 損	第133図
152	垂れ飾	S1-7	5.1	1.4	0.6	6.5	滑 石	完 形	＊
153	線刻鏢	I5a <sub>0</sub>	9.5	4.3	1.3	54	安山岩	完 形	＊



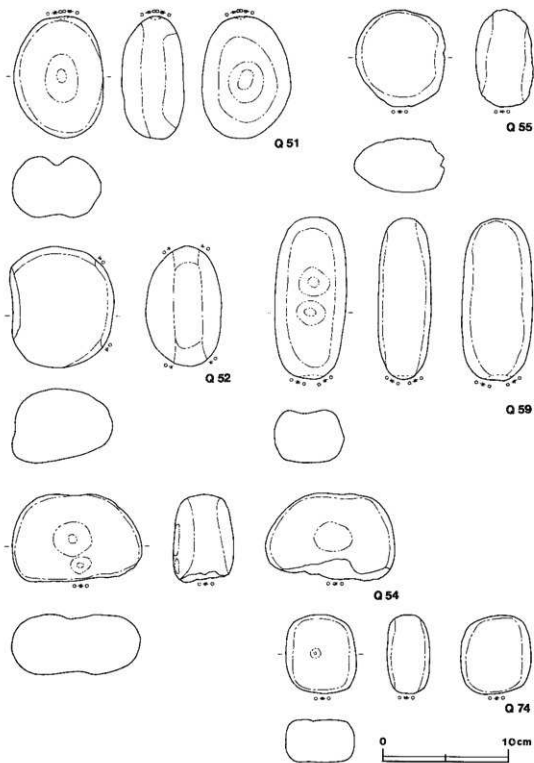
第123图 石器实测图(1)



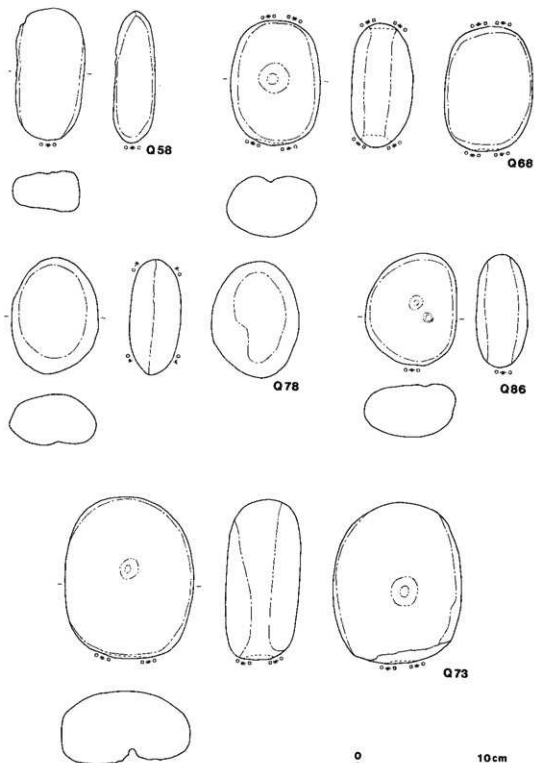
第124图 石器实例图(2)



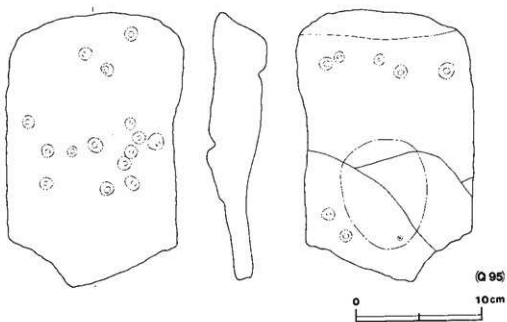
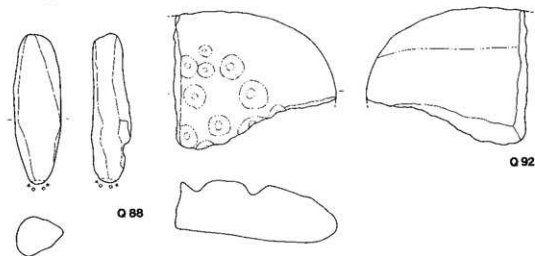
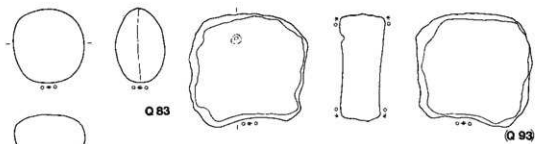
第125图 石器实测图(3)



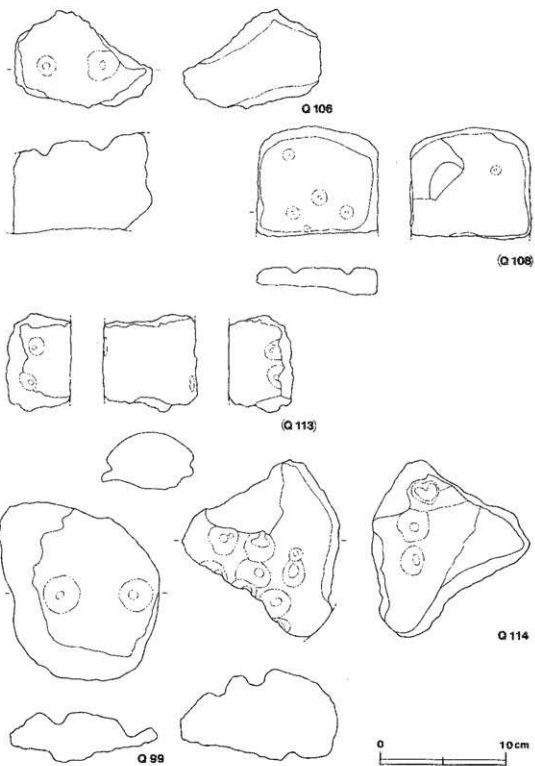
第126图 石器实测图(4)



第127图 石器实测图(5)

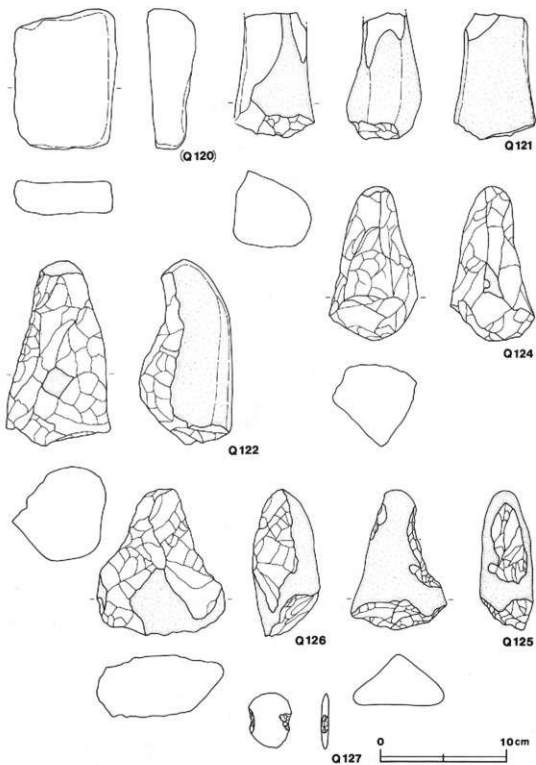


第128图 石器实测图(6)

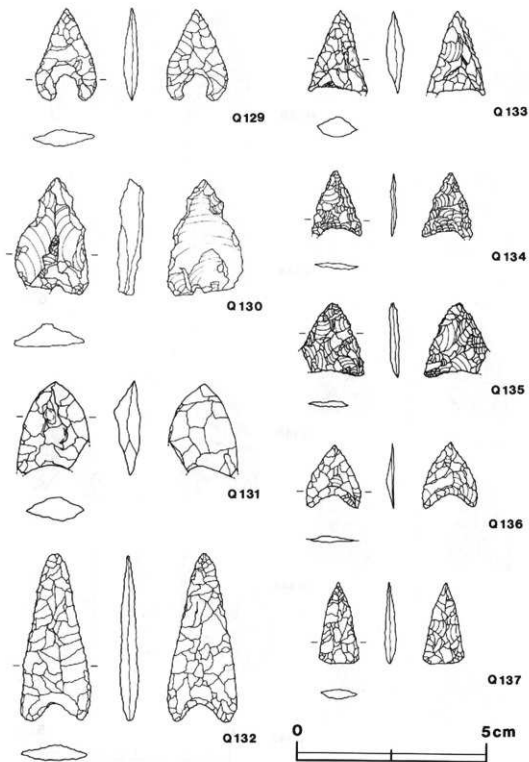


第129图 石器实测图(7)

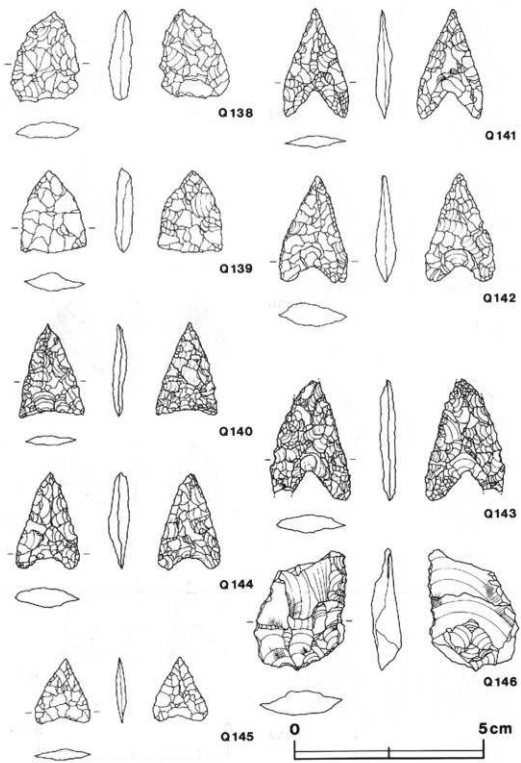




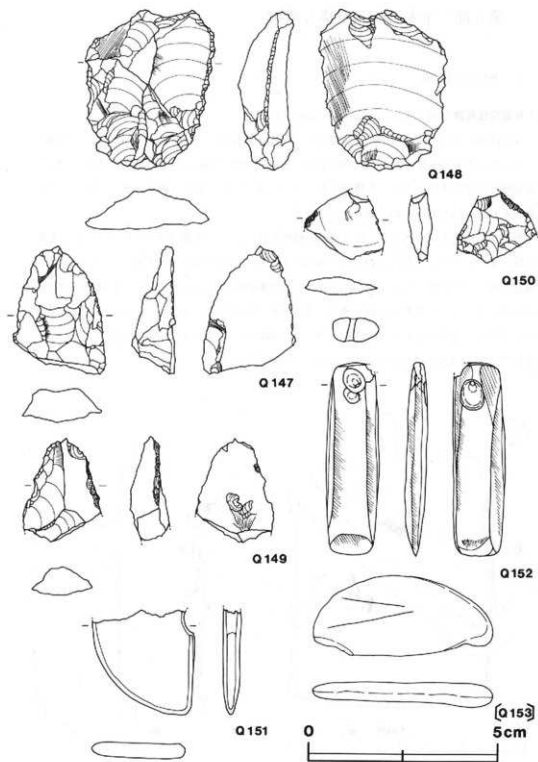
第130图 石器实测图(8)



第131图 石器实测图(9)



第132图 石器实测图(10)



第133图 石器实测图(II)

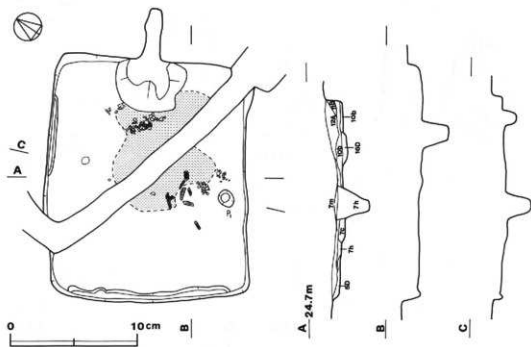
### 第3節 平安時代の遺構と遺物

#### 1. 竪穴住居跡

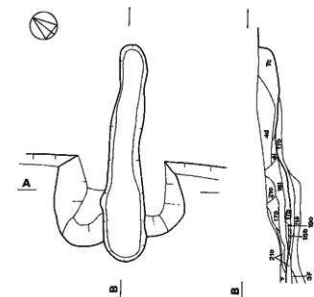
##### 1号竪穴住居跡 (旧1号) (第134・135図 PL29)

本跡はD6e8区を中心に確認され、標高24.4m程の平坦面に立地する。平面形は主軸方向N-56°-Eを指す隅丸長方形を呈し、規模は長軸(北東-南西)3.9m、短軸(北西-南東)3.2mを測り、北東壁のほぼ中央部にカマドが構築されている。東コーナー部から西コーナー部にかけて後世の溝が走り、本跡を35cmの幅で掘り込んでいる。

覆土は暗褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。床面はロームブロックを含む褐色土の貼り床で、ローム上面から40cm程の掘方の上に10~15cmに褐色土を充填している。床面は、中央部に向ってやや低くなり、外周部を除いては比較的踏み固められている。住居跡のほぼ中央部は、2.0×1.7cmの不定形に床面が焼け、木炭が若干みられた。壁は10~15cmの高さでほぼ垂直に立ち上がり、南西壁下および北西壁下の一部に幅10cm、深さ5cmの壁溝が存在する。ピットは南東壁寄りから径25cm、深さ21cmのものが1か所確認されただけである。

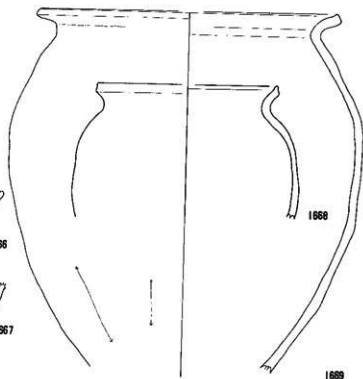
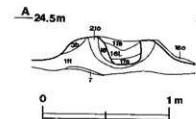


第134図 1号竪穴住居跡実測図



カマドは焚口から煙道部まで1.72m、  
 焚口の内法0.34m、外法1.02mで、壁  
 外へ0.91m掘り込んでいる。焚口は床  
 面とほぼ同じ高さで、火床からなだら  
 かに立ち上がり煙道へ続く。煙道は幅  
 0.24m、長さ1.3mである。両袖および  
 火床は、粘土質の褐色土で構築され、  
 袖部の内側および火床は熱を受け、10  
 cmの厚さに焼土化している。

遺物は、カマド前面と西壁付近の床  
 面および覆土下層から須恵器、土師器  
 が出土している。これらは、本住居に  
 伴うものか、住居廃絶時に遺棄された  
 ものとみられる。



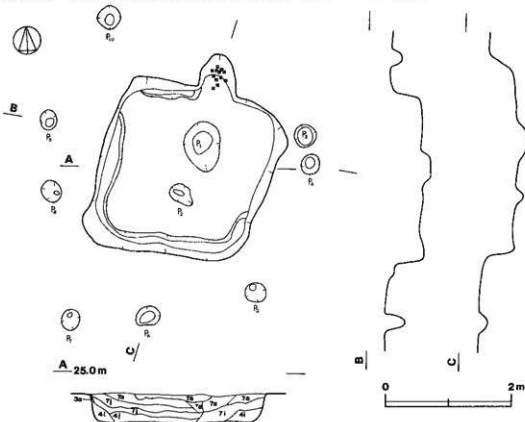
第135図 1号竪穴住居跡カマド実測図・出土土器実測図

出土遺物観察表 (第135図)

番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1666	須恵器 坏	A 14.4	体部は直線的に立ち上がり、口縁部端部は丸く取られている。 底部は、やや厚みをもつ平底で、体部との境は丸味をもっている。	水挽き整形。 底部は回転ヘラ切り後、不定力向のナデ調整。内・外面の水挽き痕は、比較的強い。	砂粒・細砂・雲母 不良(二次焼成)	Y 50%
		B 4.45				
		C 8.0				
1667	須恵器 高台付杯	B(4.0)	底部は外周部がやや丸く、鈍く凹曲して体部に移行する。体部は直線的に立ち上がる。底部のやや内側に、短く外側へふんばる高台が付く。	水挽き整形。 底部は回転ヘラ削り後、高台粘り付け。内・外面共に水挽き痕は強い。	砂粒・細砂・雲母 良好 灰色	Y 30%
		C 13.3				
		D 11.0				
		E 1.2				
1668	土師器 甕	A(14.2)	軽く強った体部から、くの字状に屈曲し口縁部に至る。口縁部端部は、軽く上方につまみ出している。	巻き上げ成形。 口縁部は横ナデ調整。体部内面はナデ調整で、外面は刷毛が激しく調整不明。	砂粒(多)・雲母 普通(二次焼成)	X-Y 30%
		B(10.5)				
1669	土師器 甕	A(23.6) B(28.3)	体部は最大径を上位に有し、短く強く外反する口縁部が付く。端部は内傾し内側に小さな段をなす。	巻き上げ成形。 口縁部は横ナデ調整。体部上位から中位にかけてはナデ。下位は幅5mmの縦位のヘラ磨き。	砂粒 普通(二次焼成) 明赤褐色	X 70%

25号竪穴住居跡 (H11号) (第136図 PI.30)

本跡はM6a区を中心に確認され、標高24.7mの平坦面に立地する。平面形は主軸方向N-11<sup>0</sup>-Eを指す、一辺2.75mの隅丸方形を呈し、北壁のほぼ中央部にカマドが構築されている。

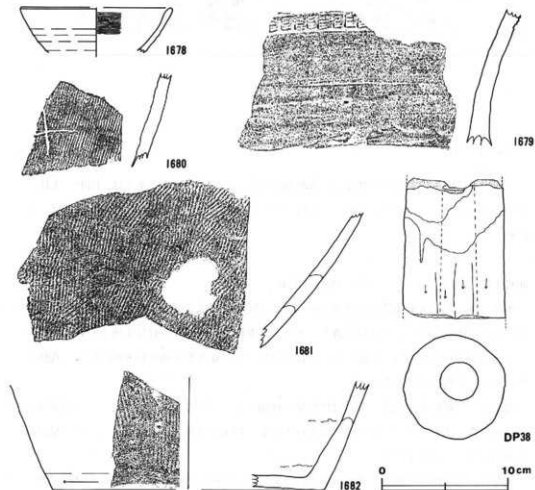


第136図 25号竪穴住居跡実測図

覆土は、おおむね5層に分けられるが黒褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。床面はゆるやかな起伏をもち、中央部に向ってやや低くなり、全体的に踏み固められている。中央部には77×56cm、深さ18cmのP1、43×28cm、深さ20cmのP2が確認され、いずれも楕円形を呈している。壁は45cm程の高さで、やや外傾して立ち上がり、北壁下の西半部と西壁下中央部から東壁下南半部に幅15～20cm、深さ5cm程の壁溝が存在する。柱穴は確認できなかった。なお壁外から径30cm、深さ15～40cmの柱穴状ピットが8か所確認されている。

カマドは焚口から煙道部まで0.66m、焚口幅0.65mで、軸は設けられず壁外へ掘り込んだだけの構造である。焚口は床面と同じ高さで、火床から約45度の傾斜で立ち上がる。火床には輪羽口を転用した支脚が立てられ、その上部に須恵器片が重ねられている。

遺物は、すべてカマド内から出土し、須恵器、土師器、支脚（輪羽口の転用）で、いずれも本住居に伴うものとみられる。



第137図 25号竪穴住居跡出土遺物実測図



出土遺物観察表 (第137図)

番号	器種	法庫	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1678	土師器 杯	A (11.9) B ( 3.7)	口縁部から体部にかけての破片で、体部は内側しながら立ち上がる。口縁部端部は丸く取られている。	水挽き整形。 口縁部は横ナゲ調整で、体部内面は横位のへう磨きで、並色処理されている。	砂粒・細砂 褐色(黒色) 普通	カマド 25%
1679	須志器 甕		大甕の頸部破片で、わずかに外反しながら立ち上がる。	水挽き整形。 浅い凹線の間に、4本の櫛状工具による押し引き文が施されている。	砂粒(多)・細砂 灰色 普通	カマド 破片
1680	須志器 甕		大甕の体部破片で、十印のへう記号が施されている。	叩き整形。 外面は斜位の平行叩き整形で、内面にはあて具痕がわずかに残る。	砂粒・細砂・雲母 灰色 やや不良	カマド 破片
1681	須志器 甕		大甕の体部破片で、大きく外傾することから底部に近い部分とみられる。	叩き整形。 外面は斜位の平行叩き整形で、内面はア+具痕を消すナゲ調整。	砂粒・細砂・雲母 灰色 やや不良	カマド 破片
1682	須志器 甕	B ( 8.8) C (21.5)	底部は平底で、体部はやや外傾して立ち上がる。 底部に焼成時の砂のかたまりが付着している。	叩き整形。 体部外面は縦位の平行叩き整形で、体部下端は凹位へう磨き調整。内面はナゲ調整。	小石・砂粒 灰色 良好	カマド 破片
DP38	支脚	長さ 11.2 径 8.0 孔径 3.0	先端、基部ともに欠損している。 注、孔径ともに先端に行くに従い、若干細くなる。先端部には鉄分が付着している。	外面は縦位のへう磨きが施され内面にもへうの痕跡がみられる。	砂粒・細砂	カマド

## 2. 土坑

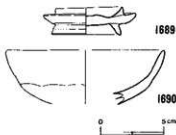
該期の土坑は、E7, G7区を中心に72基程確認されている。それらの多くは、円形の土坑で、遺物は皆無に近い。ここでは、それらの土坑のうち5基の土坑のみ注出して記述し、他は一覧表で掲載する。

### 46号土坑 (旧128号土坑) (第139図 PL31)

本跡はD6a区から確認され、西側3mには1号竪穴住居跡が位置している。東壁部においては、47号土坑、南壁部においては31号溝と、それぞれ重複し、本跡は、47号土坑より新しく、31号溝より古いものとみられる。平面形は、長軸方向N-22°Wを指す隅丸長方形を呈し、規模は、長軸1.84m、短軸1.56mである。

覆土は、黒褐色土を主体とし、自然堆積の榛州を呈している。底面は、ロームを約35cm掘り下げた掘り方の上に、ローム混じりの暗褐色土を2~10cm程充填し、底面としている。壁は、若干の傾斜をもって立ち上がる。

遺物は、北東隅の床面から須恵質の高台付皿(第138図-1689)が、正立した状態で出土している。



出土土器 (第138図 PL63)

1689は、口径5.2cm、器高2.2cm、高台径5.3cmで、皿部の内側に受け部が付けられている。底部切り離しは回転ヘラ切りである。

第138図 土坑出土土器実測図

65号土坑 (IH24号土坑) (第139図)

本跡はD7g4区を中心として確認され、西側11.5mには62号土坑、北側10mには64号土坑が位置している。平面形は、ほぼ円形を呈し、規模は、径1.45m、深さ1.5mである。

覆土は、黒褐色土を主体とし、上層及び中層にはロームブロックを含んでいるが、自然堆積の様相を呈している。底面は、ほぼ平坦で、壁は、底面と明瞭な境をなさずに、ほぼ垂直に立ち上がるが、下位においては部分的にオーバーハングしている。

遺物は、覆土上層から阿玉台式土器片4片、磨石1点、凹石1点、鉄滓1点が出土している。

84号土坑 (IH46号土坑) (第140図)

本跡はF7d8区を中心として確認され、北側1.5mには83号土坑、南側3.5mには5号竪穴住居跡が位置している。平面形は、円形を呈し、規模は、径1.4m、深さ1.22mである。

覆土は、黒褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。底面は皿状を呈し、壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、上位で外側へ開いている。

遺物は、覆土中層から阿玉台式土器片2片、砥石1点が、流れ込んだ状態で出土している。

264号土坑 (IH415号土坑) (第143図 PL31)

本跡はG7e区を中心として確認され、周囲には、256、258、263、265、269、270号土坑等が近接して存在している。平面形は円形を呈し、規模は、径1.3m、深さ0.42mである。

覆土は、褐色土と黒褐色土が互層をなし、大部分の層にロームブロックが含まれ、人為的堆積の様相を呈している。底面は、皿状を呈するほかは、ほぼ平坦で、壁は、底面と明瞭な境をなさずに、若干内傾して立ち上がり、断面はフラスコ状を呈している。

遺物は、覆土から阿玉台式土器片9片が出土している。

267号土坑 (旧416号土坑) (第144図 PL31)

本跡はG7b6区から確認され、東側に266号土坑、南側に268号土坑、西側に273号土坑が、近接して存在している。平面形は、ほぼ円形を呈し、規模は、径1.6m、深さ0.5mである。

覆土は、下層に褐色土、中・上層は黒褐色土が堆積し、ほとんどの層にロームブロックを含み、人為的堆積の様相を呈している。底面は、東側が若干低くなる以外は平坦で、壁は、床面と明瞭な境をなさずに内傾して立ち上がり、断面はフラスコ状を呈している。

遺物は、覆土から阿玉台式土器片15片が、流れ込んだ状態で出土している。

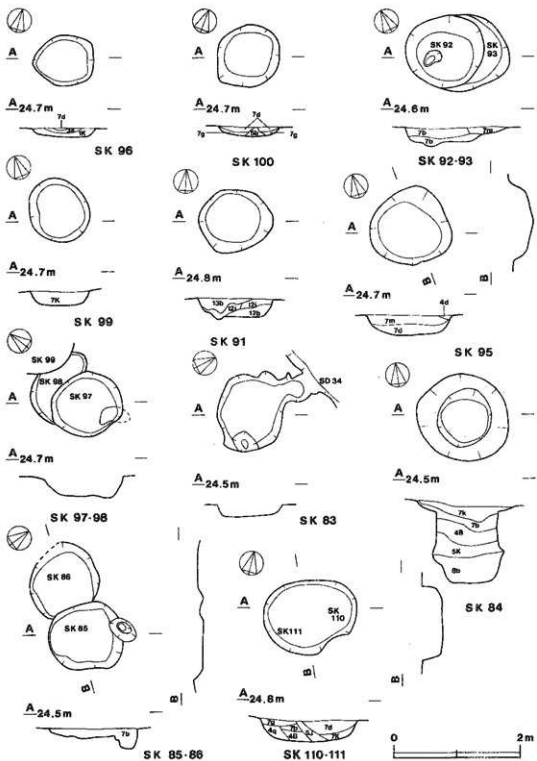
表14 平安時代土坑一覧表

土坑 番号	旧 番号	位置	平面形	長径方向	規 模 (m)			底面	覆土	出土遺物	形態分類	備 考	図版番号
					長径×短径	深さ							
2	47	B6ez	楕円形	N-16°-W	1.51×1.12	0.14	平坦	N		II B2a		第139図	
4	93	B6ez	不整形円形	N 83°-E	1.36×(1.07)	0.12		N		II B2a		第148図	
19	385	C6aa	円形		0.85×0.80	0.17	皿状	MN		I B1a		第139図	
44	168	D6es	円形		1.20×1.12	0.36	平坦	M		I A2a		*	
45	124	D6ds	円形		1.08×1.06	0.22	平坦	MN		I A2a		*	
46	128	D6ds	真九長方形	N 22°-W	1.84×1.56	0.32	平坦	M	須恵1 (Y)	IV A1a	始床、47と重複	*	
60	116	D6gs	円形		1.06×1.04	0.30	平坦	N		I A2a		*	
65	24	D7hs	不整形円形		1.48×1.44	1.50	平坦	MN	阿4、スラグ1 (X上) 石2	I A2c		*	
69	395	D7gs	円形		0.98×0.85	0.09	平坦	MN		I B1a		*	
70	396	D8gs	円形		1.16×1.07	0.21	平坦	MN		I A2a		*	
72	393	D8dz	円形		1.19×1.17	0.22	平坦	MN	横3、阿2	I B2a		*	
73	392	D8ds	円形		1.10×1.09	0.19	平坦	MN		I B2a		*	
74	397	D8es	楕円形	N-53°-W	1.35×1.15	0.19	皿状	MN	阿1 (Y)	II B2a		第85図	
78	44	F8bs	不整形円形	N-46°-W	1.48×1.08	1.32	皿状	NM		II A2c		第139図	
83	15	E7cs	(不整形)	(N-14°-W)	1.68×1.16	0.20	平坦	(N)	阿5 (X上)	VA2a		第140図	
84	46	E7ds	円形		1.46×1.40	1.22	皿状	M	阿2、磁石1	I A2c		*	
85	14	E7cs	楕円形	N 38°-E	1.20×1.06	0.18	平坦	(N)	阿2 (X下)	II B2a		*	
86	59	E7cs.cs	(楕円形)	N-34°-W	1.20×1.04	0.02	平坦			I B2a		*	
91	57	E7cs	円形		1.17×1.03	0.32	平坦	(N)		I A2a		*	
92	10	E7cs.cs	円形		1.24×1.14	0.30	平坦	N		I B2a		*	

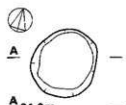
土坑 番号	出 番号	位 置	平面形	長 径 方 向	規 模 (m)		底面	覆土	出 土 遺 物	形態分類	備 考	図版番号
					長径×短径	深さ						
95	34	E7b <sub>h</sub>	不整形	N-52°-W	1.59×1.50	0.38	平坦	MN		I A2a		第140図
97	20	E7b <sub>c</sub>	円 形		1.05×1.05	0.36	平坦			I A2a	98と重複	*
99	19	E7b <sub>6</sub>	円 形		1.05×0.95	0.20	平坦	N 石 1		I A2a	98,100と重複	*
100	36	E7b <sub>8</sub>	円 形		1.24×1.24	0.14	平坦	(M)		I A2a		*
110	21	E7b <sub>3</sub>	(円形)		(0.94)×0.90	0.32	平坦	(M) 土師 1		I A1a	111より新	*
111	22	E7b <sub>5</sub>	円 形		1.25×1.20	0.34	平坦	(M) 阿 1		I A2a	110より古	*
137	199	E6a <sub>2</sub> a <sub>2</sub>	楕円形	N-21°-E	1.57×1.08	0.80	平坦	M		II A1b		第141図
195	26	E7c <sub>1</sub>	円 形		1.18×1.16	0.42	平坦	M		I A2a		*
198	25	E7c <sub>2</sub>	円 形		1.08×1.03	0.34	平坦	MN 阿 1, 土師 1		I A2a		*
205	8	E7e <sub>3</sub>	円 形		0.82×0.82	0.24	皿状	N		I B1a		*
206	31	E7f <sub>2</sub>	不整形		1.24×1.14	0.18	凹凸	(M)		I A2a		*
211	7	E7f <sub>5</sub>	円 形		(1.30)×1.30	0.52	平坦			I D2b	SD-3より古	*
212	5	E7f <sub>6</sub>	(楕円形)	N-53°-W	1.50×1.50	0.46	平坦	N 阿 3 (X上)		I D2a	SD-3より古	*
213	23	E7f <sub>6</sub>	円 形		1.18×1.08	0.18	皿状	MN		I B2a		*
214	4	E7f <sub>6</sub> f <sub>1</sub>	円 形		1.50×1.36	0.72	平坦	MN		I D2b	SD-3より古	*
215	175	E7e <sub>6</sub> f <sub>1</sub>	円 形		1.04×1.04	0.26	平坦	M 阿 1 (X上)		I A2a		*
216	3	E7e <sub>c</sub>	円 形		1.13×1.00	0.34	平坦	MN		I D2a		*
219	56	E7d <sub>6</sub>	隅丸長方形	N-31°-E	1.23×1.00	0.14	平坦	M 阿 1 (X上)		II A2a		*
239	401	F7e <sub>7</sub>	円 形		1.12×1.09	0.15	平坦	N		I B2a		第142図
240	402	F7h <sub>6</sub>	隅丸方形	N-13°-W	1.67×1.44	0.13	平坦	MN		II B2a		*
245	405	F7i <sub>1</sub>	円 形		1.05×1.00	0.19	平坦	M 碓 2		I A2a		*
246	404	F7i <sub>1</sub>	円 形		1.36×1.30	0.23	皿状	M		I B2a		*
247	406	F7j <sub>1</sub>	円 形		1.13×1.10	0.14	平坦	M 碓 2		I A2a		*
249	407	F7j <sub>1</sub>	楕円形	N-64°-E	(1.10)×0.97	0.09	皿状	N		II B2a		*
250	438	F7j <sub>1</sub>	円 形		1.10×1.10	0.10	皿状	M		I B2a		*
252	408	G7a <sub>7</sub>	円 形		1.47×1.42	0.20	皿状	MN 五輪 4		I D2a		*
253	409	G7a <sub>7</sub>	不整形	N-22°-E	1.35×1.15	0.12	皿状	M		II B2a		*
254	410	G7b <sub>7</sub>	円 形		1.22×1.20	0.25	皿状	M 阿 3		I D2a		第144図
255	412	G7b <sub>7</sub>	円 形		1.05×0.95	0.06	平坦			I B2a		第142図
256	413	G7b <sub>7</sub>	円 形		1.09×1.09	0.05	平坦	M		I B2a		第143図

土坑番号	旧番号	位置	平面形状	長径方向	規模 (m)		底面	覆土	出土遺物	形態分類	備考	図版番号
					長径×短径	深さ						
257	442	G7b7	不整形		1.27×1.26	0.18	平坦	MN		I B2a		第143図
258	419	G7c7	円形		1.25×1.20	0.20	平坦	MN		I B2a	258と重複	第142図
259	420	G7c7	円形		1.20×1.18	0.19	平坦	M		I B2a	258と重複 260より新	◇
260	411	G7c7	円形		1.15×(1.10)	0.13	平坦			I B2a	259より古	◇
261	421	G7c7	円形		1.35×1.33	0.31	屈状	M		I D2a		第143図
262	439	G7d7	不整形		1.45×1.32	0.43	平坦	M	五輪1, 石1	I D2a		◇
263	423	G7e6	円形		1.70×1.60	0.37	平坦	MN	阿8, 石1	I D2a		◇
264	415	G7c7	円形		1.30×1.25	0.42	平坦	MN	五輪1, 阿8	I D2a		◇
265	440	G7b6	楕円形	N-49°-E	(1.65)×1.25	0.16	平坦	M	? 2, 石1	II B2a	266より新	◇
266	414	G7b6	楕円形	N-50°-E	1.20×(1.00)	0.15	屈状	M		II B2a	265より古	◇
267	416	G7b6	円形		1.62×1.58	0.50	平坦	MN	? 15	I D2b		第144図
268	417	G7b6	不整形	N-42°-W	1.30×(0.65)	0.24	平坦		五輪1, 阿, 礫1	I B2a	269と重複	第143図
269	418	G7b6	円形		1.68×1.65	0.36	屈状	M	阿2	I D2a	268と重複	◇
270	422	G7e6	円形		1.14×1.06	0.25	平坦	MN	五輪1	I B2a		第144図
271	424	G7c4	円形		1.83×1.74	0.39	屈状	MN	五輪2, 環7	I D2a		◇
272	425	G7e5	楕円形	N-23°-W	1.70×1.55	0.08	平坦	M	石1	II B2a		◇
273	426	G7b5	不整形	N-10°-E	1.60×1.57	0.31	屈状	MN	環1	V B2a		◇
274	427	G7b5	円形		0.76×0.74	0.05	平坦	M		I B1a		◇
275	428	G7b5	隅丸方形	N-15°-W	1.01×1.00	0.08	屈状	M	環1	III B2a		◇
276	434	F7b3	円形		1.54×1.45	0.24	屈状	MN	五輪7, 阿1	I B2a		◇
277	435	G7b3	円形		0.90×0.88	0.21	平坦	N	阿	I B1a		◇
279	441	G7a7	円形		1.15×1.05	0.10	屈状	MN		I B2a		◇
281	448	I5d6	円形		1.75×1.62	0.28	平坦		阿1, 礫1	I B2a		◇

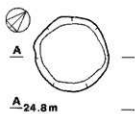




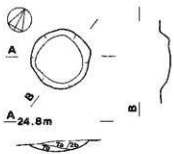
第140图 土坑实例图(17)



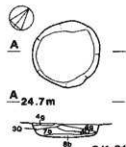
SK 198



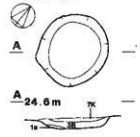
SK 195



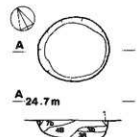
SK 205



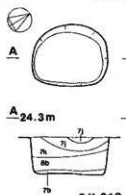
SK 215



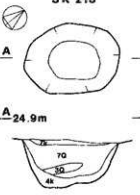
SK 213



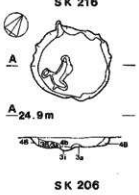
SK 216



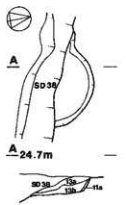
SK 219



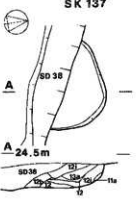
SK 137



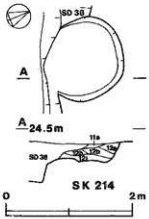
SK 206



SK 211



SK 212



SK 214

第141图 土坑实例图(18)